

洲本市

宮ノ谷遺跡

— (主) 洲本五色線 上加茂バイパス整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



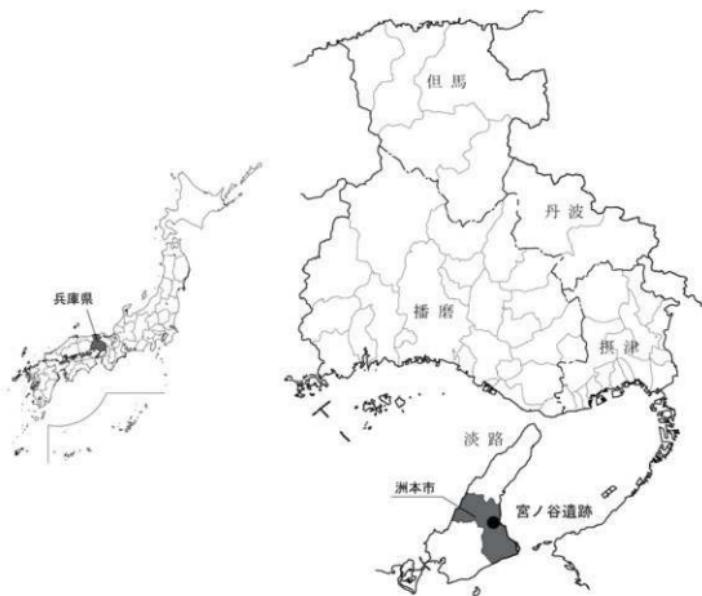
令和3（2021）年3月

兵庫県教育委員会

洲本市

宮ノ谷遺跡

—(主)洲本五色線 上加茂バイパス整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



令和3（2021）年3月

兵庫県教育委員会



遺跡の位置と周辺の空中写真（国土地理院 1975 年撮影、1/8000）



調査地遠景（東から）



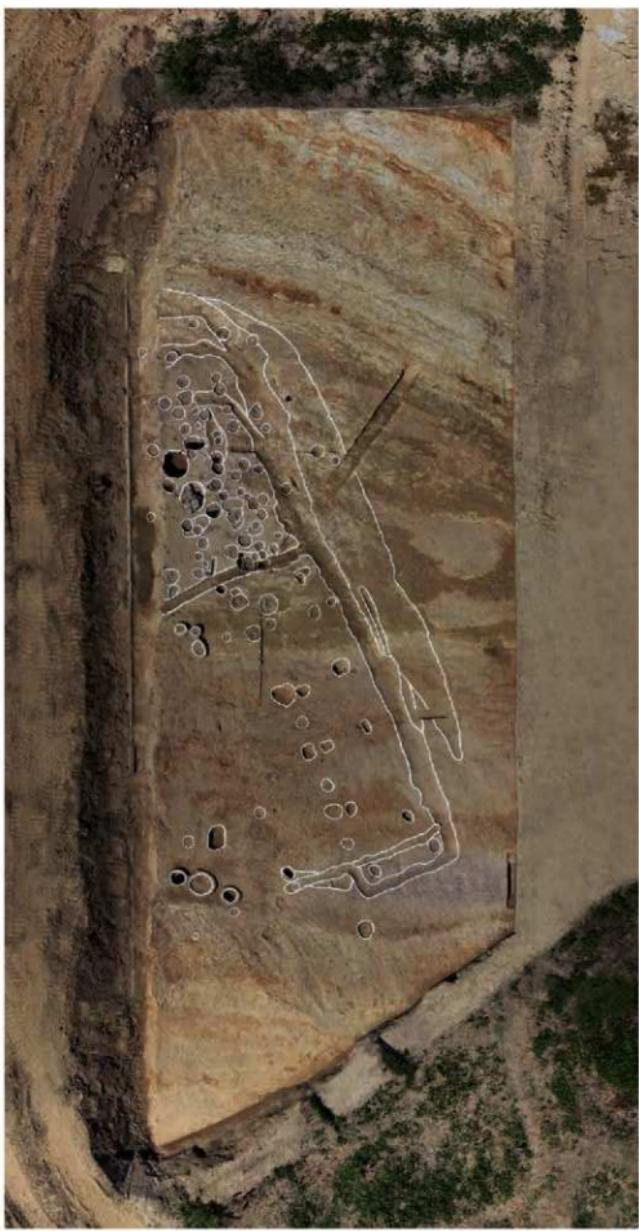
調査地遠景（北から）



調査地遠景（西から）



調査地遠景（南西から）



調査区全景オルソ写真



調査区全景（北東から）



調査区全景（南から）



SB02 P12 出土
備前焼壺（8）



SK14 出土
鑿（M3-1・2）



壁土破片 集合

例　言

- 1 本書は、洲本市上加茂に所在する宮ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(主)洲本五色線上加茂バイパス整備工事に伴うもので、淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体に兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。また、出土品整理は、同事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が委託を受け整理機関として実施した。
- 3 調査の推移は次のとおりである。

(発掘作業)

試掘・確認調査 平成 29 年 4 月 20・21 日、6 月 6・9 日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号 2017014）

本発掘調査 平成 29 年 8 月 1 日～9 月 1 日

調査実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号 2017095）

工事計画機関：淡路県民局洲本土木事務所

工事作業機関：栄和興業株式会社（下請：安西工業株式会社）

空中写真測量機関：株式会社アコード

(出土品整理作業)

平成 31 年 4 月 16 日～令和 2 年 3 月 31 日

令和 2 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

- 4 本書の編集は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 堀内拓郎が、同非常勤嘱託員の柏木明子の協力を得て行った。本書の執筆は、堀内拓郎が基本的に担当した。付章のみ株式会社パレオ・ラボ 小林克也・黒沼保子が担当した。
- 5 調査成果の測量は、電子基準点（基準点名：「南淡」・「洲本」・「淡路一宮」）を既知点として 3 級基準点を新たに設置して使用した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第 V 系に属する。
- 6 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準 (T.P.) を基準とし、1 等水準点（標識番号：第 286 号・第 286 号・第 287 号）をもとに、3 級基準点と同一杭を 3 級水準点として新たに設置して使用した。
- 7 遺物写真撮影は、国際文化財株式会社に委託して実施した。
- 8 出土木材の樹種同定については、株式会社パレオ・ラボに委託して実施し、その結果については付章として掲載した。
- 9 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、関係各機関、及び以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表す。

浦上雅史・岡田章一・岸本一宏・金田匡史・山上雅弘

以上、敬称略・50 音順

凡 例

- 1 遺物には通し番号を付している。ただし、金属製品、壁土には、その頭にそれぞれM、Eをつけて土器類と区別している。
- 2 土器類の実測図は、種類ごとに以下のように断面の表現を区別している。
　弥生土器・土師器：白抜き ／ 陶器：薄い網掛け ／ 磁器：濃い網掛け
- 3 道構の名称は、調査時に頭に以下のような道構の種類を示す記号を表記して、そのそれに通し番号を付した。また、掘立柱建物については、これとは別に新たに番号を付与した。本書では、調査時に付与した名称のまま表記した。
　S B：掘立柱建物、P：柱穴、SK：土坑、SD：溝、SX：性格不明道構
- 4 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』を使用した。
- 5 卷頭写真図版1、挿図第3図、第4図、第5図、第12図、図版1には、国土地理院が所蔵する以下の空中写真・地形図を使用し、画像の一部切り落としと加筆を行った。

卷頭写真図版1：空中写真「CKK7410-C19-13」（1975年3月14日 国土地理院撮影）

第3図：地理院地図（電子国土 Web）標準地図及び起伏陰影図

第4・5図、図版1：自由図郭電子地形図25000「134.87-34.35-A1-y-20200618-094719-0000」

（2020年6月18日調整、図式は平成24年度電子地形図25000図式）

第12図：（上段）空中写真「USA-R517-4-124」（1947年10月8日 米軍撮影）

　　〈中段〉空中写真「CKK7410-C19-13」（1975年3月14日 国土地理院撮影）

　　〈下段〉空中写真「KK863X-C7-10」（1986年4月13日 国土地理院撮影）

- 6 引用・参考文献の記載のうち、兵庫県教育委員会が発行する兵庫県文化財調査報告については、発行元名の兵庫県教育委員会の名称を割愛する。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の経緯・経過	
第1節 発掘調査	7
1. 調査の経緯	7
2. 調査の経過	8
3. 発掘調査の体制	9
第2節 出土品整理作業	10
1. 出土品整理作業	10
2. 整理作業の体制	10
第3章 調査の成果	
第1節 調査区の概観	11
1. 調査区の位置	11
2. 基本層序と土層の堆積	11
3. 遺構の検出	12
第2節 調査の成果	12
1. 検出遺構	12
第4章 出土遺物	
第1節 土器・陶磁器類	19
1. 遺構出土	19
2. 包含層出土	22
第2節 その他の遺物	24
1. 金属製品	24
2. 壁土	25
第5章 まとめ	
第1節 遺物・遺構について	27
1. 遺物について	27
2. 遺構について	29
第2節 総括 一宮ノ谷遺跡の評価	35
付 章 宮ノ谷遺跡出土柱材の樹種同定	38

卷頭写真図版目次

卷頭写真図版 1 遺跡の位置と周辺の空中写真	卷頭写真図版 5 調査区全景（北東から）
卷頭写真図版 2 調査地遠景（東から）	調査区全景（南から）
調査地遠景（北から）	卷頭写真図版 6 SB02 P12出土備前焼壺（8）
卷頭写真図版 3 調査地遠景（西から）	SK14出土墻（M3-1・2）
調査地遠景（南西から）	壁土破片集合
卷頭写真図版 4 調査区全景オルゾ写真	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第8図 人力掘削状況	9
第2図 遺跡の位置と洲本平野の地形	2	第9図 土壁構造模式図	26
第3図 遺跡の位置と洲本川周辺の地形	2	第10図 整の復元模式図と民俗例	28
第4図 周辺の遺跡	4	第11図 火災・整地段階前後の遺構変遷図	31
第5図 試掘・確認調査範囲位置図	7	第12図 調査地の位置と周辺地形の変遷	33
第6図 試掘・確認調査区位置図	8	第13図 宮ノ谷遺跡出土柱材の 光学顕微鏡写真	39
第7図 調査前の状況	9		

表目次

第1表 周辺の遺跡名一覧	4	第5表 遺物観察表（土器・陶磁器類2）	42・43
第2表 遺構変遷表	30	第6表 遺物観察表（金属製品）	42
第3表 樹種同定結果一覧	38	第7表 掲載壁土一覧表	43
第4表 遺物観察表（土器・陶磁器類1）	40・41		

図版目次

図版 1 調査区の位置	図版 9 遺構平面図・断面図（SB03・04・05）
図版 2 調査区土層堆積範囲図	図版10 遺構平面図・断面図（柱穴）
図版 3 調査区南壁土層断面図	図版11 遺構平面図・断面図（土坑）
図版 4 炭化物・焼土堆積土層断面図	図版12 遺構断面図（溝）
図版 5 調査区平面図	図版13 遺構平面図・断面図（石組み遺構）
図版 6 遺構平面図・断面図（SB01A）	図版14 出土遺物 1
図版 7 遺構平面図・断面図（SB01B）	図版15 出土遺物 2
図版 8 遺構平面図（SB02～05）、 遺構平面図・断面図（SB02）	図版16 出土遺物 3

写真図版目次

写真図版 1	調査区全景（南西から） 調査区全景（北から）	写真図版 8	PB04 P20（南から） P18（南から）
写真図版 2	遺構集中部（南から） 遺構集中部（北西から）		P26（東から） P25（東から）
写真図版 3	遺構集中部北半（南西から） 遺構集中部南半（北西から）	SB05	P36（北から） P30（南から）
写真図版 4	調査区南壁土層断面A-A' (北西から)		柱穴 P14（東から） P06（南から）
	調査区南壁土層断面A-A' 近景 (北から)	写真図版 9	土坑 SK07（南から） SK15（南から）
写真図版 5	第4層上部炭化物・焼土堆積範囲 近景（南西から）		SK01（南から） SK19（南から）
	第4層上部炭化物・焼土集中部近景 (西から)		SK14鑿冠部分（M3-2） 出土状況（南から）
	炭化物・焼土堆積部南側トレンチ断面 C-C'（南西から）		SK14鑿冠部分（M3-2） 出土状況近接（南から）
	炭化物・焼土堆積部北側トレンチ断面 B-B'（南西から）		SK14断面（東から） SK14断面近接（東から）
写真図版 6	SB01A PB04（南から） P89（南から） P89炭化材出土状況（南から）	写真図版10	溝 SD05・06断面h-h'（南から） SD04断面g-g'（東から） SD01・04分岐部分北西壁断面 e-e'（北西から）
	SB01B SK02（南から） SK03（南から） SK04（南から） SK05（南から） SK18（南から） SK17（西から） SK12（西から）		SD01・04分岐部分南東壁断面 f-f'（南東から） SD02東部断面b-b'（東から） SD01中央部断面a-a'（南から） SD02西部・SD01南東部断面 c-c'（西から）
写真図版 7	SB02 P12（東から） P12炭化材等出土状況 (北東から)		SD01南東部断面c-c'（西から） SD02西部断面c-c'（西から） SD01南西部断面d-d'（西から）
	SB03 P05（南から） P13（西から） P71（南から）	写真図版11	石組み遺構 SX01 検出状況 1（東から） 検出状況 2（東から）

検出状況 3 (北西から)	写真図版19 SX01出土土器類 (外面)
検出状況 4 (南から)	SX01出土土器類 (内面)
東西セクション断面a-a'	写真図版20 包含層 (炭化物・焼土層直上)
(南から)	出土土器類 (外面)
南北セクション断面b-b'	包含層 (炭化物・焼土層直上)
(西から)	出土土器類 (内面)
写真図版12 石組み遺構SX01	写真図版21 包含層 (炭化物・焼土層)
全景 1 (南から)	出土土器類 (外面)
全景 2 (北東から)	包含層 (炭化物・焼土層)
全景 3 (北東から)	出土土器類 (内面)
全景 4 (南西から)	写真図版22 包含層 (その他) 出土土器類 (外面)
全景 5 (南東から)	包含層 (その他) 出土土器類 (内面)
写真図版13 SB01B出土土器類 (外面)	写真図版23 出土金属製品 (A面)
SB01B出土土器類 (内面)	出土金属製品 (B面)
写真図版14 SB02出土土器類 (外面)	写真図版24 ①SK14出土盤 (M3-1)
SB02出土土器類 (内面)	②SK14出土盤 (M3-1) 基部分
写真図版15 SB03出土土器類 (外面)	③SK14出土盤冠部分 (M3-2)
SB03出土土器類 (内面)	写真図版25 ①出土壁土 I a 類
写真図版16 ①SB01B出土土器	②出土壁土 I b 類
②SB04出土土器	③出土壁土 I c 類
③柱穴出土土器	④出土壁土 II 類
④P06出土土器	写真図版26 ①出土壁土 III 類
⑤SK15出土土器	②出土壁土 IV 類
⑥確認調査No. 8-2出土土器	③出土壁土小舞交差部分 1
写真図版17 SD01出土土器類 (外面)	④出土壁土小舞交差部分 2
SD01出土土器類 (内面)	
写真図版18 SD04出土土器類 (外面)	
SD04出土土器類 (内面)	

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

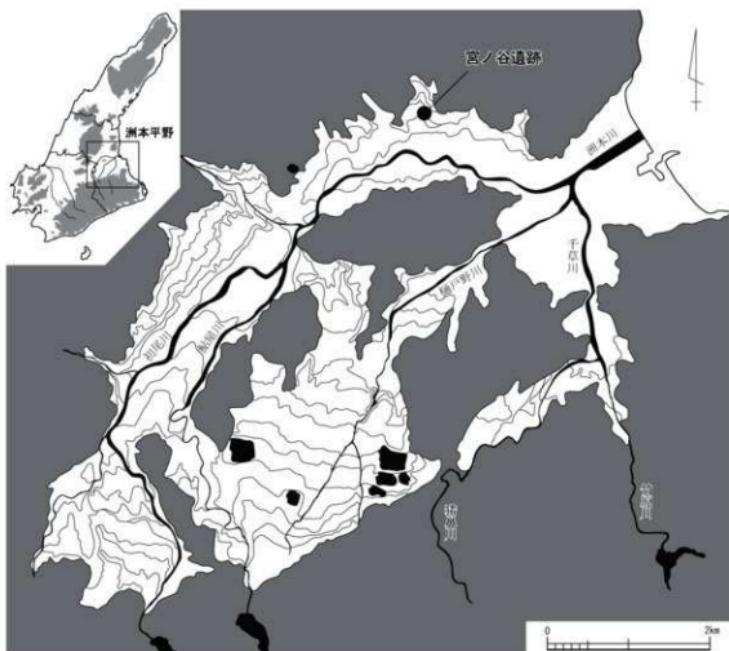
宮ノ谷遺跡は、兵庫県南部にあたる淡路島の洲本市上加茂に所在する。淡路島は、瀬戸内海の東端に位置する北東から南西にかけて細長く伸びる島で、南北約53km、東西は北部では約5~8km、南部では約22~28kmと南側が広くなり、総面積約592㎢の瀬戸内海最大の島となっている。その南方約4kmには外周約10kmの沼島が浮かぶ。淡路島の東は大阪湾、西は播磨灘、南は紀伊水道に面し、北端は明石海峡、南東端は紀淡海峡、南西端は鳴門海峡を臨み、海を介して播磨地域、畿内・紀伊地域、四国地域を結ぶ要衝となっている。淡路島には、行政区として淡路市・洲本市・南あわじ市があり、本遺跡が所在する洲本市は、淡路島の中央から南東部に位置し、北側は淡路市、南側は南あわじ市に接する(第1図)。

淡路島の地形は、島の北部には津名山地、南部には南西側に西淡山地、南東側に論鶴羽山地が広がり、北部と南部の山地の間に三原平野と洲本平野が形成される。島の北部は山地が大半を占め、大きな河川や平野の発達は認められない。津名山地は、六甲山地と連続する北東から南西の方向性をもっており、北側に標高515mの常隆寺山や標高522mの妙見山を最高峰として、小さな起伏を持った緩やかな高原状の地形が広がり、南側には島の中央部に概ね位置する標高448mの先山が最高峰としてそびえ、南側に標高約278mの感応寺山、東西に丘陵や小規模な山地が広がっている。また、南西側の西淡山地には、標高274mの南辻寺山を主峰とする標高約100~200m級の小さな山塊が広がり、南東側には論鶴羽山地が、標高約608mの論鶴羽山を最高峰として標高約525mの兜丸山や標高約569mの柏原山が連なって東西方向に広がっている。三原平野は、津名山地・西淡山地・論鶴羽山地に囲まれており、これらを源流として西流する倭文川・成相川・三原川・大日川などの河川による埋積によって島の西側に形成され、島内最大の面積を有する。そして、洲本平野は、津名山地と論鶴羽山地の間に東流する洲本川とその支流による埋積によって島の東部に形成される。洲本川の支流としては、南側の論鶴羽山地から初尾川・鮎屋川・桶戸野川・猪鼻川・千種川が、北側の津名山地からは奥畑川・安田川・糸迦堂川・巽川等が流下する(第2図)。

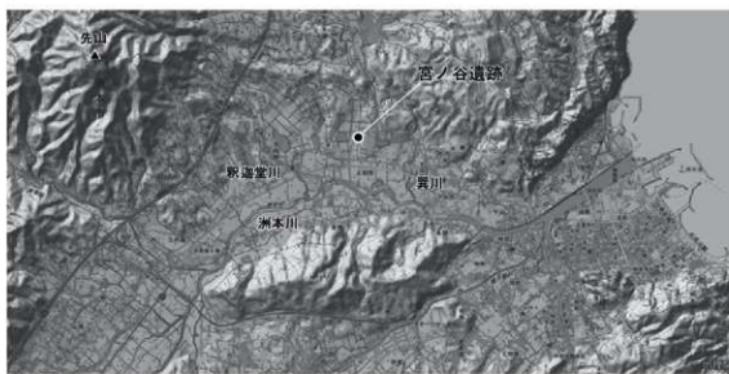
宮ノ谷遺跡は、洲本平野の北側、洲本川左岸域に位置する。先山の麓から東側に向けて派生した丘陵には、洲本川に向かって南東から南方向に多数の細かな開析谷と尾根が複雑に形成されている。このうち、糸迦堂川と巽川に挟まれた東側丘陵尾根の西側斜面に造成された平坦地上に宮ノ谷遺跡は立地する。圃場整備前の周辺の開析谷の斜面には、等高線に沿って平坦地が造成されて棚田状になつておる、本遺跡の立地地点はその一部にあたる。宮ノ谷遺跡が所在する谷は字「宮ノ谷」と称され、その西側には圃



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡の位置と洲本平野の地形



第3図 遺跡の位置と洲本川周辺の地形

場整備前に存在した小尾根を挟んで字「大谷」と称される谷と、その谷口に「里池」と呼ばれる池がある。その南西丘陵尾根の先端部には延喜式内社の賀茂神社（上加茂神社）が鎮座する（第3図）。

宮ノ谷遺跡が立地する尾根部分の地質については、地質図では大阪層群愛宕累層のうちシルト～粘土・砂及び礫が互層となる鮎原互層の分布域にあたる。後述する調査時に確認した地山層（基盤層）はこれに該当するとみられる。

第2節 歴史的環境

洲本平野の周辺には、集落跡や古墳などの遺跡が多数存在しており、なかでも弥生時代の集落跡が多く確認されている。一方、宮ノ谷遺跡の北側、先山の東側に広がる丘陵や台地に位置する洲本市中川原町あたりでは、平野部に比べて遺跡数が少なくなり、さらに北側の安平町の岩戸川の流域部分で遺跡数が増える傾向にある。ここでは宮ノ谷遺跡周辺の主な遺跡を中心に概観しておく（第4図、第1表）。

旧石器時代

宮ノ谷遺跡（1）の周辺では、旧石器時代の遺跡については確認されていない。

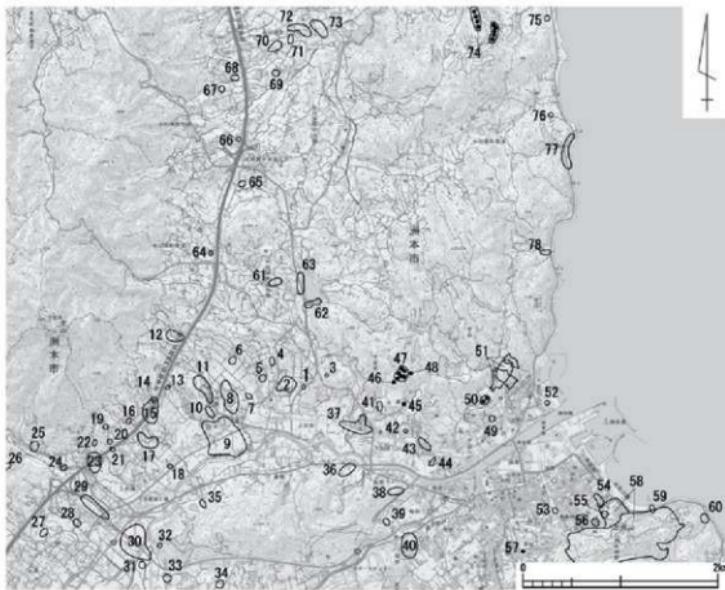
縄文時代

洲本川に面した武山遺跡（43）が確認されており、前期から中期の遺物が出土していることから、周辺に集落の存在が推定されている。

弥生時代

縄文時代に引き続き、武山遺跡では集落跡が見つかっており、前期の堅穴状遺構が検出されている。そのほか前期から認められる遺跡としては、遺物が見つかった空の谷遺跡（42）、前期の土器を包含する土坑が検出された波毛遺跡（30）、前期末の溝が検出された下内膳遺跡（9）がある。

中期以降には、洲本川の中上流域や南側でも遺跡の分布が広がり、洲本平野には多数の遺跡が確認されるようになる。洲本川北岸域の平野部や丘陵部では、武山遺跡で円形周溝墓が、下加茂遺跡（37）で中期の方形周溝墓や水田跡が見つかっている。また、下加茂岡遺跡（41）・下内膳遺跡（9）では中期～後期の集落跡が見つかっており、下内膳遺跡では後期の水田や水路も検出されている。そして、先山南東麓の丘陵や台地部分にも集落跡が広がっており、中期末の大谷遺跡（4）、後期後半～末の毛次遺跡（7）・由良木遺跡（6）・曇華池遺跡（5）、後期前半の西の森遺跡（11）、後期前半～後半の中津原遺跡（12）・大森谷遺跡（15）・森遺跡（23）・寺中遺跡（29）が存在する。中津原遺跡では11棟の堅穴住居跡が見つかっているほか、寺中遺跡では中期末及び後期末の住居跡とともに方形周溝墓群が見つかっており注目される。さらに、洲本川中流の低地部分に位置する波毛遺跡では、中期後半の住居跡、掘立柱建物跡のほか、工房跡と推定される遺構や水田に伴う水路などが検出されている。一方、洲本川の南側では、三熊山の北麓に製塩土器などが見つかった旧城内遺跡（55）のほか、山下町遺跡（56）・居屋敷遺跡（53）などの散布地が分布する。また、桑間の丘陵東側裾にも後期末の馬木遺跡（40）や中期末～後期前半の亀谷山遺跡（38）・尾崎遺跡（36）などの散布地が広がる。そして、宮ノ谷遺跡の北側、先山東側から北東の中川原町から安平町の丘陵・段丘部分には、菱環鉢式銅鐸「中川原銅鐸」の出土が伝えられる中川原遺跡（69）があるほか、集落跡として五十田遺跡（68）や戌ノ前遺跡（70）・御屋遺跡（71）・大寺ヶ市遺跡（72）・上入ヶ市遺跡（73）などがあり、中期の遺跡が多い。中でも調査さ



第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡名一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	宮ノ谷遺跡	27	二反田遺跡	53	居屋敷遺跡
2	里池遺跡	28	鶴根原遺跡	54	山下町居屋敷遺跡
3	バケの森古墳	29	寺中遺跡	55	旧城内遺跡
4	大谷遺跡	30	波毛遺跡	56	山下町遺跡
5	桑原池遺跡	31	戸狩遺跡	57	曲田山古墳
6	白良木遺跡	32	先山古墳	58	御本城跡
7	毛次遺跡	33	栗林遺跡	59	霞台場跡
8	コカイチ遺跡	34	庄慶陶瓦窯跡	60	官崎遺跡
9	下内膳遺跡	35	桑間ナガダ遺跡	61	西の下道跡
10	安宅遺跡	36	尾崎遺跡	62	三木田池遺跡
11	西の森遺跡	37	下加茂洞跡	63	清間遺跡
12	中津原遺跡	38	亀谷山遺跡	64	新池遺跡
13	野神遺跡	39	亀谷古墳	65	オヶ本遺跡
14	新白遺跡	40	馬木遺跡	66	櫻井遺跡
15	大森谷遺跡	41	下加茂洞遺跡	67	神子ヶ原遺跡
16	大森谷浜田遺跡	42	空の谷遺跡	68	五十田遺跡
17	大森谷里池遺跡	43	武山遺跡	69	中川原遺跡
18	方城遺跡	44	宇山遺跡	70	戎ノ前遺跡
19	尾筋丸山遺跡	45	下加茂岡古墳	71	御屋遺跡
20	尾筋同遺跡	46	コヤダニ古墳	72	大寺ヶ市遺跡
21	向上遺跡	47	下加茂岡群集墳1~6号墳	73	上人ヶ市遺跡
22	ハタ遺跡	48	宇山古墳	74	厚浜台群集墳1~9号墳
23	森遺跡	49	駒遺跡	75	安平手浜遺跡
24	大西遺跡	50	宇山牧場古墳1・2号墳	76	石風呂古墳
25	粟原遺跡	51	炬口城跡	77	名子の浜遺跡
26	羽風山城跡	52	炬口台場跡	78	石ヶ谷遺跡

れた中津原遺跡と同様の地形に立地する亥ノ前遺跡では、後期前半の円形住居が15棟検出されたほか、赤色顔料生産に用いられた石杵も出土しております。

古墳時代

淡路島には基本的に古墳は少なく、前方後円墳などの大型の古墳は確認されていない。洲本平野周辺も同様の様相を示す。

前期古墳としては、コヤダニ古墳（46）があり、出土状況不明ながら三角縁神獣鏡が見つかっている。そのほかに前期に遡る可能性があるものとしては、宇山牧場1号墳（50）があり、五銘鏡や素文鏡が出土している。緑泥片岩の箱式石棺を有する下加茂岡古墳（45）は紀伊地域との関連で注目され、宮ノ谷遺跡の北東に位置するバベの森古墳（3）も緑泥片岩の箱式石棺の存在が推測されている。

中期古墳については、これまでに確認されていない。

後期古墳については、淡路島最大の石室規模を有する曲田山古墳（57）が単独で存在しているほか、群集墳として厚浜台群集墳1～9号墳（74）や、下加茂岡群集墳1～6号墳（47）がある。また、横穴式石室を有する古墳としては、宇山古墳（48）・亀谷古墳（39）・先山古墳（32）、そして海岸近くに立地する石風呂古墳（76）が認められる。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代と同様に下内膳遺跡（9）や森遺跡（23）・波毛遺跡（30）などが引き続き存在する。下内膳遺跡では前期の竪穴住居が見つかっているほか、森遺跡では竈が付属する竪穴住居が検出され、波毛遺跡では前期から中期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかっている。また、淡路島では製塩遺跡が多く確認されており、洲本平野では旧城内遺跡（55）・山下町居屋敷遺跡（54）があり、宮ノ谷遺跡北側では、安乎大浜遺跡（75）や名子の浜遺跡（77）・石ヶ谷遺跡（78）がある。そして窯跡としては、奈良時代まで続く庄慶陶瓦窯跡（34）が挙げられる。

古代

律令期の淡路島は南海道の一国である淡路國として編入され、『延喜式』にみる贊の貢進国の記述や木簡の記載から「御食国」と呼ばれるなど、早くから畿内の影響下に取り込まれてきた。淡路國府は三原平野に所在し、南あわじ市三原町国府及び市周辺に推定されている。淡路國は三原郡と津名郡の2郡があり、洲本平野は津名郡に属する。郡衙は淡路市津名町志筑に設置されたと推定されている。洲本平野には、物部郷・加茂郷・広田郷があり、物部郷は千草川流域、加茂郷は洲本川下流域から中流域、広田郷は中流域から上流域に比定されている。南海道の位置は、紀伊国から海峡を渡って洲本市由良で島に上陸し、洲本平野を通って国府のある三原平野に至り、南の福良を通じて阿波国へ渡る道程が考えられている。ただし、諸説あって詳細は定かではない。途中には、島内に由良・大野・福良の3駅が設置され、洲本平野には大野駅が洲本市大野付近に比定されている。

遺跡については、集落跡として下内膳遺跡（9）・曇華池遺跡（5）・大森谷遺跡（15）・波毛遺跡（30）・里池遺跡（2）などがある。中でも、下内膳遺跡では倉庫とみられる縦柱のものを含む比較的大きな掘立柱建物が検出されており、碇や瓦片が見つかることから官衛的性格が想定されており注目される。また曇華池遺跡では、治水灌漑施設や水田跡、掘立柱建物が検出されている。里池遺跡は、宮ノ谷遺跡と同じ開析谷内の遺跡西側近接地に存在し、製塩土器が見つかっている。窯跡としては、庄慶陶瓦窯跡（34）・土生寺窯跡などがあり、須恵器や瓦を生産していた。そのうち、土生寺窯跡では、藤原宮と同范の軒丸瓦が生産されており、島内では同范瓦は志筑庵寺から出土している。なお、平安時代の遺跡については、複数の散布地が確認されるものの遺跡数としてはあまり多くない。

中世

律令体制が瓦解する一方、洲本平野では物部莊・広田莊等の荘園が成立し、宮ノ谷遺跡が所在する加茂郡は加茂郷として国衙領に残されている。鎌倉時代では、淡路國の守護に佐々木氏、次いで長沼氏が任命される。当時の政治拠点となる守護所は、国府東の南あわじ市八木に所在する養宜館であり、長沼氏の居館とされる。南北朝期には、細川師氏が淡路に入国して暦応三（1340）年に立川瀬の合戦で南朝方を破って島内の霸權を握ると、養宜館は室町時代を通じて守護所として引き継ぎ維持される。しかし、永正十七（1520）年に細川尚春が三好之長によって滅ぼされると養宜館も廃絶したとみられる。これと前後して文正年間（1466～67）頃には由良を本拠としていた安宅氏が台頭し、並立する本拠として16世紀初頭に洲本城が築城され、この頃から洲本が文献に登場するようになる。戦国時代までは洲本川の河口に洲本と炬口の二つの港津が併存したようだが、16世紀中頃に安宅氏が三好政権に組み込まれると、政治的拠点の軸が洲本に集中するようになる。ただし、一方で三好氏・安宅氏に対して自立した国人・土豪層も三原平野内部に多く存在していたとみられる。天正期には安宅氏は信長方として活動していたが、本能寺の変後には、秀吉方の武将仙石秀久が洲本城に入城する。以後、淡路島は四国攻めの拠点となる。天正十三（1585）年には、洲本城に脇坂安治が入封し、関ヶ原合戦後には洲本城が拠点となる。洲本の拠点化は、その進展によって古代から鎌倉時代、室町時代にかけて三原平野にあった中心機能が相対的に変化し、戦国時代以降には逆転してその地位が固定化され、近世へと引き継がれた。

宮ノ谷遺跡周辺の中世の遺跡については、大森谷遺跡（15）・寺中遺跡（29）等で建物跡が見つかっている。下内膳遺跡（9）では、建物跡とともに埋納錢が発見され、コカイチ遺跡（8）では掘立柱建物跡とともに鍛冶構造が検出されている。鍛冶構造については、由良木遺跡（6）でも見つかっている。これらの遺跡は先山の東南麓の平野～丘陵に分布する。一方、先山の北東側台地・丘陵部にも三木田池遺跡（62）・清間遺跡（63）・新池遺跡（64）・オケ本遺跡（65）・摺井遺跡（66）・神子ヶ原遺跡（67）・戎ノ前遺跡（70）等が点在する。戎ノ前遺跡では、多数の掘立柱建物が発見されているほか、清間遺跡では、宮ノ谷遺跡と同様の丘陵斜面の平坦地に立地するほぼ同時期の掘立柱建物と建物を区画する構が検出されており、注目される。主な中世城郭については、洲本の拠点化に関連する城跡として、洲本川河口部の南側の三熊山に国指定史跡の洲本城跡（58）があり、川を挟んだ北側の山地に戦国時代末期の特徴をもつ、県指定史跡の炬口城跡（51）がある。そのほかの城跡としては、羽風山城跡（26）や安宅氏関連の安宅館跡（10）などがある。

近世

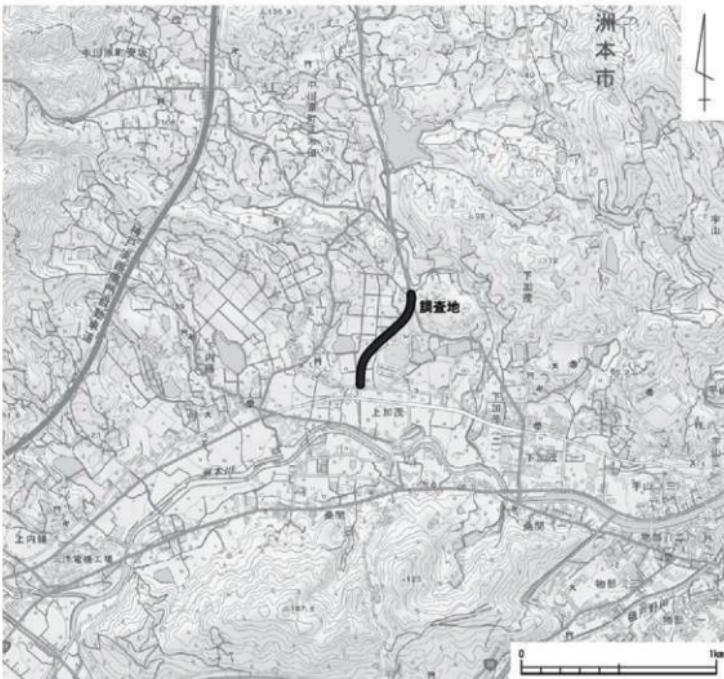
慶長十五（1610）年に入封した池田忠雄期から徳島藩蜂須賀家領となった寛永八（1631）年まで由良が淡路の中心地となり、洲本は一時廃絶する。そして、寛永十二（1635）年までには由良城から洲本城へ城下町ごと本拠を移転した「由良引け」により、再び洲本に徳島藩の藩庁が設けられて、城下町も発達することとなる。以後は、洲本が淡路の中心地として維持されていくことになる。なお、台場跡としては、炬口台場跡（52）や霞台場跡（59）がある。

第2章 調査の経緯・経過

第1節 発掘調査

1. 調査の経緯

兵庫県淡路県民局洲本土事務所は、主要地方道洲本五色線上加茂バイパス整備事業を進めている。事業地周辺には、周知の埋蔵文化財包蔵地である「里池遺跡（県遺跡番号：060038）」「バベの森遺跡（県遺跡番号：060061）」が存在することや、昭和53年度に洲本市教育委員会によって実施された農業基盤整備事業（圃場整備事業）に伴う確認調査の成果から、用地内に埋蔵文化財の存在が予想された。そこで県教育委員会は、平成29年3月30日付け 淡路（洲土）第1905号の依頼に基づき、埋蔵文化財の試掘・確認調査を平成29年の4月と6月に実施した（遺跡調査番号：2017014）。その結果、路線内的一部水田において埋蔵文化財の存在が確認され、「宮ノ谷遺跡（県遺跡番号920134）」として埋蔵文化財包蔵地に登録された。同地について、文化財保護法第94条第1項の規定により平成29年7月19日付け淡路（洲土）第1769号の通知が提出され、これに対して兵庫県教育長より平成29年7月24日付け



第5図 試掘・確認調査範囲位置図

教文第3456号の「発掘調査」の指示・勧告がなされた。

平成30年3月の完成を目指す上記事業の本体工事の工程上、当該箇所の調査実施が急がれたことから、この指示・勧告に基づき、兵庫県教育委員会は、洲本土木事務所と協議の上、平成29年7月28日付け淡路（洲土）第1278号の依頼を受けて、同年8月に本発掘調査を実施した。

2. 調査の経過

（1）試掘・確認調査

調査地は、南の洲本川に向かって開口する谷部から丘陵部にかかる地形にあたる（第5図）。調査地を含む周辺は、昭和53年度の圃場整備事業によって地形が大きく改変されていた。

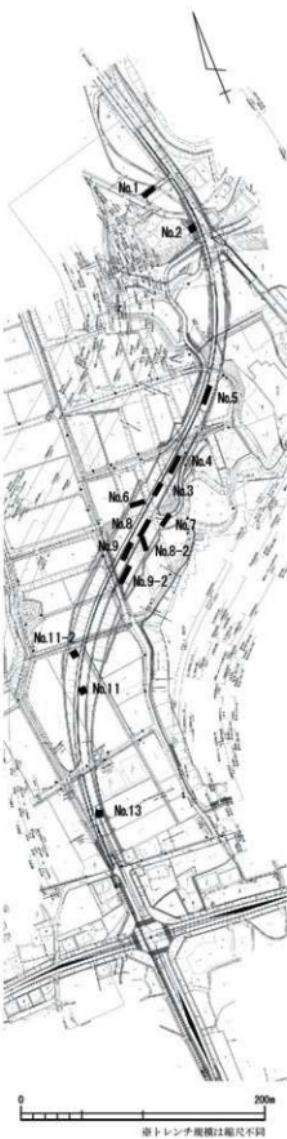
工事計画地内にNo. 1～7、8・8-2、9・9-2、11・11-2、13の合計14ヵ所の調査区を、立地等にあわせて幅0.5～2m、長さ2～10mの規模で設定し、調査を実施した（第6図）。調査区番号については、圃場整備後の一畝の田畑に対して一つの調査区を設定して番号を付し、調査区を追加したものについては枝番を付した。また、No. 10、12については、当初調査を計画していたが、調査の進展に伴い不要と判断し、除外した。各調査区の調査については、機械による掘削後、人力にて平面・断面の精査を行い埋蔵文化財の存否を確認した。また、必要に応じて写真撮影、平面図・断面図作成等の記録作業を行った。

調査の結果、No. 8・8-2において、中世の土師器皿や銅鏡「洪武通寶」が出土する遺物包含層や柱穴を確認した。No. 1～5、7、9・9-2では、いずれも地山が大きく削られており、遺構・遺物は認められなかった。また、No. 6及びNo. 11・11-2、13では、谷地形の堆積物とその上部に圃場整備時に谷部を埋め立てた盛土層が堆積しており、遺構・遺物は認められなかった。

（2）本発掘調査

試掘・確認調査の結果を受けて、遺構・遺物が確認できたNo. 8・8-2の調査区が位置する田畠の工事予定地部分が本発掘調査の対象となった。

工事は平成30年3月に完成・供用開始を予定しており、発掘調査対象地より南側の調査対象とならなかつた部分



第6図 試掘・確認調査区位置図

は、調査地隣接地まですでに着工されていた。そのため、発掘調査は本体工事と併行して急ぎ実施することとなった。本発掘調査は、8月1日より開始し、7日には台風5号の影響を受けつつも、順調に進めて9月1日に終了した。

調査の方法については、機械による掘削後、人力にて遺物包含層以下を掘削し、平面・断面の精査を行い、遺構検出を実施した。必要に応じて写真撮影、平面図・断面図の作成など記録作業を実施した。また、調査区全体の空中写真撮影及び測量については、平成29年8月24日に無人航空機にて撮影を行い、そのデータを基に図化を行った。

8月24日には、浦上雅史氏(元洲本市教育委員会)及び金田匡史氏(洲本市教育委員会)の来訪があり、調査に関してご教示を得た。

3. 発掘調査の体制

平成29年度の試掘・確認調査及び本発掘調査の調査体制については以下のとおりである。

試掘・確認調査（遺跡調査番号：2017014）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当：兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課

主任 堀内拓郎

(公財) 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査課

主任調査専門員 村上泰樹

調査期間：平成29年4月20・21日、6月6・9日

調査面積：60 m²

本発掘調査（遺跡調査番号：2017095）

調査主体：兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課

課長 中川 淑、主査 上田健太郎、主任 堀内拓郎

(公財) 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査課

主任調査専門員 村上泰樹

調査期間：平成29年8月1日～9月1日

調査面積：353 m²



第7図 調査前の状況



第8図 人力掘削状況

第2節 出土品整理作業

1. 出土品整理作業

出土品整理作業は、平成31年度（令和元年度）、令和2年度の2カ年に渡って実施した。作業については、（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が行った。作業内容は、水洗い、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、分析鑑定、保存処理であり、令和2年度に編集作業を経て報告書を刊行する。

2. 整理作業の体制

出土品整理の作業年度、作業内容・作業体制については、以下のとおりである。

平成31年度（令和元年度）

作業内容：水洗い、ネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正、保存処理（金属製品）を行った。

作業体制：調査第2課 主査 堀内拓郎

整理保存課 主査 深江英憲、技術職員 大本朋弥・大嶋昭海

整理技術員 萩野麻衣・小野潤子・岡崎真子・小林礼子・菅生真理子・長井香苗・森松沙耶香（接合・補強・復元）

池田悦子・宮田麻子・柏木明子（実測・拓本、写真整理・図面補正）

大前篤子・桂 昭子・香山玲子・児玉昌子（保存処理）

令和2年度

作業内容：トレース・レイアウト・分析鑑定を行い、編集作業を経て報告書を刊行した。分析鑑定については、株式会社パレオ・ラボに出土木材の樹種同定を委託し、その成果を本書に掲載した。

作業体制：調査第2課 主査 堀内拓郎

整理保存課 技術職員 大嶋昭海・藤原怜史・技術専門員 西口圭介

整理技術員 柏木明子（トレース・レイアウト）

第3章 調査の成果

第1節 調査区の概観

1. 調査区の位置 (図版1、巻頭写真図版1~3)

調査区は、洲本平野の北側、洲本川左岸域に位置し、先山の東南麓に広がる丘陵と開析谷のうち、积迦堂川と箕川に挟まれ、南の洲本川に向かって開口する開析谷の西側斜面に造成された平坦地に立地する。昭和53年度の圃場整備前の周辺の開析谷の斜面には、地形と等高線に沿って平坦地が造成された棚田状になっており、調査区の立地地点はその一部にあたる。圃場整備後は、谷の斜面地が方位に合わせて土地が整備されており、調査区の位置する土地の西側は法面をもって一段低くなり、北側と東側は法面をもって一段高くなった土地となっている。調査区は、圃場整備後の一束の田畠のうち、工事範囲に含まれた北側半筆程度を対象として、土地の北西部に西側縁辺を含めて設定しており、北側は法面の根に接し、西側は法面の一部が調査区に含まれている。調査区は、平面台形状で東西12m、南北は西側で34m、東側で26m、面積353m²の規模となっている。

なお、調査区は、西側に谷部入り口の里池、南西側の丘陵先端部に賀茂神社（上加茂神社）を臨み、さらに西方には先山（標高448m）を眺めることができる。また、調査区の北東側には、小丘陵の尾根の先端が谷部の侵食によって取り残されるように形成された小丘状の高まりがあり、南側の尾根は工場造成により大規模に改変されている。

2. 基本層序と土層の堆積 (図版2~4、写真図版4・5)

(1) 基本層序

基本層序は、土質や堆積・土壤構造の違いを基に上から第1層～第8層に区分した（図版3）。第1層は、昭和53年度の圃場整備に伴う現代耕土層（調査前に分別除去）及び圃場整備時の盛土層（南壁土層断面の土層番号1※以下番号のみ記載）である。盛土は地山を含む下位層のブロックで構成されており、周辺の削られた土によって造成されている。第2層は、圃場整備前の現代耕土層（2）、第3層は、第2層直下の作土層（3）である。その下層の第4～7層は古土壤層で、それぞれ土壤層I～IVに区分して呼称する。第4層は、土壤層I（4）である。炭化物・焼土・遺物が多く含まれる土壤化層で、最も暗色化が強い。調査区中央部では、第4層の上部に炭化物・焼土が特に多く含まれて一定範囲に広がって堆積する状況が確認できることから、第4層は上部層と下部層に区別できる（図版2）。上部層については、後述のように火災後の整地層と考えられ、以後、特徴を明示するために「炭化物・焼土層」とも呼称する。そして、さらにその下層は、第5層が土壤層II（5～8）、第6層が土壤層III（9～11）、第7層が土壤層IV（12・13）である。いずれも上方の層にやや強い暗色化がみられ、下位は比較的淡色を呈する。そして、第8層が地山層（14）である。地山層は、大阪層群の愛宕累層鰐原互層に該当するとみられ、調査区平面ではシルト～砂の互層が削られて縞状に表れている状況が確認できる。

(2) 土層の堆積状況

調査区は圃場整備時に大きく削平を受けており、調査区北東半分は盛土層を除去すると、地山層に到

達する。調査区中程では、炭化物・焼土・遺物が多く含まれる第4層上部が、後述する SD01 の内側を中心 北西から南東方向に向かって分布している。特に調査区西端中央部分には、後述する SD04 より北側で SX01 の南西側に幅約 1 ~ 2 m、長さ約 4 m の範囲に炭化物・焼土が集中しているのが確認できた（図版 2）。炭化物・焼土が分布する範囲の北側と南側に東西方向のトレンチを設定したところ、基本的には第5層（土壤層 II）の直上に厚さ 10 cm 程度で堆積しており、南側トレンチでは地山層直上に堆積している状況が確認できた（図版 4）。次節以降で詳述するが、第4層上部層については、掘立柱建物の柱穴やそれらを埋む SD01 の最上層を覆い、炭化物・焼土とともに焼けた壁土の破片が多数含まれており、ある時期に土壁を有する建物が火災によって損壊した痕跡とみられる。これらは細片化して原位置をとどめおらず、淘汰の悪い堆積構造を示すことから、火災による損壊後に整地がなされた層と考えられる。

検出した地表面の標高は、調査区北端が 13.6 m 前後、南端が 13.0 m 前後で、南西隅に向かってさらに約 1 m の深さで緩やかに落ち込んでおり、西側及び南西方向に傾斜する地形となっている。そのため、調査区南西側に向かって、圃場整備前の耕土層（第2層）や旧作土層（第3層）より下層の土が残存する傾向にあり、特に調査区南西隅は地山層が南西に大きく傾斜する地形を呈することから、地山の上層に土壤層 I ~ IV が南西方向に向かって厚く堆積していた。調査区南壁断面では、作土層（第3層）は水平に堆積し、西側に比べて東側では一段高くなっている地山直上に堆積しており、直上層の第2層もこれに合わせて東側で高くなっている。また、その直下と地山層との間には第5層が一部残存している。この一段高くなる部分については、第5章で詳述する圃場整備前の土地区画を示した北西 - 南東を指向する畦畔の位置と概ね一致する。また、同じく調査区南壁断面の中程では第4層（土壤層 I）、第5層（土壤層 II）が、同様に東側に向かって一段高くなるような堆積状況がみられ、この変化する箇所についても圃場整備前の東西方向に土地を区画する畦畔の位置と概ね一致し、第4層（土壤層 I）・第5層（土壤層 II）についても畦畔を境に東側及び北側が一段高くなっていたとみられる。東側の地山直上で一部残る第5層についても、一段高くなっている東側に堆積していたことを示すとみられる。

3. 遺構の検出

遺構の検出については、基本的に炭化物・焼土・遺物を包含する第4層（土壤層 I）の除去面で行い、土壤層が厚く堆積する調査区南西部については、土壤層を除去した第8層の地山層上面においても遺構の検出を行った。また、圃場整備等すでに大きく削られている調査区北東部分では、第8層の地山層上面で遺構の検出を行った。

第2節 調査の成果

1. 検出遺構（図版 5 ~ 13、巻頭写真図版 4・5、写真図版 1 ~ 3・6 ~ 12）

遺構としては、掘立柱建物、柱穴、土坑、溝、石組み遺構を検出した。遺構は、調査区中央部に溝に埋まれるように集中して見つかっている。以下に、各遺構について報告する。前節でみたように、火災後の整地層と考えられる第4層上部には、これと関連する炭化物や焼土、焼けた壁土等が含まれている。これらが遺構埋土にも認められるかどうかで、遺構の形成が火災発生段階あるいは火災後の整地段階（以下、火災・整地段階と呼ぶ）のどちらに帰属するかを判断する材料となる。

(1) 挖立柱建物

調査では 90 基以上の柱穴を SD01・05・06 よりも西側で検出しておらず、特に SD04 より北側に集中する傾向にある。多数検出した柱穴から掘立柱建物跡 SB01・SB02・SB03・SB04・SB05 の 5 棟を復元できた。

SB01 (SB01A・SB01B) (図版 6・7、写真図版 6)

調査区中央の、SD01 の西側、SD04 よりも南側に位置する。梁行 3 間 (P02 - P04 間 6.16 m)、桁行 3 ~ 5 間 (SK13 - P04 間 8.24 m) の建物で、南東隅部は梁行方向に 1 間分の 2 本の柱 (P89・90) が南側 (桁行方向) にさらに続いて、およそ半間分の建物が少し東側にずれながら一部凸型に張り出した形になっている (以下、この部分を「張り出し部」と呼ぶ)。張り出し部を含めた南北長は 9.44 m である。南北の建物軸は N 19° W だが、張り出し部は N 39° W とかなり西に振る。建物北西部は、園場整備の造成によって削られて残らない。SB01 については、深い柱穴が並んで建物跡として復元できる部分と、それらの東側と北側を取り囲むように浅い土坑が柱列となって建物の一部を構成する部分があり、これらは一部の柱穴及び張り出し部を共有する。ここでは、前者を SB01A、後者を SB01B とした。SB01A の東端の柱列 P85 - P88 が SB01B と重なり、SB01B は SB01A の P04・P85・P88 を共有する。

SB01A は、SB01 の西側を構成し、張り出し部を除けば、梁行 2 間 (P02 - P88 間 4 m)、張り出し部を含めた梁行は 3 間 (P02 - P04 間 6.16 m)、桁行 3 間 (P85 - P88 間 7.36 m) となる。柱間は概ね 2 m である。しかし、P85 - P86 間は約 3.3 m を測り、南側の 1 間分と張り出し部の約半間分を足した距離と近い値となるが、その間では柱穴は検出されなかった。また、建物の北側 2 間分の建物内部でも柱穴は検出されなかった。東端にある桁行方向の柱列は、南側の梁行方向の柱列 (P02 - P04) に対して、東側に 94.5° 開く形になっている。柱穴の直径は概ね 28 ~ 40 cm、深さは 24 ~ 48 cm を測る。P04 には、底面で礎盤石が認められた。埋土は炭化物を僅かに含み、後述する SB01B の埋土ほど炭化物・焼土は顕著ではないが、P11 からは壁土の微細片が出土しており、火災・整地段階に埋没した可能性がある。そのほか SB01A の柱穴からは土器等の遺物は出土していないが、張り出し部の P89 からは、底面近くで炭化してやや細片化した木材が出土した。

SB01B は、SB01A の北東部を拡張するように SB01 の北側と東側を構成する。梁行は、南側では張り出し部と同じ長さで 1 間 (SK04 - SK18 間 2.1 m)、北辺では 2 間 (P80 - SK13 間 4.12 m) となり、桁行は 5 間 (P22 - P88 間 8.24 m) となる。1 間の柱間は、概ね 2 ~ 2.1 m だが、北側と南側の桁行に関しては、概ね半間分 (P22 - P84 間 1.08 m、SK02 - P88 間 0.96 m) となっており、建物南辺柱列から北側に半間分ずらしたような形になっている。また、桁行方向 (P22 - P88) の中 3 間分 (P84 - SK02) については、柱列から梁行方向約 0.64 ~ 0.68 m 東側の位置にも SB01A の P85 を共有した柱列 (P85 - SK03) が通る。この柱列間の距離は概ね 3 分の 1 間となる。SB01A と共通する柱穴を除き、SB01B の柱穴は、平面が円形となるものは少なく、不整円形や橢円形といった形状をしており、断面形も皿状を呈する土坑として検出した。その深さも 4 ~ 20 cm と浅く、掘立柱ではなく礎石が据えられていた可能性があり、また P85 - SK03 の柱列のうち SK12 - SK03 には東柱・東石といった存在も推測される。埋土については、上部層を中心に炭化物・焼土が多量かつ顕著に含まれており、火災・整地段階に埋没したとみられ、SB01 の検出土坑は礎石除去後の整地によって埋められたと考えられる。遺物としては、SK05・SK18・SK12 から中世の土器類 (1 ~ 4) が出土しているほか、P22 から土器質の三足羽釜等の三足器の脚部 (5) が見つかっている。また壁土については、SK12 (E10)・P23 から出土している。

SB01 については、SB01A の柱列 (P85 - P88) と SB01B の一部が重なっていることから、掘立柱建物

SB01A がまず形成され、火災前のある段階で建物の東側と北側を拡張するように一部の掘立柱を共有・利用しながら礎石立ちの建物 SB01B が追加・増築された可能性がある。しかし、柱列が掘立柱と礎石を共有していることを重視すれば、SB01A の P11 と P86 が SB01B と関連する構造をもつ掘立柱の可能性も十分にある。ここでは、増築・改修の可能性を指摘しつつ、同一時期の建物として捉えておく。そして、SB01B の埋土には炭化物・焼土が顕著に堆積し、SB01A・B いずれの柱穴からも壁土が出土していることから、SB01 は火災・整地段階には埋没したと考えられる。なお、SB01A に比べて、SB01B は柱穴に炭化物・焼土が顕著に含まれる点については、第 4 層上部層（炭化物・焼土層）が SB01B 部分を中心に分布していることに起因すると考えられる。

SB02（図版 8・10、写真図版 7）

調査区中央西側、SD04 より北側に位置し、SB03・04・05 と重なる。桁行 2 間、梁行 2 間以上の比較的柱並びの良好な側柱建物である。東～南東側部のみを検出しており、西側部分は圃場整備の造成によって削られて残らない。桁行は P33～P55 間で 5.36 m、梁行は P62～P55 間で 3.12 m を測り、1 間の柱間は桁行で約 2.6 m、梁行で約 1.8 m となる。南北の建物軸方向は、N 18° W である。柱穴は、直径 24～44cm、深さ 28～60cm である。遺構の切り合いは、柱穴 P55 が SD01、P12・32 が SD05、P33 が SD06 を切る。そして、埋土には P12 を初めとして炭化物・焼土が多く含まれ、少なくとも火災・整地段階より後に埋没したとみられる。遺物としては、P12 から中世の土師器皿（6・7）と 15 世紀前半の焼締陶器の備前焼壺（8）が、P58 からは 15 世紀後半所産の羽釜タイプ播磨型の土師器鍋（9）が出土している。そのほかの柱穴からは、図化不能な土師器皿の微細片が出土している。また、柱穴からは壁土の破片も出土している。なお、P12 からは土器とともに炭化して細片化した木材が見つかっている。

SB03（図版 8・9・10、写真図版 7）

調査区中央で、SD04 より北側、SD01 北端より南側に位置し、SB02・04 と重なる。桁行 4 間、梁行 2 間以上の純柱建物である。西側は圃場整備の造成によって削られて残らない。桁行は P44～P71 間で 4.52 m、梁行は P71～P75 間で 2.76 m を測り、1 間の柱間は桁行で約 1.2～1.4 m で南端のみ約半分の 0.6 m となり、梁行は約 1.3～1.6 m となる。南北の建物軸方向は、N 17° W である。柱穴は検出した平面形状が円形のものから楕円形のものもあって一定せず、直径も 16～44cm と画一的ではない。深さは径の小さいもので 4～16cm と浅く、径の大きいものは 50～72cm と深くなる傾向にある。埋土については、建物柱穴の半数以上に炭化物・焼土が含まれており、火災・整地段階以後に埋没したとみられる。遺物としては、P13 より中世の土師器皿（10）と 15 世紀前半の羽釜タイプ播磨型の土師器鍋（11）、釘（M1）が、P75 から 14 世紀後半～15 世紀の白磁碗（12）が、P15 からは 15 世紀後半の青磁碗（13）と板状鉄製品（M2）が出土している。そのほかの柱穴からも図化不能な土師器の微細片等が出土している。また、壁土の破片が出土する柱穴もある。なお、P13・71 の基底部には高さ 25cm、幅 11cm の柱根の一部が残存していた。柱材は同じ樹種で、基底面は複数回に渡ってやや平たく削られて、中心は少し突き出す形となっていた。

SB04（図版 8・9、写真図版 8）

調査区中央で、SD04 より北側、SD01 北端より南側に位置し、SB02・03 と重なる。桁行 3 間、梁行 3 間以上の側柱建物である。西側は圃場整備の造成によって削られて残らない。桁行は P25～P68 間で 3.72 m、梁行は P68～P74 間で 3.64 m を測り、1 間の柱間は桁行で約 1.2 m、梁行で 1～1.48 m となる。南北の建物軸方向は、N 17° W である。柱穴は直径 32～44cm のものが多く、16～24cm と小さいものもある。深さは 44～48cm のものが多く、浅いもので 16～24cm、深いもので 64cm である。埋土は、

特に南～南東部の柱穴の最上部に炭化物・焼土が混じる傾向にあり、火災・整地段階より前にはほぼ埋没して、残された窪みを中心に炭化物・焼土が混じる土が堆積した可能性があり、柱穴の掘削も火災よりも前に行われていたとみられる。遺物としては、P17から中世の土師器皿の破片（14）が出土し、そのほかの柱穴からは炭化不能な土師器皿等の微細片が出土している。また、壁土の破片も炭化物・焼土と同様に見つかっている。

SB05（図版8・9、写真図版8）

調査区北側、SD01・SD01よりも北側、SD06の南側に位置し、SD05・SB02と重なる。1間四方の建物で、西側は圃場整備によって削られており、西側に続きがあるかは不明である。柱間はそれぞれ約1.8mを測る。南北方向の建物軸は、N 19° Wである。柱穴の直径は24～36cm、深さは約40cm前後だが、P37のみ12cmと浅い。埋土には、炭化物・焼土は含まれず、火災前に掘削、埋没したとみられる。遺物、壁土は出土していない。

（2）柱穴（図版5・10、写真図版8）

多数検出するも建物に復元できなかった柱穴のうち、良好な遺物等が出土したP78・P14・P06について報告する。

P78（図版5・10）

調査区中央部、SD01よりも西側、SD04の南側に位置し、SB01の北東隅部と重なる。平面不整円形で、直径58cm、深さ20cmを測る。埋土には、上部に炭化物・焼土が含まれており、火災・整地段階以後に埋没したとみられる。遺物としては、中世の土師器皿（15）が出土している。

P14（図版5・10、写真図版8）

調査区中央部、SD01よりも西側、SD04よりも北側に位置し、SB02～04と重なる。平面円形で、直径32cm、深さ34cmを測る。埋土の上部には、炭化物・焼土を少量含む第4層（土壤層Ⅰ）とともに地山の偽礫が含まれており、火災・整地段階以後に埋没したとみられる。遺物としては、中世の土師器皿の底部の破片（16）が出土している。

P06（図版5・10、写真図版8）

調査区中央部、SD01よりも西側、SD04よりも北側に位置し、SB02～04と重なり、SX01の南東側に近接する。平面不整円形で、直径49cm、深さ73cmを測る。埋土は、芯部の下半に炭化物を多く含み、壁土の微細片が出土していることから、火災・整地段階以後に埋没したとみられる。遺物としては、15世紀前半頃所産の羽釜タイプ播磨型の土師器鍋の破片（17）が出土している。

（3）土坑（図版5・11、写真図版9）

SK01・SK07・SK14・SK15・SK19を検出した。

SK01（図版5・11、写真図版9）

調査区南西部に位置し、SK19の南西側に近接する。平面は不整梢円形で、断面は浅い皿状を呈する。平面規模は、長軸0.86m、短軸0.63mで、深さ8cmを測る。第5層（土壤層Ⅱ）の上面で検出しており、埋土は第3層（作土層）に類似し、第3層下面遺構の可能性がある。遺物は出土していない。

SK07（図版5・11、写真図版9）

調査区中央西端に位置し、SB02～04と重なる。平面は不整円形、断面は歪な半円形を呈する。平面

規模は、長軸 0.7 m、短軸 0.8 m で、深さ 45cm を測る。埋土には、地山の偽礫が多量に含まれて淘汰が悪く、上層の方が偽礫は小さい傾向にあり、人為的に埋められた可能性が高い。埋土には、炭化物・焼土等が含まれておらず、また、第 4 層（土壤層 I）も認められない。火災・整地段階以前で、第 4 層形成前に掘削され、埋没したとみられる。遺物は出土していない。

SK14（図版 5・11、写真図版 9）

調査区中央に位置し、SD04 と同位置に重なる。SD04 検出時に第 4 層上部の炭化物・焼土が広がっていたため、遺構検出面では確認できなかったが、SD04 埋土掘削後の底面において確認できた。SD04 底面での平面は長楕円形で、断面は U 字型を呈する。平面規模は長軸 0.35 m、短軸 0.21 m で、深さは SD04 底面からは 8 cm、検出面からは 31cm を測る。埋土は、SD04 埋土の 2 層と同一層とみられ、SD04 機能時に SD04 内に掘削され、埋没した土坑と考えられる。遺物は、金属製品の鑿（M3-1・2）が出土している。遺構検出時に、鑿の柄尻の留め金である「冠」（M3-2）が輪を上向きにした状態で見つかったが、鑿の身にあたる「櫛」と留め金部分にあたる「口金」（M3-1）については、検出した SK14 より上方部分の掘削時に装着された状態で出土しており、いずれも同一個体と判断した。また、鑿の冠部分が下方で見つかっていることから、鑿は柄を下にして埋まっていた可能性が高い。

SK15（図版 5・11、写真図版 9）

調査区中央西側に位置し、SD04 の南側に接する。平面は不整椭円形で、断面は歪な半円形を呈する。平面規模は、長軸 0.31 m、短軸 0.29 m で、深さ 18cm を測る。埋土の上部には炭化物及び焼土が含まれ、また壁土の破片が出土している。少なくとも火災・整地段階以後に埋没したとみられる。遺物としては、中世の土師器皿の破片（18）が出土している。

SK19（図版 5・11、写真図版 9）

調査区南西部に位置し、SK01 の北東側に近接する。平面は長楕円形、断面は隅丸逆台形状を呈する。平面規模は、長軸 0.75 m、短軸 0.5 m で、深さ 20cm を測る。埋土は、上部層にごく僅かに炭化物が含まれるが、地山層と第 5 層が混じる、第 5 層下面遺構とみられる。遺物は出土していない。

（4）溝（図版 5・12、写真図版 10）

SD01・SD02・SD03・SD04・SD05・SD06・SD07 を検出した。SD03・07 を除き、SD01 を中心に SD02・04～06 は切り合い関係または同時性をもってそれぞれ関連する溝である。また、SD01・05・06 の内側（西側）に柱穴等の遺構が集中する。

SD01（図版 5・12、写真図版 10）

調査区の中央に位置する。溝の東側は南北方向に走り、その北端と南端がそれぞれ西方向へ曲がる。南北方向に走る部分は軸を N 18.5° W にもち、北端部は緩やかに弧を描いて湾曲し、南端の溝南辺は直角に屈曲する。SD01 の東側部分は、後述するように圃場整備前の南北畦とほぼ同位置で同じ方向に走っており、地形の制約を受けて形成されたと考えられる。

長さは、南端から湾曲する北端部も含めて南北 16.8 m、東西は北側で 2.1 m、南側で 5.8 m を測り、溝の西端は薄くなつて途切れる。溝の南辺については、西側約 3 m 部分で約 1 m 北側（内側）に屈曲し、残る 2.8 m は南辺と平行して西方向へと続いており、溝の南辺東側半分が凸型に張り出したような形になつていている（以下、「張り出し部」と呼称）。張り出し部内の 1 m 北側部分には、浅い SD02 が溝南辺と平行して走り、張り出し部以西の SD01 と合流し、張り出し部分が区切られたようになっている。また、

SD01 東側部分からは、溝の南端から 11 m 北側の部分で、南辺と平行する SD04 が西側に向かって分岐しており、SD01 内部が南北に区切られる。SD01 の西側（内側）は遺構が集中し、特に SD04 より北側は柱穴の重なりが顕著である。SD01 東側部分の北側延長上には、SD05・06 が同様に北端部を西側に湾曲させながら伸びている。SD01 の幅は、概ね 40 ~ 70 cm 程度だが、北端で幅約 20 cm、南辺の張り出し部は幅 25 ~ 35 cm と一部細くなる部分もある。溝の断面形は概ね深い皿状を呈し、その深さは、北端部で約 5 cm、南辺部で 5 ~ 7 cm、中央部で約 13 cm、SD04 との分岐部分で約 14 cm となっており、中央の分岐部分に向かって深くなる傾向にあり、SD01 から SD04 を通って西側へ排水する機能があったとみられる。埋土については、溝の中央で SD04 が分岐して深くなる部分では SD04 と同一の機能時堆積層の上に第 4 層上部に対応する炭化物・焼土層が堆積し、溝が浅い北端と南端では、概ね地山直上に炭化物・焼土が堆積しており、SD01 は後述する SD02・04 とともに火災前に掘削され、火災・整地段階に埋没したとみられる。また、遺構の切り合いについては、SD01 北側が SD05 を切り、SB02 の P55 に切られる。

遺物としては、中世の土師器皿（19 ~ 21）、15 世紀後半頃の羽釜タイプ播磨型の土師器鍋（22）が出土しているほか、図化不能な備前焼の壺壺類の破片なども出土している。また、壁土の破片も出土している。

SD02（図版 5・12、写真図版 10）

調査区南側で、SD01 の南辺と約 1 m 北側に平行して位置する。SD01 東側部分に対して東西方向に直交し、SD01 南側の屈曲部分と合流しており、丁度、SD01 南側の張り出し部を区切るような形になる。長さは 2.9 m、幅 20 ~ 30 cm、深さ 2 ~ 6 cm を測り、SD01 よりも細く浅い。地山層上面で検出しており、埋土は SD01 埋土の 1 層と同一層で炭化物・焼土を多く含み、第 4 層上部に対応する。SD01 とともに火災前に掘削され、火災・整地段階に埋没したとみられる。遺物としては、図化不能な土師器皿の微細片が出土している。

SD03（図版 5・12、写真図版 10）

調査区中央、SD01 より西側、SD04 より北側で、SX01 の北東側に位置し、SB02・04 と重なる。平面不整形で、長さ 1.7 m、最大幅 65 cm、深さ 10 cm を測る。ここでは未報告であるが複数の柱穴によって切られている。土層の堆積状況から、第 4 層より下層で、第 5 層（土壤層 II）の上面遺構である。遺物は出土していない。

SD04（図版 5・12、写真図版 10）

調査区の中央に位置し、SD01 の中期から西側へ向かって直角に分岐する。分岐点は SD01 の南端より北側 11 m の位置にあたり、SD01 の区画内部を南北に区切る。検出した溝の長さ 5 m、幅は 35 cm、深さ 18 cm を測り、断面は U 字形を呈する。溝の西端以西は、圃場整備によって切られて残らない。溝の底面は、東側の分岐部と西端では概ね 20 cm の比高をもって東から西に向かって緩やかに下る。SD04 は、地山を掘削して形成されており、最下層（4 層）では地山の偽礫が混じる。それより上層の埋土は、基本的に SD01 と同じで機能時に堆積した 2・3 層、その上層に第 4 層上部に対応する炭化物・焼土層が堆積する。SD01 と同様に火災前には掘削され、火災・整地段階に埋没する。遺物としては、中世の土師器皿（23・24）のほかに、機能時堆積層の 2 層から土師器皿の口縁部破片（25）と 15 世紀前半頃の青磁碗（26）が出土している。また、壁土の破片（E3）も出土している。

SD05（図版 5・12、写真図版 10）

調査区中央の SD04 よりも北側で、SD01 東側部分の北側延長上に位置する。溝の北側は SD01 と SD06 の間に弧を描いて西方向へ曲がり、SD01 の北端から約 1.5 m 北側、SD06 の南端から約 1 m 南側の位置に抜ける。溝の西端以西は、圃場整備によって切られて残らない。検出した溝の長さは、SD01 から北へ約 4

m、西へ約2.5mで、幅50～70cm、深さ約5cmの浅い溝である。溝の底面は湾曲部と西端で約10cmの比高をもって西へ下がる。地山上面で検出され、SD01とSD06及びSB02のP12・32に切られている。また、埋土には炭化物・焼土は含まれず、第4層上部のように暗色化した土は認められることから、火災よりも前に掘削・埋没したとみられる。遺物としては、図化不能な土師器皿の微細片が出土している。

SD06（図版5・12、写真図版10）

調査区北西部で、SD01東側部分の北側延長上かつSD05より北側に位置する。溝の北側は弧を描いて西方向へ曲がり、溝の西端以西は、圃場整備によって切られて残らない。検出した溝の長さは、SD01から北へ約6m、西へ約2.7mで、幅50～90cm、深さ約6cmの浅い溝である。溝の底面は、湾曲部と西端で数cmの比高をもって西側へ僅かに下る。地山上面で検出され、SD05を切り、SB02のP33に切られている。また、埋土には炭化物・焼土は含まれず、第4層上部のように暗色化した土は認められることから、火災よりも前に掘削・埋没したとみられる。遺物は出土していない。

SD07（図版5・12、写真図版10）

調査区の南側に位置し、SB01AのP03及びSD01によって切られる。長さ2.2m、幅44cmを測る。地山上面で検出しておらず、埋土は土壤層Ⅱに類似し、第5層（土壤層Ⅱ）下面遺構と考えられる。遺物は出土していない。

（5）石組み遺構（図版13、写真図版11・12）

SX01を検出した。

SX01（図版13、写真図版11・12）

調査区中央西側で、SD01より西側、SD04の北側に位置する。SB02～04と重なる。検出時は、第4層（土壤層Ⅰ）上部の炭化物・焼土層が分布する範囲のうち、集中する範囲の北東端あたりで、石組み部分のみが半分埋没した状態で確認できた。検出時は、遺構の輪郭は明瞭ではなかったが、平面不整円形で、断面は浅い皿状の土坑の上に、土坑の南側に偏って石組みが据えられていた。土坑の規模は、長軸1.28m、短軸1.1m、深さ22cmを測る。断面観察から、埋土には地山の偽礫と炭化物・焼土を含む第4層（土壤層Ⅰ）上部層が混ざり、その上部に石組みが埋まっていた。浅い土坑が第4層上部層の上面より掘り込まれて、石組みの設置とともに土坑が埋められたとみられ、火災・整地段階より後に形成されたと考えられる。石組みについては、長軸を南北方向に合わせた長さ32～40cm、幅26cm、厚さ12cmの長方形の板石を中心として、その西側から北側にかけて5個の石を接しながら廻らせて据えられている。周りの石は、西側のものが概ね平面方形で約12cm四方～19cm四方の大きさであるのに対し厚さは約6～9cmと薄くなっている。北側の石については、長さ27cm、幅15cm、厚さ3cmの平たい石を、中心の板石の幅に合わせるように東西方向に長軸を揃え、平坦面を上にして南側に向かって傾斜させながら据えられている。中心の板石についても平坦面を上にして僅かに北側に傾けて据えられている。北側と中心の石の上面は、木材等を燃焼させたためか、一部が煤等の付着によってやや黒く変色している。なお、SX01検出時には遺構の周辺には、石組みの中心板石の周囲を廻る石と同様の大きさの石が散在しており、板石の東側や南側にも石が廻っていた可能性がある。また、石組みの周囲の石の北西外側にも一点の石が接して存在しており、周囲を廻る石がさらに広がる可能性もある。遺物としては、瓦器輪（27）、中世の土師器皿（28～30）や図化不能な土師器鍋の微細破片、土師器杯蓋の破片（31）のほか、壁土の破片も僅かに出土している。

第4章 出土遺物

第1節 土器・陶磁器類

1. 遺構出土

(1) 挖立柱建物（図版14、巻頭写真図版6、写真図版13～16）

掘立柱建物のうち、図示可能なSB01・02・03・04の土器・陶磁器類について報告する。

SB01 (SB01B) (図版14、写真図版13)

SK05 土師器皿1がある。1は口縁部から底部の一部までの破片である。底部から口縁部にかけてやや内湾しながら斜め上方に立ち上がる。おそらく回転台使用による成形の可能性がある。底部の調整は不明で、口縁部から体部は内外面ヨコナデを施す。焼成・胎土は褐色系の色調で、砂粒が目立つ。

SK18 土師器皿2がある。2は口縁部から体部の破片である。手捏ね成形で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。焼成・胎土は淡橙色系の色調で砂粒は目立たない。

SK12 土師器皿3・4がある。3は口縁部から底部の一部までの破片である。手捏ね成形によるもので、器壁は薄く、斜め上方に直線的に立ち上がって口縁部はやや鋭くなる。焼成・胎土は淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。4は底部から体部にかけての破片である。回転台成形の可能性はあるが断定できない。底部外面には板状工具によるナデが施される。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒が目立つ。

P22 土師質の三足羽釜等の三足器5がある。5は脚部の破片で、体部との接合部から脚部中程まで残存する。脚部外面はナデによって平滑に調整され、体部内面にはハケメが認められる。脚部のみのため詳細は不明だが、周辺国の出土状況から13世紀～14世紀ごろの所産が考えられる。

SB02 (図版14、巻頭写真図版6、写真図版14)

P12 土師器皿6・7と焼締陶器の備前焼壺8がある。

土師器皿6は、口縁部から体部の破片である。手捏ね成形によるもので、斜め上方に立ち上がり、体部はやや厚くなつて口縁端部は丸く收める。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒が目立つ。7は底部の破片で、回転台成形によるものである。外面に板状工具によるナデによってハケメが残る。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒が目立つ。

備前焼壺8は口縁部から体部の破片で、SX01南側の炭化物・焼土層出土の破片とも接合している。体部から口縁部にかけてヨコナデが施され、口縁部は折り曲げて断面円形の玉縁状を呈し、頭部は短く、肩部はやや張り出す形になる。また、肩部外面には櫛齒状工具によって4条1単位の波状文とその下に4条1単位の平行条線が施される。施文の後にヨコナデされて、波状文の山部・谷部の頂点や平行条線の最上部が消える部分がある。時期については15世紀前半の所産に位置付けられる（岡田章一氏のご教示による）。

P58 土師器鍋9がある。9は口縁部から体部の破片である。体部は、外面に平行条線のタタキ、内面はコテ状工具によるナツケが施される。外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分にヨコナデを施して接合を強化し、断面山型の鉢部を成形する。口縁部は内外面がヨコナデによつて調整され、口縁端部の断面形はやや肥厚して丸味を帯びた方形で、端面は内傾する。長谷川編年（長

谷川 2007) の羽釜タイプ播磨型鍋のVI期に相当し、15世紀後半に位置付けられる。

SB03 (図版 14、写真図版 15)

P13 土師器皿 10 と土師器鍋 11 がある。

土師器皿 10 は口縁部から底部の一部までの破片である。回転台成形によるもので、体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部でわずかに上方に立ち上がる。内外面に回転台使用によるナデが施され、見込みはその後に別途ナデが施されている。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

土師器鍋 11 は口縁部から体部にかけての破片である。体部は、外面に平行条線のタタキ、内面はコテ状工具によるナデツケが施され、外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後にその上下部分にヨコナデを施して接合を強化し、断面山型の跨部を成形する。跨部はやや潰れて尖り気味になっている。口縁部は内外面がヨコナデによって調整され、口縁端部の断面形はやや肥厚した方形で、端面は内傾する。口縁端部はややつまみ出し、内面の口縁端部直下はナデによって僅かに回線状に窪む。長谷川編年 (長谷川 2007) の羽釜タイプ播磨型鍋のV期に相当し、15世紀前半に位置付けられる。

P75 白磁碗 12 がある。12 は口縁部から体部にかけての破片で、全体的に器壁は厚い作りとなっている。口縁部は外反し、端部は丸くなる。体部内面には草花文が施されており、根府磁を模倣したものとみられる。14世紀後半～15世紀に位置付けられる。

P15 龍泉窯系の青磁碗 13 がある。13 は体部の破片で外面に細線で蓮弁文を表現される。上田分類 (上田 1982) のB-IV類に相当し、15世紀後半に位置付けられる。

SB04 (図版 14、写真図版 16)

P17 土師器皿 14 がある。14 は口縁部から体部にかけての破片である。手捏ね成形によるもので、体部はやや厚くなりながら斜め上方に立ち上がり、口縁部で上方へなだらかに立ち上がって端部はやや鋭く收める。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

(2) 柱穴 (図版 14、写真図版 16)

多数検出するも建物として復元できなかった柱穴のうち、比較的良好な遺物等が出土した P78・14・06 について報告する。

P78 (図版 14、写真図版 16)

土師器皿 15 がある。15 は口縁部から体部にかけての破片である。手捏ね成形によるもので、体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部をやや鋭く上方に立ち上げる。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

P14 (図版 14、写真図版 16)

土師器皿 16 がある。16 は底部の破片である。おそらく回転台成形によるもので、底部内面はナデが施され、底部外面には糸切りの痕跡、または板状工具を用いたナデによりハケメ状の痕跡が残る。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒が目立つ。

P06 (図版 14、写真図版 16)

土師器鍋 17 がある。17 は口縁部から体部にかけての破片である。体部は、外面に平行条線のタタキ、内面は回転運動を利用したヨコナデが施され、外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分をヨコナデして接合を強化し、断面山型の跨部を成形する。跨部はやや潰れて尖り気味になつ

ているが、口縁部側のナデによって飛び出した粘土に工具等を当てて押さえており、端面がやや波打つ。口縁部は内外面がヨコナデによって調整され、口縁端部の断面形はやや肥厚した方形で、端面は内傾する。口縁端部はややつまみ出し、内面の口縁端部直下はナデによって僅かに凹線状に窪む。長谷川編年（長谷川 2007）の羽釜タイプ播磨型鍋のV期に相当し、15世紀前半に位置付けられる。

（3）土坑（図版 14、写真図版 16）

土坑のうち図示可能なSK15 の土器・陶磁器類について報告する。

SK15（図版 14、写真図版 16）

土師器皿 18 がある。18 は口縁部から体部の破片である。手捏ね成形によるもので、体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや丸く收める。摩滅により内外面の調整は不明である。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

（4）溝（図版 14、写真図版 17・18）

溝から出土した遺物のうち、図示可能な SD01・04 の土器・陶磁器類について報告する。

SD01（図版 14、写真図版 17）

土師器皿 19～21、土師器鍋 22 がある。

土師器皿 19 は口縁部から底部付近までの破片である。おそらく回転台成形による可能性はあるが断定できない。体部から口縁部まで比較的直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや丸く收める。摩滅により内外面の調整は不明である。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。20 は口縁部の破片である。手捏ね成形によるもので、斜め上方に立ち上がり体部側でやや厚くなつて口縁端部は丸く收める。内外面にヨコナデ調整が施される。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。21 は底部の破片である。成形法、内外面の調整は不明である。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒が目立つ。

土師器鍋 22 は口縁部から体部の破片である。体部は、外面に平行条線のタタキ、内面は工具によるヨコナデが施される。外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分をヨコナデして接合を強化し、断面山型の跨部を成形する。口縁部は内外面ヨコナデ調整され、口縁端部の断面形はやや肥厚して丸味を帯びた方形で、端面は内傾する。長谷川編年（長谷川 2007）の羽釜タイプ播磨型鍋のVI期に相当し、15世紀後半に位置付けられる。

SD04（図版 14、写真図版 18）

中世の土師器皿 23～25 と龍泉窯系の青磁碗 26 がある。

土師器皿 23 は口縁部から体部にかけての破片である。おそらく回転台成形によるもので、体部から口縁部にかけてやや内済しながら、斜め上方に立ち上がる。摩滅により内外面の調整は不明である。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。24 は口縁部から底部の一帯までの破片である。回転台成形によるもので、体部は斜め上方に低く立ち上がり、口縁部にかけてやや内済し、口縁端部はやや厚くなつて丸く收める。口縁部から体部の内外面には回転台使用によるナデの痕跡が残る。底部内面にはナデ、外面には回転糸切りの痕跡が残る。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。25 は口縁部の破片である。手捏ね成形によるもので、斜め上方に立ち上がり体部側でやや厚くなつて口縁端部は丸く收める。内外面の調整は不明瞭である。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒は

目立たない。

青磁碗 26 は口縁部から体部の破片で、底部付近まで残る。体部は比較的直線的に上方に立ち上がる。体部外面には片切彫りで幅広い蓮弁文が施され、内面の底面近くに 1 条の沈線が入る。上田分類（上田 1982）の B-II・III 類に相当し、15 世紀前半頃に位置付けられる。

（5）石組み遺構（図版 15、写真図版 19）

SX01（図版 15、写真図版 19）

瓦器椀 27、土師器皿 28～30、土師器杯蓋 31 がある。

瓦器椀 27 は口縁部から体部の破片である。表面が摩滅のため調整の詳細は不明だが、外面には口縁部と体部との境目に少しきびれを持ち口縁端部は僅かに厚くなっている。また、断面は灰～灰白色だが、内外面は部分的に瓦質で灰黒色を呈する。断面形状から、尾上他分類（尾上他 1995）の和泉型 IV-4 期に相当し、14 世紀前半頃に位置付けられる。

土師器皿 28 は口縁部から体部の破片である。手捏ね成形によるもので、斜め上方に立ち上がる。口縁部から体部内外面はヨコナデが施される。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。29 は口縁部から底部の破片である。回転台成形によるもので、斜め上方に立ち上がり、体部はやや厚くなっている。口縁端部は丸く収める。底部には外面に回転糸切りの痕跡が残る。口径は比較的小さい。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。30 は底部の破片である。回転台成形によるもので、底部内面は異なる二方向のナデによって仕上げられ、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

土師器杯蓋 31 は口縁部から体部または天井部の一部にかけての破片である。輪轆成形によるもので、内外面にはロクロナデの痕跡が残り、天井部外面には回転ヘラキリまたはケズリの痕が残る。全体に扁平に近い形状だが、口縁部は垂直に立ち上がり、口縁部から体部にかけてはややくびれる。焼成が甘いため土師質であるが須恵器杯 B 蓋と同様の形状と調整であり、8 世紀後半頃の位置付けが考えられる。

2. 包含層出土

遺物包含層から出土した土器・陶磁器類について、包含層を 3 項目に分けて報告する。1 つめは「包含層（炭化物・焼土層直上）」として、機械掘削後、第 4 層上部である炭化物・焼土層の検出時出土したものを取り扱う。2 つめは、「包含層（炭化物・焼土層）」として、第 4 層上部である炭化物・焼土層を掘削した際に出土したものを取り扱う。3 つめは、「包含層（その他）」として、前 2 者に含まれないものを取り扱う。

（1）包含層（炭化物・焼土層直上）（図版 15、写真図版 20）

土師器皿 32、土師器鍋 33・34 がある。

土師器皿 32 は口縁部から底部の一部までの破片である。回転台成形によるもので、体部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部でわずかに上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。口縁部から底部内面、口縁部から体部の外面に回転台使用によるナデが施され、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。

土師器鍋 33 は口縁部から体部にかけての破片である。体部は、外面に平行条線のタタキ、内面は板

状工具によるヨコナデが施されてハケメが残る。外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分をヨコナデして接合を強化し、断面「つ」の字型の跨部を成形する。口縁部は内外面がヨコナデによって調整され、口縁端部の外角が外側方につまみ出され、端面は内傾する。口縁部内面は、ヨコナデによりハケメは認められない。長谷川編年（長谷川 2007）の羽釜タイプ播磨型鍋のV期に相当し、15世紀前半に位置付けられる。

土師器皿 34 は口縁部から体部の破片である。体部は、外面に平行条線のタタキの後ユビオサエによってタタキ目が消える部分がある。内面は板状工具によるヨコナデが施されてハケメが残る。外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分をヨコナデして接合を強化し、断面山型の跨部を成形する。端面は、工具等で全体的に押さえ、上下のナデ調整により飛び出た粘土部分は潰れる。口縁部は内外面がヨコナデによって調整され、断面形はやや肥厚して概ね方形を呈し、口縁端部の外角は少しつまみ出され、端面は内傾する。口縁部内面は、板状工具によるヨコナデが施されてハケメが残る。長谷川編年（長谷川 2007）の羽釜タイプ播磨型鍋のVI期に相当し、15世紀後半に位置付けられる。

（2）包含層（炭化物・焼土層）（図版 15、写真図版 21）

土師器皿 35～40、土師器皿 41、焼締陶器の備前焼鉢 42、備前焼甕 43、青磁碗 44・45 がある。

土師器皿 35 は口縁部から底部にかけての破片である。手捏ね成形によるもので、底部から口縁部が上方に短く立ち上がり、いわゆる「コースター型」の皿である。内外面はナデによって調整されるが、底部外面には回しながらケズリを施したような痕跡が残る。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。時期については、京都では 11 世紀後葉から 14 世紀頃までみられるが、淡路での様相は現時点では不明であるため中世前半としておく。36 は口縁部から体部にかけての破片である。手捏ね成形によるもので、体部は斜め上方に低く立ち上がり、口縁部にかけて上方に立ち上がり、口縁端部はやや鋭く収める。器壁は基本的に薄い。内外面はヨコナデが施される。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。37 は底部から体部にかけての破片である。回転台成形によるもので、底部から体部下半は側方に開くようである。底部外面には板状工具によるナデが施され、そのほかの内外面は回転運動によるナデが施される。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。38～40 は、いずれも口縁部から体部にかけての破片である。おそらく手捏ね成形によるもので、体部は斜め上方に低く立ち上がり、口縁端部はやや上方に向かって立ち上がり、丸く収める。内外面はヨコナデが施される。焼成・胎土は、38・39 は淡橙色系、40 は褐色系の色調を呈し、いずれも砂粒は目立たない。

土師器皿 41 は口縁部から体部の破片である。体部は、外面に平行条線のタタキの後ユビオサエ痕が残る。内面は工具によるヨコナデが施され、外面の口縁部と体部の境目に粘土紐を貼り付けた後、その上下部分をヨコナデして接合を強化し、断面山型の跨部を成形する。口縁部は内外面がヨコナデによって調整され、口縁端部の断面形はやや肥厚して丸味を帯びた方形で、端面はやや内傾する。長谷川編年（長谷川 2007）の羽釜タイプ播磨型鍋のVI期に相当し、15世紀後半に位置付けられる。

焼締陶器の備前焼鉢 42 は口縁部から体部の破片である。口縁部は輪轉回転によるヨコナデが施されて、厚みをもって真上に立ち上がり、端部はやや丸く収める。また、口縁部下角はやや鋭く側方に張り出す。内面には概ね口縁帶の位置から下方にスリメが施される。乗岡編年（乗岡 2000）の中世 5 a 期に相当し、15世紀後半に位置付けられる。備前焼甕 43 は口縁部の破片で、口縁端部は折り曲げて断面形が長楕円形の玉縁を呈する。口縁部形態から重根分類（重根 2003）のIV a に相当し、14世紀後半

～15世紀前半の位置付けが考えられる。

青磁碗44は口縁部の破片と体部から底部にかけての破片で、接合しないが同一個体と考えられる。外面に細線で細い蓮弁文を施しており、口縁部には弁端の劍頭文と細線で蓮弁としての単位が維持されている。見込みには印花文が施される。高台部は外側縁辺部、疊付から高台内面にかけて釉薬が掻き取られている。上田分類（上田1982）のB-IV類に相当し、15世紀後半頃に位置付けられる。45は口縁部のみの破片である。口縁部はやや鋭い作りで、外反する。上田分類（上田1982）のD-II類に相当し、15世紀前半頃の位置付けが考えられる。

なお、微細破片のため図化不能であったが、飛鳥編年（西1986）の飛鳥IIIに相当する須恵器杯G蓋の口縁部の破片が出土している。

（2）包含層（その他）（図版15、写真図版16・22）

土師器皿46～49、青磁碗50～52があり、また調査区南壁精査中に出土した弥生土器蓋53、施釉陶器の肥前陶器（唐津焼）皿54がある。

土師器皿46は口縁部から底部までの破片である。回転台成形によるもので、体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや厚くなりつつ丸く收める。内外面に回転台使用によるナデが施される。底部外面は板状工具によりナデが施される。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。47は口縁部から体部までの破片である。おそらく手捏ね成形によるもので、体部は斜め上方に低く立ち上がり、口縁端部でわずかに上方に立ち上がり、端部は丸く收める。内外面にはヨコナデが施される。焼成・胎土は、淡橙色系の色調を呈し、砂粒は目立たない。48・49は底部の破片である。回転台成形によるもので、底部内面には回転台使用によるナデが施され、外面には板状工具によるナデが施される。焼成・胎土は、褐色系の色調を呈し、48は砂粒が目立つが、49は目立たない。

青磁碗50～52は龍泉窯系で、いずれも口縁部のみの破片である。口縁部外面には片切彫りで雷文帯が施される。50は雷文帯の下に蓮弁文の一部が認められる。いずれも上田分類（上田1982）C-II類に相当し、15世紀前半に位置付けられる。

弥生土器蓋53は口縁部のみの破片である。口縁端部に指頭圧痕文が施される。唐津焼皿54は口縁部から体部の破片である。内外面はやや粗い白化胎土の刷毛目が施された後に施釉され、胎土は赤茶色、釉薬は黒褐色を呈し、体部破片下端の外面は露胎している。18世紀前半頃に位置付けられる。

なお、微細破片のため図化不能であったが、調査区南東部の第4層より下層では、13世紀頃の須恵器捏鉢口縁部や飛鳥編年（西1986）の飛鳥I・IIに相当する須恵器杯H身の口縁部の破片が出土している。

第2節 その他の遺物

1. 金属製品（図版16、巻頭写真図版6、写真図版23・24）

金属製品は、遺構から出土しているものとして釘・板状鉄製品・鑿がある。そのほかに炭化物・焼土層を中心として包含層からは刀子・釘・銅錢が出土している。

（1）遺構出土

釘 M1の1点がある。角釘である。頭部・先端部が欠失している。SB03のP13から出土している。

板状鉄製品 M2 の 1 点がある。M2 は厚さ 4 mm の板状を呈する鉄製品で、用途不明である。SB03 の P15 から出土している。

鑿 M3 がある。M3 は、鑿の穂から茎部分及び口金部分の M3-1 と、柄尻の止め金具にあたる冠（かつら）部分である M3-2 で構成される。M3-1・2 は分離しているが、いずれも SK14 から出土した同一個体である。M3-1 は、穂と茎は同じ方向に沿って弓形状を呈し、穂と茎を合わせた残存長は 18.4 cm である。穂の長さは 14.7 cm、茎は先端部が欠失しているが残存長 3.7 cm を測る。穂だけを見ると嘴状の形を呈し、その横断面は長方形を呈し、中程で幅 1.3 cm、厚さ 1.1 cm、先端近くで幅 1 cm、厚さ 0.85 cm と少し細くなっている。先端は現状ではやや丸味を帯びるが、本来は尖った刃先があったと考えられる。茎部分には、表面に木質の繊維とみられる細かな筋が付着しており、木製の柄であった可能性がある。茎の横断面も概ね長方形を呈し、中程で幅 0.85 cm、厚さ 0.7 cm を図る。目釘穴などは認められない。口金は、外径 3.5 cm、内径 2.3 cm、高さ 1 ~ 1.3 cm の円環で、断面は厚さ 0.3 ~ 0.4 cm の長楕円形を呈するが、内部は空洞になっている。おそらく薄い板状の鉄を折り曲げるなどして円環を作ったとみられ、鉄板の厚さは 1 mm にも満たない。穂と茎の境には区（まち）があり、穂の根が「八」の字に広がるような形をしている。区の幅は 2.3 cm である。口金の上端線と区の下端線が揃っているため、茎が柄に嵌め込まれた場合、区が柄の上端面で引っかかり、柄の上端を口金で留めて固定していたとみられる。茎が反っていることから柄も同様に反っていた可能性がある。M3-2 の冠部分は、外径 3.1 cm、内径 2.2 cm、高さ 1.3 cm の円環で、断面は厚さ 0.3 ~ 0.6 cm の長楕円形を呈するが、内部は空洞になっている。冠部分も口金とほぼ同じ大きさと特徴をもっており、同様に厚さ 1 mm 前後の薄い板状の鉄を折り曲げて円環を作って柄尻を留めて固定していたとみられる。M3 は通常の鑿とは異なって反りを持つことから、和船の側板同士を留めるための縫釘の穴を穿つ、「片鎗鑿（かたつばのみ）」と同系統の鑿と考えられる（第 10 図）。

（2）包含層出土

刀子 M1 の 1 点である。M1 は身と柄が残っているがそれぞれの先端部は欠失している。身と柄の境には、僅かに区（まち）があり、身の方が僅かに幅広くなっている。身の断面は三角形、柄の断面は長方形を呈する。調査区の西側法面精査中に出土している。

釘 M5 ~ 7 の 3 点がある。M5 は平折釘で、頭部は平たく折れ、軸の幅は 1.8 cm × 1.45 cm と太い。SX01 周辺の炭化物・焼土層から出土している。M6 は頭巻釘である。軸の中程から曲がり、先端部は欠失している。確認調査トレンチ No. 8 西端の SD01 に当たる部分から出土している。M7 も頭巻釘である。頭部の巻いている部分と先端部が欠失している。調査区南端部で出土している。

銅錢 M8・9 の 2 点がある。M8 は明錢の「洪武通寶」で、模倣銭もあるが、初鑄年代は 1368 年である。裏面には文字等は施されない。確認調査トレンチ No. 8-2 から出土している。M9 は北宋錢の「熙寧元寶」で、初鑄年代は 1068 年である。裏面には文字等は施されない。SX01 北側に近接する炭化物・焼土層から出土している。

2. 壁土（巻頭写真図版 6、写真図版 25・26）（第 9 図）

第 4 層上部の炭化物・焼土層及びこれを由来とする遺構埋土を中心として、総重量 6590.3 g の壁土が出土している。確認できた壁土は、極粗粒砂～中礫（2 ~ 6 mm 大）の砂粒が少量混じっており、全て細かな破片で、5 cm 大を越えるものは少なく、被熱によって概ね淡橙色～褐灰色を呈している。これ

らは、火災によって焼けた土壁の一部が残存した破片で、火災後の整地によって原位置を保たず細片化したものとみられる。また、壁土の破片には、土壁の構造（第9図）を示す圧痕をとどめるものが多数認められた。ここでは、それらの痕跡をI類～IV類の4つに分類し、代表的な資料E1～12を第7表及び写真図版として掲載した。そのほか痕跡が残らないもの、不明なものについては「不明」として取り扱った。

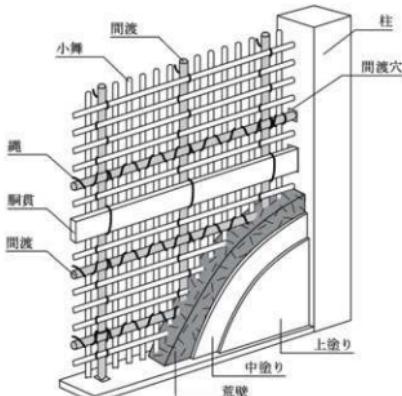
I類は、小舞または間渡の痕跡が残るもので、I a～c類の3つに細分できる。I a類は小舞・間渡の圧痕が緩やかな曲面をもって平たく、浅く産むもの、あるいは僅かに膨らむものである。E1～3が代表的で、E1・2は浅く産み、E3が僅かに膨らむものである。曲面には筋状の細かな凹凸が見られるものもある。太めの丸竹を複数枚に分割して小舞や間渡として利用したものの痕跡が想定される。I b類は、小舞または間渡の圧痕が比較的細く、U字型に産むものである。深いものからやや浅いものもある。E4・5が代表的なものである。半割にした細い丸竹の外面の圧痕が想定される。E4・5は片面に1本の圧痕が残るが、E11・12は2本の小舞・間渡が交差する圧痕が認められる。E12は片面にのみ残る。E11は片面（A面）に縦方向の1本、その反対面（B面）に交差する横方向の1本の圧痕が残り、交差する小舞・間渡に挟まれた壁土となっている。I c類は、小舞または間渡の圧痕が比較的細く、断面「U」状に産むものである。E6が代表的なものである。半割にした細い丸竹の内面の圧痕が想定される。

II類は、縄目の圧痕が残るものである。E7が代表的なもので、太さ約1cmの1条の縄の圧痕があり、小舞や間渡等の間を通して固定する縄の痕跡が想定される。

III類は、スサの圧痕が残るものである。E8が代表的なもので、藁スサとみられる草本類の繊維の圧痕が残る。藁スサを混ぜ込んだ荒壁の土が想定される。

IV類は、少なくとも片面に平滑な面を持つものである。E9・10が代表的なもので、コテ状の道具で撫でつけられて表面の砂粒が埋没しており、壁面部分にあたると想定される。

なお、分類別の重量は、I類4712.1g（I a類2179.2g、I b類1622.5g、I c類910.4g）、II類46.3g、III類837.2g、IV類56.8g、不明937.9gである。



第9図 土壁構造模式図

第5章 まとめ

第1節 遺物・遺構について

1. 遺物について

(1) 土器・陶磁器類について

土器・陶磁器類については、弥生土器、土師器杯、土師器皿・鍋・三足器、瓦器椀、焼締陶器の備前焼擂鉢・壺・甕、肥前陶器（唐津焼）皿、中国産青磁碗・白磁碗が出土しているほか、図化できなかつたが須恵器杯・捏鉢も認められた。確認できた土器・陶磁器類の年代については、中世に所属するものが多く、そのなかでも中世後期、概ね15世紀のものが中心を占める。ここでは、古代以前と中世前期・中世後期・近世にわけて記述し、まとめとしておく。

①古代以前

古代以前の土器としては、弥生土器壺53や、古代では図化不能の為図示できなかつたが、飛鳥I・IIの須恵器杯G蓋、飛鳥IIIの杯H身が、また焼成不良の須恵器とみられる8世紀後半の杯B蓋31が出土している。出土量はいずれも破片1点程度と極僅かである。近接する下内膳遺跡や下加茂遺跡、里池遺跡では弥生時代や古代の遺構・遺物が確認されており、本遺跡ではこれらの周辺域として関連して同時代の遺物が散布するような状況であったと理解される。

②中世前期

出土した中世の土器類の中でも、古相を示し、概ね中世前期に位置付けられるものが僅かに確認できる。土師器皿35（中世前半・11～14世紀）、土師器三足器5（13世紀～14世紀）、須恵器捏鉢（図化不能・13世紀頃）、瓦器椀27（14世紀前半）がある。古代以前とほぼ同様の状況といえる。

③中世後期（15世紀代）

土師器皿・鍋、備前焼擂鉢・壺・甕、中国産青磁碗・白磁碗がある。多くは中世後半、特に15世紀に位置付けられるものを主体とする。

土師器皿 口径10cm未満（7.6～9.9cm）の3・6・15・29と、口径10cm以上（10.9～13.9cm）の1・10・14・18・19・23・24・28・32・36・38～40・46・47に大きく分けられる。また、破片が多いため判別は難しいが成形方法で分類すると、回転台使用によるものは、1・4・7・10・16・19・23・24・29・30・32・37・46・48・49があり、手捏ねによるものは、2・3・6・14・15・18・20・25・28・36・38～40・47がある。口径の大小と成形方法には明確な相関性はみられない。また、色調については淡椎色系を呈するもの、褐色系を呈するものの大きく2種類がある。胎土に含まれる砂粒については、概ね後者には含まれる砂粒が目立つ傾向にあるが、成形方法や口径との相関性は明確には認められない。しかし、逆にいえば、時期差や生産地、製作者の多様性はあるものの、ある程度の規格性は指摘できよう。年代については、淡路の土師器皿編年研究が未だ確立されていない現状では、資料数も限られており、検討を行うには不十分な状況といわざるを得ない。しかし、遺構での共伴や包含層での出土状況を踏まえると、後述する主体となる土器類の編年観が参考となり、今回確認できた土師器皿については概ね中世後期、さらにいえば15世紀頃を中心とする所産と捉えておきたい。

土師器鍋 確認できた鍋はいずれも羽釜タイプ播磨型に分類され、15世紀前半に位置付けられる11・

17・33と15世紀後半に位置付けられる9・22・34・41がある。

焼錦陶器 備前焼壺 8 (15世紀前半)、備前焼甕 43 (14世紀後半～15世紀前半)、備前焼擂鉢 42 (15世紀後半) がある。

磁 器 青磁は、15世紀前半に位置付けられる広形蓮弁文碗26、雷文帶碗50～52、端反り碗45と、15世紀後半に位置付けられる細形蓮弁文碗13・44がある。一方、白磁は14世紀後半～15世紀に位置付けられる端反り碗12がある。

④ 近世

18世紀に位置付けられる肥前陶器(唐津焼)皿54のみが出土しており、古代以前と同様の状況にあつたとみられる。

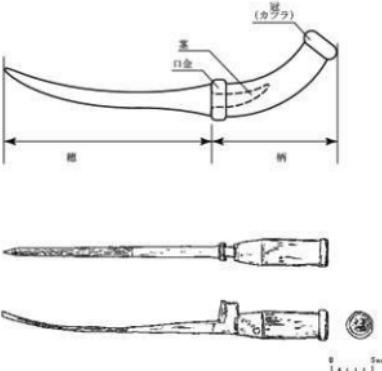
小結

土器・陶磁器類は出土する器種は皿・碗・鉢・鍋・甕といった食器、調理器、貯蔵器で構成されており、その時期については中世後期、特に15世紀代に位置付けられるものが主体的である。15世紀代を中心として人の生活が営まれたと判断される。古代以前、中世前期、近世については、遺物の出土量も少なく散布する程度で、近隣の集落の周縁部にあたると考えられる。

(2) 磐について

艦の形状 SK14から出土した艦M3は、穂と茎が弓形に反っていることから、柄も同様に反っていたと考えられた。また、柄の上下を口金と冠で留められていたことから、これを踏まえて、第10図上のような復元図が推測された。通常の艦とは異なって穂の部分に反りを持つことから、和船の側板同士を留めるための縫釘の穴を穿つ、「片銅鑄（かたつばのみ）」と同系統の艦が想定される。しかし、片銅鑄については、民俗例（第10図下）や1766（明和3）年に記された『和漢船用集』の掲載例では、穂の反りの内側で口金と接する部分に、打ち込んだ艦を外すための厚みをもった四角い鍔をもっており、本資料は鍔を持たない点で大きく異なっている。この点に関しては、柄が穂と同様の方向を向いていた場合、柄の反りによって作業面に対して艦の柄が斜めになることから、斜めになっただ柄が抜き取り時の鍔と同様の機能を果たした可能性が考えられる。また、艦の形状や鍔を持たないことについては、打ち込み時や抜き取り時の作業位置や姿勢等への影響した可能性もある。

齋の年代 出土したSK14はSD04の機能時に形成・埋没している。SD04の機能時堆積層には15世紀前半の青磁碗26が出土し、最終的には火災後の整地層と考えられる第4層上部(炭化物・焼土層)によって埋没している。当該層は、後述するように少なくとも15世紀後半には形成されており、SK14の埋没時期の



(上) 宮ノ谷道解説書(上巻)原版(昭和10年) (下) 宮ノ谷道解説書(上巻)復元版(昭和10年)

第10図 鑿の復元模式図と民俗例

下限、つまり盤が SK14 に埋没した時期については 15 世紀後半の位置付けが考えられる。

2. 遺構について

(1) 第4層上部の炭化物・焼土層の形成時期について

火災後の整地層と考えられる第4層上部である炭化物・焼土層が形成された時期については、包含層出土遺物及び、当該層で覆われて埋没した遺構 SD04 から出土した遺物から判断できる。まず、炭化物・焼土層直上として当該層検出時に出土した土師器鍋 33・34 は、33 が 15 世紀前半、34 が 15 世紀後半に位置付けられ、これより新しいものは出土していない。そして、炭化物・焼土層からは土師器皿 35 のように中世前半期に位置付けられるものも僅かに含まれるが、15 世紀後半の土師器鍋 41・備前焼擂鉢 42・青磁碗 44、14 世紀後半～15 世紀前半の青磁碗 45（15 世紀前半）・備前焼甕 43（14 世紀後半～15 世紀前半）が出土し、主体を占めている。そして、炭化物・焼土層で最終的に埋没した SD04 の機能時堆積層からは 15 世紀前半の青磁碗 26 が出土した。これらのことから炭化物・焼土層には、下層に含まれる古い土器が少し混じりつつも、層の形成、すなわち火災後に整地された時期は、15 世紀後半になると考えられる。

(2) 遺構の時期と変遷

各遺構の時期的位置付けに関しては、これまでの遺構・遺物の報告を踏まえ、第4層上部である炭化物・焼土層の形成時期、つまり火災・整地段階を基準に、第4層の上層と下層で大きく区分して第2表のように整理できる。また、火災・整地段階前後の掘立柱建物、溝等の主体をなす遺構の変遷について第11図として図示した。

第4層より下層 第4層より下層としては、第5層下面遺構の SK19、SD07 や、第5層上面遺構 SD03、第4層形成前に掘削された SK07 がある。いずれの遺構からも所属年代を明らかにできる遺物の出土はなかった。所属する年代・時期については、第4層上部形成時期の年代観と、包含層から出土する僅かな古手の遺物の様相から、古代以前・中世前期以前の遺構として位置付けておく。

第4層 第4層では、上部の炭化物・焼土層の形成前後で 2 つの段階に区分できる。すなわち、火災とその後の整地によって炭化物・焼土層が形成される火災・整地段階と、その前にあたる火災前段階である。火災前段階では、複数の掘立柱建物 SB01・03～05 とそれらの周囲を廻る溝 SD01・05・06、そして SD01 の中程で分岐してこれらを南北に区画する SD04、SD01 の南東の張り出し部を仕切る SD02 が形成される。SB01・04・05 の東側の柱列が直線的に揃うだけでなく、これら掘立柱建物と周囲を廻る溝の南北の主軸は基本的には殆ど同じで N 17°～19° W に收まり、これらの遺構は極めて相関性が高いといえる。また、溝内に堆積する土から、SD01 と SD04 は同時期に機能しており、最終的には SD02 も含め炭化物・焼土層によって埋没していたことが判明した。まず、建物及びその周囲を廻る溝とその内側の土地について、SD04 の南側区画と北側区画に分けて見ていく。

SD04 南側区画では、周囲を廻る溝 SD01 の南側（以下、SD01 南）、仕切り溝 SD02、建物は基本的には SB01 のみが建てられる。SB01 は、掘立柱で構成される建物部分の SB01A と礎石立ちと推定される建物部分の SB01B がある。これらは、掘立柱建物に礎石立建物が増改築された可能性もあるが、柱穴・礎石を共有する柱の並びであり、礎石立建物部分が欠落するとやや歪な建物になることから、基本的には同時に建てられた一連の建物であると考えられる。SB01 の南東隅には一部張り出した部分があり、連

第2表 遺構変遷表

層序	年代・時期	遺構								
		掘立柱建物		柱穴	溝			土坑	石組み 造構	
		北側区画	南側区画		北側区画	中央	南側区画			
第4層 より下層	古代以前 ・中世前期以前				SD03 (第5層上部)			SD07 (第5層 下部) ・ SK07 (第4層 形成段)		
第4層	中世 後期 15世紀 (火災・ 整地段階 より後 まで)	火災前 段階	1期	SB04		SD05		SD04 ・ SD02	SK14	
			2期	SB05	SB01 A・B	SD06	SD01北 ?			
			3期	SB03	その他	その他	SD01北			
上部 (炭化物・ 焼土層)	15世紀 後半	火災・整地段階		SB03 埋没	SB01 廃絶	P78・ P14・ P06 埋没	SD01・SD02・SD04埋没			
第4層 上部上層	15世紀 後半 以降	火災・整地段階 より後	SB02	その他	その他					SK01
第3層 下面	近世?								SK01	

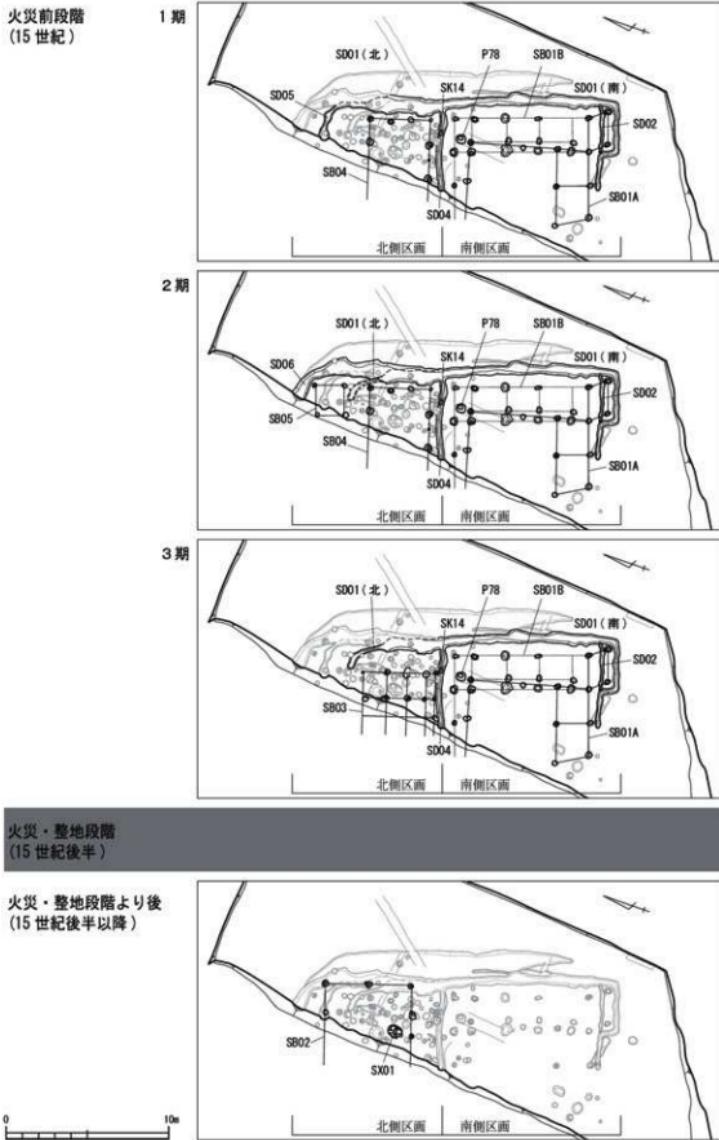
動してSD01も同様に凸型に張り出して、SB01の南側を廻るようになっている。そして、この張り出し部分を仕切るように東西方向の浅い溝SD02が設けられている。SD04を含む南側区画のSB01、SD01南、SD02はほぼ同時期に形成され、機能していたと考えられる。なお、南側区画に位置し、代表的な柱穴として報告したP78については、SB01の北東隅の建物区画と重なり、火災・整地段階には埋没したとみられることから、断定はできないがSB01と関連する遺構の可能性がある。

一方、SD04より北側区画では、建物の東側から北側にかけて廻る溝SD01の北側（以下、SD01北）、さらにその北側を廻るSD05・06がある。溝の切り合い関係から、基本的にはSD05 → SD06 → SD01北の順で形成されたと考えられるが、SD06とSD01北の切り合いが平面・断面で明確に確認できていないことから、同時に機能していた可能性もある。また、北側区画では南側とは異なって、柱穴が多数切り合って見つかっており、複数次にわたる建物の建て替えがあったことが明らかで、そのうちSB03～05の掘立柱建物が復元できた。これらの復元できた建物と溝の切り合い関係及びその位置関係をもとに、1～3期の3つの小期に区分できる。火災前段階1期は、北側周囲を廻るSD05、その内部にSB04が形成される。2期は、北側周囲を廻るSD05が埋まってSD06が形成され、その内部にSB05及びSB04も存続していたと考えられる。また、SD01北も存在していた可能性がある。そして3期は、2期までの建物・溝が埋まり、北側周囲を廻るSD01北とその内部にSB03が形成されたと考えられる。そのほかに建物として復元できなかった柱穴については、1期以前か3期以降の時期に形成されたものもあった可能性がある。また、北側区画で代表的に取り上げた柱穴P06・14についても同様の状況が考えられ、火災・整地段階までには埋没したとみられる。

なお、SD04機能時には、盤が出土したSK14がSD04内で掘削されている。SD04が炭化物・焼土層で埋没するまでの間に形成されたとみられる。

以上のようにSD04南側区画ではSB01が建てられ、継続して存在する間に、北側区画では、複数の建物の建て替えとともに溝の北側部分の切り替えが行われたと考えられる。そして、火災・整地段階には北側区画のSB03やSD01北と、区画溝のSD04、南側区画のSB01、SD01南・SD02は埋没し、廃絶した。

年代・時期については、前項で第4層上部の炭化物・焼土層の形成時期を15世紀後半の位置付けど



第11図 火災・整地段階前後の遺構変遷図

想定された。火災前段階については、出土遺物からは 14 世紀後半まで遡る可能性もあるが、主体をなす 15 世紀代を中心とした年代で、第 4 層上部が形成されるまでの時期として捉えておきたい。

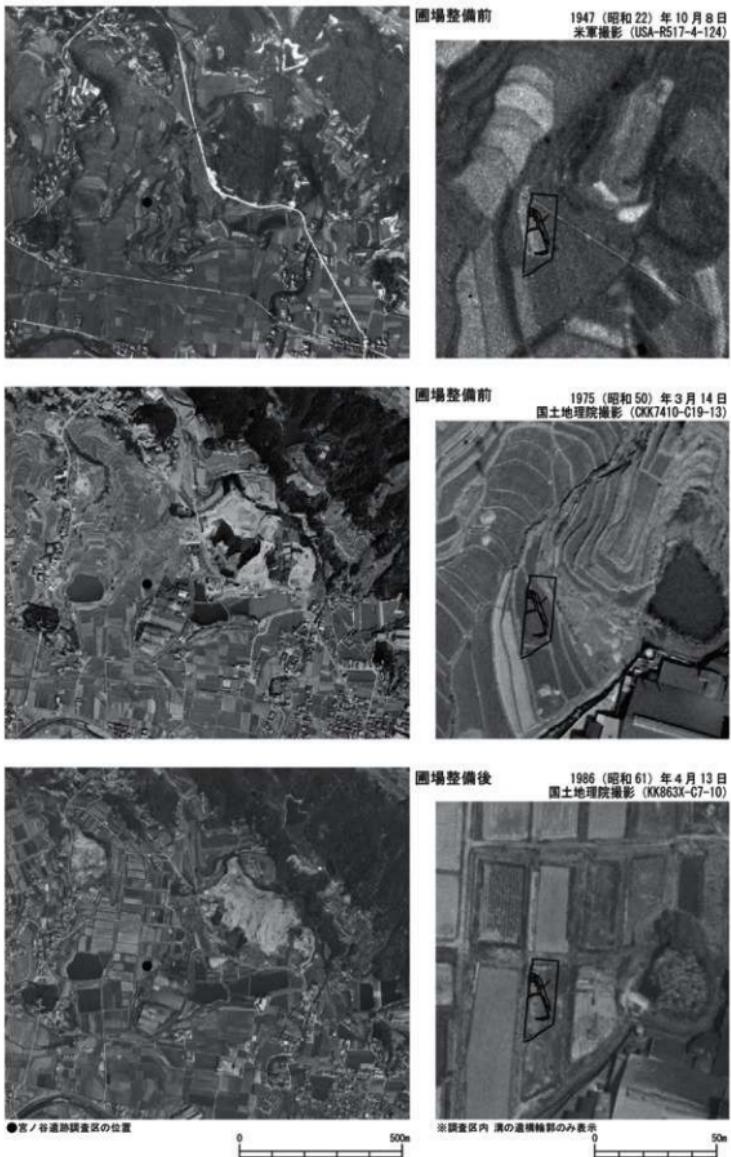
第 4 層上部上面 第 4 層上部上面遺構として、SB02・SX01 がある。いずれも炭化物・焼土層形成後に上面から掘り込まれたと考えられる遺構で、火災・整地段階より後に位置付けられる。年代・時期については、第 4 層上部の年代観から 15 世紀後半以降と捉えておく。なお、そのほかにも建物として復元できなかつた柱穴などでこの時期に形成されたものもあった可能性がある。

(3) 建物・溝の主軸と旧地形について

圃場整備後の調査地周辺は、大きく地形が変化している。調査区で検出した建物及び周囲を廻る溝の主軸と位置に関して旧地形と比較検討し、立地状況についてみておく。

旧地形との比較にあたり、G I S（地理情報システム）を利用する。使用する G I S ソフトは Q G I S 3.10 である。座標参照系を世界測地系第 V 系（参照系 ID EPSG : 2447）として、空中写真測量成果の CAD データ（ファイル形式 DXF）を読み込み、圃場整備前地形状況を示す国土地理院の地理院タイルの年代別空中写真（1974～1978 年）及び全国最新写真（シームレス）を背景画像として同時に表示させた。これらの背景画像となる地理院タイルでは、1975 年に国土地理院が撮影した空中写真が表示され、圃場整備前の地形状況を把握することができる。調査区が表示された部分を中心基準として、地形的な特徴をもとに国土地理院が公開・提供する撮影時期の異なる 3 枚の高精細の空中写真データ（重ねあわせ）を表示させた。左側には調査地の位置を周辺地形とともに示し、右側には調査地部分を拡大して、調査区と高精細空中写真のみを表示している。重ね合わせた国土地理院提供の高精細空中写真は、圃場整備前の状況が写される、1947 年 10 月 8 日米軍撮影の「USA-R517- 4-124」（第 12 図上段）、及び 1975 年 3 月 14 日国土地理院撮影「CKK7410-C19-13」（第 12 図中段）と、圃場整備後の状況を示す 1986 年 4 月 13 日国土地理院撮影「KK863X-C 7-10」（第 12 図下段）である。旧地形、すなわち圃場整備前に地形が写された前 2 者を見ると、調査区で検出した溝遺構 SD01 の東側（主軸 N 18.5° W）は、ちょうど土地の境界に相当する南北方向に走る畦と重なることが分かる。この畦は N 18° W に主軸をもっており、SD01 を初めとする掘立柱建物の周囲を廻る溝とほぼ同じである事が分かる。圃場整備前の空中写真からは、調査区周辺の地形状況も合わせて考えると、このような畦は斜面地に田畠として利用する平坦面を造成すると同時に、ある程度地形に沿って形成されている状況を読み取ることができる。この点を踏まえると、調査区で検出した溝は地形に沿って作られていることは明らかであり、溝と同一主軸をとり、一体的に建てられた SB01・03・04・05 も同様に地形に合わせて建てられたことが分かる。さらに、SD01 と同位置にある圃場整備前の畦は、東側が高く、西側に低くなる斜面との境をなすものであり、SD01 は建物東側の高い方の斜面側に設定されたもの、つまり建物の背面となる斜面側に溝を作り、建物の周間に廻らせて排水を行っていたと考えられる。また、SD01 の南辺についても第 12 図上段・中段では、東西方向の畦の手前で屈曲している状況が読み取れる。調査区の南東部が落ち込み状に下がる地形や、調査区南壁の西側で第 4 層（土壤層 I）が一段落ち込むような堆積状況を示す状況を勘案すると、ここにも地形的な境界が存在していた可能性が高い。SD01 北や SD05・06 がいずれも西側に向けて湾曲することについては、圃場整備前の地形からは明確には判断できないが、何らかの地形的な制約があった可能性は十分にある。

以上のことから、調査区で検出された 15 世紀代を中心に位置付けられる建物やその周囲を廻る溝は、



第 12 図 調査地の位置と周辺地形の変遷

地形に沿って、あるいは地形に規制されて造成されたことが明らかである。また、地形に沿った南北方向の溝と建物の東辺の柱列が平行することも、建物も同様の関係下で一体的に造成されたと考えられる。さらに、火災・整地段階後に建てられたと考えられるSB02の主軸が、火災前とほとんど変わらずに同じ主軸をとって、地形に規制されている状況が読み取れることは、火災・整地段階は地形に変化を及ぼすものではなかったと考えられる。これらのこととは、逆にいえば、圃場整備前の周辺地形や立地の状況は、15世紀の様相とほぼ変わっていない可能性があり、当時の周辺には地形に沿って棚田状に斜面に平坦地が造成されていた景観が推測される。

(4) 土地の利用方法と建物の様子

前項までに建物の背面となる斜面地との境に、建物の周間に溝 SD01・05・06 を掘らせて排水を行っていたことが明らかになったことを踏まえて、SD01 と同時に機能していた SD04 についても南北を区画するとともに同様に西側への排水機能を持っていたと考えられる。同様の斜面地に対する溝と建物の配置は、宮ノ谷遺跡の約 1.1 km 北側に位置する清間遺跡でも近い年代の遺構が確認されている。これらの事例は、中世の淡路における斜面地の平坦地造成と建物及び溝の配置と土地利用のあり方や共通性を知る上で参考になる。

そして、これまでに見てきたように SD04 の南側区画と北側区画では、柱穴の密度は明らかに北側が高く、少なくとも 3期に区分できるほどの建物の建て替えがあった。これに対し、南側区画の SB01 についてはその建て替えの間も存続していたと判断された。このことは、区画の南北で土地利用、さらにいえば建物利用の違いがあることを示唆する。まず、南側区画の SB01 は、建物南東部が建物周囲の溝とともに一部が張り出す特徴的な構造は、いわゆる「下屋」に相当し、それが取り付く SB01 の建物の大半部分は「母屋」にあたる可能性がある。一方、北側区画の建物の利用方法に関しては、十分に検討できる情報もなく、にわかに明らかにし難いが、南側区画の SB01 が母屋として継続的に存在する建物とすれば、建て替え頻度の高い北側区画の建物は、母屋とは異なる建物の利用方法が推測される。

建物の様相については、北側区画の建物は基本的に掘立柱建物であり、南側区画の SB01 は掘立柱と礎石立柱を併用したとみられる建物であった。SB01 については、その西側、特に SB01A の北西部について、掘立柱が検出されなかった梁行 2間、桁行 2間の空間があり、建物の中の間取りとしても利用方の違いが看取される。そして、炭化物・焼土層から主に出土した総重量約 6 kg の焼けた壁土の存在からは、土壁をもつ建物があった事が分かる。ただし、全体的に土壁であるとすれば、出土した壁土は少なく、部分的に土壁であった可能性も十分にある。

柱穴から出土した柱材とみられる木材については、樹種同定の結果、北側区画の SB03 (P13・P71) では芯持丸木のクリが用いられていた。そして、南側区画の SB01 の下屋の柱穴に相当する張り出し部分の P89 からは炭化して細片化したマツが出土したことが明らかとなった。また、火災・整地段階より後に建てられた SB02 の P12 からも同様に炭化・細片化したマツが見つかっている。SB03 の柱材は、柱穴に据えられた状況の柱根部が見つかっており、北側区画での掘立柱建物の柱材としてクリが利用されていたことは間違いない。しかし、SB01・02 出土木材はとともに柱穴に廻棄されたような出土状況であったことから、実際に柱として用いられたか断定し難い。

(5) 小結

以上のことから、宮ノ谷遺跡では、斜面地に造成された平坦地に建物とその周囲を廻る溝が造成され、15世紀を中心に生活が営まれたことが明らかとなった。建物遺構SB01・03～05及びその周囲を廻らせる溝SD01・05・06を検出しており、建物と溝は主軸を同じくし、周囲の溝の南北方向と建物東辺の柱列が地形に沿って平行になるなど、一体的に造られていたと考えられる。周囲の溝については、建物背面の斜面地との境を区切り、排水するものと理解された。また、その溝に対して直交して同時に排水機能を有する溝SD04は、周囲の溝の内部の土地を南北に区画するもので、土地区画の利用方法も異なっていた。北側区画のSB03～05は溝の北端部の切り替えとともに少なくとも3期に渡って建て替えが行われる一方、その間に南側区画ではSB01が継続して存在しており、建物の利用方法についても異なると考えられた。特に、SB01については建物の一部が張り出す構造を持つことも踏まえて、下屋を有する母屋の可能性が示唆される。また、北側区画の建物の一つSB03はクリを柱材とする掘立柱建物であり、南側区画のSB01は掘立柱と礎石を併用する建物である可能性が考えられる。さらに、焼けた壁土の破片が出土することから、少なくとも土壁を有する建物があることも明らかとなった。そして、15世紀後半には火災とその後の整地の結果、これらの遺構は埋没・廃絶した。その後、15世紀後半以後も火災・整地段階の炭化物・焼土層の上面には、同じく地形に沿って建設されたSB02や、機能は不明であるが石組み遺構SX01が形成され、何らかの活動がみられるものの長くは継続しなかったとみられる。

いずれにしても、15世紀には、尾根の西側斜面に造成された平坦地に斜面を背にして西面する建物が建っており、特に15世紀後半の火災と整地の前には、土壁を有する建物を含む少なくとも2棟以上の建物が横に並び、その周囲には溝が廻る、さながら農村住宅のような景観が復元できる。

第2節 総括 一宮ノ谷遺跡の評価一

最後に、宮ノ谷遺跡の発掘調査成果等について箇条書きし、本報告の総括とする。

1. 宮ノ谷遺跡は、兵庫県洲本市上加茂に所在する遺跡である。
2. 宮ノ谷遺跡は、洲本平野の北側、洲本川左岸域に位置する。先山の麓から東側に向けて派生した丘陵に、洲本川に向かって南東から南方に複雑に形成された多数の細かな開析谷と尾根のうち、积迦堂川と箕川に挟まれた東側丘陵尾根の西側斜面に造成された平坦地上に調査区は立地する。
3. 調査区中程では、炭化物・焼土・遺物が多く含まれる第4層上部（炭化物・焼土層）が、SD01の内側を中心に北西から南東方向に向かって分布し、掘立柱建物の柱穴やそれらを閉むSD01の最上層を覆っていた。当該層には、建物の焼けた壁土の破片が含まれ、淘汰の悪い堆積構造を示すとともに、火災による建物損壊後に整地がなされた層と考えられる。遺構は第4層の上面及び除去面で検出され、特に除去面において遺構が集中していた。
4. 出土遺物には、古代以前、中世前期、中世後期（15世紀）、近世の遺物があり、中世後期（15世紀）の遺物が大半を占め、主体をなす。の中でも、出土した土器・陶磁器類は、食器・調理器・貯蔵器で構成されており、居住生活を主とする人間の活動が推測される。
5. 出土遺物から 第4層上部（炭化物・焼土層）、すなわち火災後の整地層の形成時期は、15世紀後

半に位置付けられる。

6. 遺構については、古代以前、中世前期に位置付けられる溝・土坑、中世後期の中でも15世紀に位置付けられる多数の柱穴・掘立柱建物・溝・土坑・石組み遺構、近世頃に位置付けられる可能性がある土坑を検出している。の中でも、15世紀に位置付けられる遺構が主体をなす。
7. 15世紀の遺構としては、建物遺構SB01・03～05及びその周囲を廻らせる溝SD01・05・06を検出している。建物と溝は、主軸を同じくし、周囲の溝の南北方向と建物東辺の柱列が地形に沿って平行になるなど、一体的に造られていた。周囲の溝については、建物背面の斜面地との境を区切り、排水するもので、この溝に対して直交して同時に排水機能を有する溝SD04も設けられた。SD04は周囲の溝の内部の土地区画を北側と南側に分けるもので、建物の建て替え頻度の違いから南北区画で土地利用方法も異なっていた。
8. 北側区画には多数の柱穴が見つかっており、南側区画と比べて建物の建て替え頻度も高く、復元できた掘立柱建物は少なくとも3期に渡って建て替え等が行われた。一方、南側区画では、その間にSB01のみが継続して存在しており、建て替え頻度の差から建物の利用方法についても異なると考えられた。特にSB01については、下屋を有する母屋の可能性が示唆される。また、北側区画と南側区画の建物は、基本的には横一列に並んで建てられていたとみられる。
9. 北側区画の建物の一つSB03は、クリを柱材とする掘立柱建物であり、南側区画のSB01は掘立柱と礎石を併用する建物である可能性が考えられ、土壁を有する建物があることも明らかとなった。
10. 15世紀後半には火災が発生し、建物の損壊後に行われた整地の結果、これらの遺構は埋没・廃絶した。その後、15世紀後半以後も火災・整地段階の炭化物・焼土層の上面には、同じように地形に沿って建設された掘立柱建物や石組み遺構が形成されたが、何らかの人の活動が見られるものの長くは継続しなかった。
11. 調査区の所在位置には、圃場整備前では地形に沿って平坦地が造成され、その東側と南側に地形の境界を示す畦がある。東側畦については、その位置と方向が、調査で検出した建物周囲を廻る溝の南北方向部分と一致する。一方、南側畦より南側は地形が変化するため、溝の南辺部分は、南側畦の北側に位置する。のことから、圃場整備前の地形には、15世紀頃の地形状況が残っている可能性が高く、調査区周辺の棚田状の地形も、当時の地形景観を残している可能性がある。
12. 15世紀を中心に、丘陵尾根の西側斜面に造成された平坦地に、溝に囲まれた2～3棟の建物が地形に即して横に建ち並び、人間の居住生活が営まれた様子が明らかとなった。そして、建物は少なくとも15世紀後半に、火災によって損壊し、その後の整地によって埋没したことが明らかとなった。
13. 宮ノ谷遺跡は、15世紀を中心とする特徴的な遺跡であり、淡路における当該期の土地利用方法や建物の様相を知る上で重要な成果といえる。

引用・参考文献

《第 1 章》

- 淡路市教育委員会編 2020『舟木遺跡 I-B・D 地区の調査』(淡路市埋蔵文化財調査報告第 15 収)
- 青木哲哉 2010「下加茂遺跡の地形環境」兵庫県立考古博物館編『下加茂遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 371 収)
- 浦上雅史 2016『歴史講演会「すもと松の内はこうして生まれた」城下町すもとまちづくり協議会
- 洲本市史編さん委員会編 1974『洲本市史』洲本市
- 高橋 学 1996『洲本川流域の地形環境分析』『下内膳遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 155 収)
- 高橋 浩他 1992『5 万分の 1 地質図幅「洲本」』地質調査所
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1996『下内膳遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 155 収)
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 2000『波毛遺跡・川添遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 199 収)
- 兵庫県立考古博物館編 2010『下加茂遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 371 収)
- 兵庫県立考古博物館編 2008『下加茂遺跡 II』(兵庫県文化財調査報告第 351 収)
- (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部編 2015『清間遺跡・三本田池遺跡』(兵庫県文化財調査報告第 476 収)
- 山上雅弘 2019「淡路の港津と政治拠点」中世都市研究会編『港津と権力』山川出版社

《第 4 章》

- 上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁碗の分類」日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第 2 号
- 尾上 実他 1995「瓦器椀」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 埼玉県立民俗文化センター 2005『埼玉の船大工』(埼玉県民俗工芸調査報告書第 15 収)
- 重根弘和 2003「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生追憶記念事業会
- 西 弘海 1986「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 乗岡 実 2000「備前焼播鉢の編年について」中近世備前焼研究会『第 3 回中近世備前焼研究会資料』
- 長谷川眞 2007「播磨における土製煮炊具の様相」日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』21
- 福住治夫編 1985『日本の壁—鏡は生きている—』(第三版) I N A X 出版
- 森田 勉 1982「14～16 世紀の白磁の分類と編年」日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第 2 号
- 山田幸一 1981『壁』(ものと人間の文化史 45) 法政大学出版局
- 渡邊 晴 1994「近世の建築用の壁について」財團法人竹中大工道具館編『竹中大工道具館研究紀要』第 6 号
- 渡邊 晴 2004『日本建築技術史の研究—大工道具の発達史—』中央公論美術出版

付 章 宮ノ谷遺跡出土柱材の樹種同定

小林克也・黒沼保子（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

洲本市の宮ノ谷遺跡から出土した柱材4点について樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

試料の柱材4点が出土した遺構の時期は、調査所見からいざれも14世紀後半～15世紀後半と推測されている。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を探取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属と、広葉樹のクリの、2分類群が確認された。結果の一覧を第3表に示す。

第3表 樹種同定結果一覧

No.	出土遺構	層位	器種	樹種	木取り	備考	時期
1	P89 (SB01)	埋土中	柱	マツ属複維管束亜属	削れ	縞片化 一部炭化	15世紀
2	P12 (SB02)	埋土	柱	マツ属複維管束亜属	削れ	縞片化 一部炭化	15世紀
3	P71 (SB03)	—	柱	クリ	芯持丸木	—	15世紀
4	P13 (SB03)	埋土	柱	クリ	芯持丸木	芯部分空洞	15世紀

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第13図に示す。

①マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第13図 1a-1c (No. 1), 2a-2c (No. 2)

仮道管と垂直及び水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエビセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

②クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 第13図 3a-3c (No. 3), 4a-4c (No. 4)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性及び耐湿性に優れ、保存性が高い。

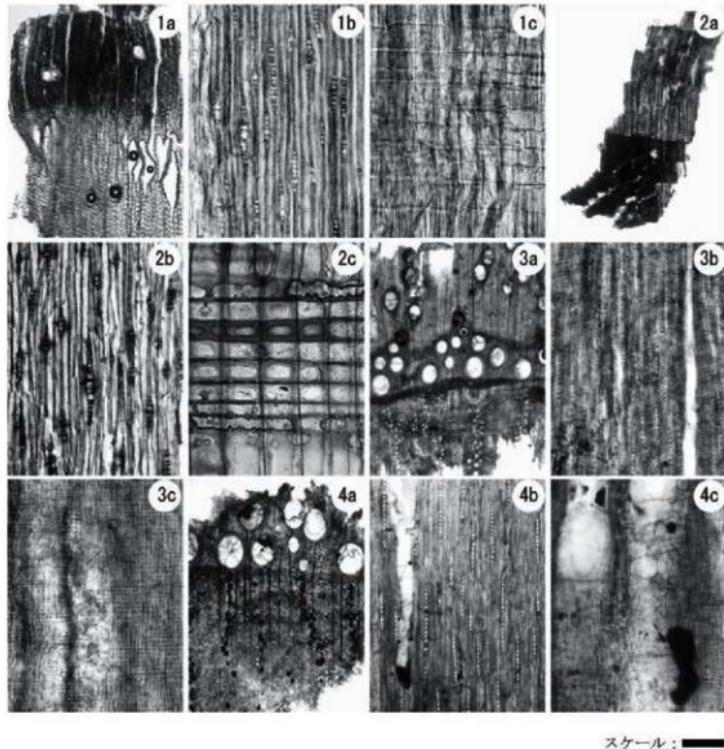
(4) 考察

柱材4点の樹種同定を行った結果、P89とP12出土の柱材はマツ属複維管束亜属、P71とP13出土の柱材はクリであった。マツ属複維管束亜属の材は、針葉樹の中では重硬な部類に属し、耐水性がある。

また、クリは重硬で耐湿性がある（平井, 1996）。どちらも柱材として有用な材である。兵庫県内で確認されている中世の柱材では、マツ属複雜管束亜属やヒノキなどの針葉樹が多く用いられており、クリの利用もみられる（伊東・山田編, 2012）。今回の分析結果は、周辺地域の木材利用傾向と類似している。

引用・参考文献

- 平井信二（1996）木の大百科、394p、朝倉書店。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。



1a-1c. マツ属複雜管束亜属 (No. 1)、2a-2c. マツ属複雜管束亜属 (No. 2)、3a-3c. クリ (No. 3)、4a-4c. クリ (No. 4)
a : 横断面 (スケール=500 μm)、b : 接觸断面 (スケール=200 μm)、c : 経時断面 (スケール=1, 2 : 50 μm , 3, 4 : 200 μm)

第 13 図 宮ノ谷遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真

第4表 遺物観察表（土器・陶磁器類1）

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			現存	地成	色調	紹土
				口径	高さ	底径				
1 SB01B SK05	土師器	壺	(12.1) (2.55)	—	口縁部1/10 底部若干	普通	黄褐色～褐灰	石英・雲母など1mm大以下の砂粒含む		
2 SB01B SK18	土師器	壺	—	(2.0)	—	口縁部 破片のみ	やや不良	灰白	石英・雲母など0.5mm以下の細粒砂含む	
3 SB01B SK12	土師器	壺	(8.5) (1.4)	(4.8)	口縁部1/8 底部若干	やや不良	淡黄褐色	0.2~0.5mm大の細粒砂含む		
4 SB01B SK12	土師器	壺	(底部)	—	(1.45)	(7.3)	底部1/5	普通	にぶい緑	石英など1mm大以下の砂粒含む
5 SB01B P22	土師器	三足器(脚窪)	長さ(5.5)	幅(1.5)	厚さ(1.7)	脚窪上部のみ	普通	褐色～灰	石英など1mm大以下の砂粒含む	
6 SB02 P12	土師器	壺	(8.2) (1.65)	—	口縁部 破片のみ	普通	にぶい黄褐色	石英・雲母など1mm大以下の砂粒含む		
7 SB02 P12	土師器	壺	(底部)	—	(1.25)	7.65	底部充存	普通	にぶい黄褐色～ 灰黃褐色	金雲母含む 6mm大以下の砂粒含む
8 SB02 P12	焼成陶器	壺	(23.7) (14.7)	(31.4)	口縁部若干 体部上半1/4	良	黒褐色	0.5mm大以下の砂粒含む		
9 SB02 P58	土師器	鍋	(20.6) (7.6)	腰径(25.3)	口縁部1/8 体部上部のみ	良	にぶい緑～ 黒褐色	雲母含む 3mm大以下の砂粒含む		
10 SB03 P13	土師器	壺	(13.9) (2.7)	(8.1)	口縁部若干 底部1/4	やや不良	灰白	砂粒少含む		
11 SB03 P13	土師器	鍋	(21.4) (6.0)	腰径(25.4)	口縁部若干 体部上部	やや不良	淡黄褐色	砂粒多く含む		
12 SB03 P75	白磁	碗	(14.8) (5.15)	—	口縁部1/8	良	灰白	密		
13 SB03 P15	青磁	碗	—	(3.5)	体部小片	良	オリーブ灰	密		
14 SB04 P17	土師器	壺	(11.4) (2.35)	—	口縁部1/7	やや不良	灰白	砂粒多く含む		
15 P78	土師器	壺	(9.9) (1.7)	—	口縁部1/4	やや不良	淡黄褐色	砂粒多く含む		
16 P14	土師器	壺	(底部)	—	(0.8) (6.7)	底部1/4	やや不良	黒灰	1mm以下の砂粒多く含む	
17 P06	土師器	鍋	(20.5) (5.45)	—	口縁部2/5 体部上部のみ	良	褐色	石英・雲母など1mm大以下の砂粒含む		
18 SK15	土師器	壺	(10.9) (1.95)	—	口縁部1/10	普通	にぶい黄褐色	1mm大以下の砂粒含む		
19 SD01	土師器	壺	(13.6) (2.75)	—	口縁部1/10 底部1/8	不良	にぶい緑～褐色	石英・雲母など1mm大以下の砂粒含む		
20 SD01	土師器	壺	(底部)	—	(1.35)	口縁部 破片のみ	普通	にぶい緑	石英など1mm大以下の砂粒含む	
21 SD01	土師器	壺	(底部)	—	(1.05)	(7.5)	底部1/4	やや不良	にぶい黄褐色～ 灰黃褐色	石英・雲母など0.5mm以下の細粒砂含む
22 SD01	土師器	鍋	(24.8) (6.55)	腰径(27.5)	口縁部2/2	普通	褐灰～黒褐色	2mm大以下の砂粒含む		
23 SD04	土師器	壺	(12.2) (2.55)	—	口縁部1/8	普通	淡黄褐色～灰褐色	0.2~0.3mm大の細粒砂含む		
24 SD04	土師器	壺	(11.2) (1.9)	(7.5)	口縁部1/16 底部1/8	普通	淡黄褐色	雲母含む		
25 SD04	土師器	壺	—	(1.5)	口縁部 破片のみ	普通	褐色	1mm大以下の砂粒含む		
26 SD04	青磁	碗	(14.1) (5.25)	—	口縁部1/3	良	灰オリーブ	密		
27 SX01	瓦器	碗	(11.7) (2.45)	—	口縁部1/16	やや不良	灰～灰白	0.3mm大以下の細粒砂含む		
28 SX01	土師器	壺	(11.8) (2.0)	—	口縁部1/14	普通	にぶい緑	雲母など0.5mm大以下の細粒砂含む		
29 SX01	土師器	壺	(7.6) (1.55)	(4.0)	口縁部1/14 底部1/8	普通	にぶい緑	0.5mm大以下の砂粒含む		
30 SX01	土師器	壺	(底部)	—	(0.95) (5.9)	底部1/2	淡黄褐色	1mm大以下の砂粒含む		
31 SX01	土師器	杯	(13.9) (1.4)	—	口縁部若干	やや不良	灰白	石英など1mm大以下の砂粒含む		
32 包含層(炭化物・堆土層直上)	土師器	壺	(11.7) (2.35)	(6.5)	口縁部1/6 底部1/5	普通	にぶい黄褐色	石英など1.5mm大以下の砂粒含む		
33 包含層(炭化物・堆土層直上)	土師器	鍋	(21.6) (6.7)	腰径(22.9)	口縁部1/8	—	にぶい緑～褐色	石英など1mm大以下の砂粒含む		
34 包含層(炭化物・堆土層直上)	土師器	鍋	(20.6) (8.0)	腰径(22.2)	口縁部1/4 体部上半1/4	やや不良	にぶい緑～ にぶい褐色	石英・雲母・赤褐色など含む		
35 包含層(炭化物・堆土層)	土師器	壺	(7.4) (0.75)	(5.8)	口縁部1/6 底部1/6	普通	にぶい緑～ 黒灰	0.2mm程度の細粒砂含む		

報告番号	調査	備考		図版番号	写真 図版
		時期・分類等	出土場所		
1	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ 底部 不明	回転台使用？	南北トレンチ南	14	13
2	内面：調整不明 ヨコナダ？ 外面部：調整不明 ヨコナダ？	手捏ね	南北トレンチ間	14	13
3	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ 底部 不明	手捏ね	南北トレンチ間	14	13
4	内面：調整不明 外面部：体部 ヨコナダ 底部 批状工具によるナダ	回転台使用？	南北トレンチ間	14	13
5	内面：ユビオサエ・ユビナダ・ハケメ 外面部：ナダ	足羽垂？ 13世紀～14世紀	北側トレンチと 南北トレンチの間	14	16
6	内面：調整不明 外面部：調整不明	手捏ね		14	14
7	内面：調整不明 外面部：体部 ヨコナダ 底部 板ナダ・ハケメ	在地層 回転台使用		14	14
8	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：口縁部 ヨコナダ 刃部 織機引き波状文・沈縞文	佛焰苞 15世紀後半	S001付近の化粧土・施土層 出土破片と接合	14	図6 図7
9	内面：体部 ヨコナダ工具によるナダツク 口縁部 ヨコナダ 外面部：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキ 摺より下轍付着	羽茎タイプ播磨型 15世紀後半		14	14
10	内面：体部～口縁部 ロクロナダ 見込み ナダ 外面部：体部～口縁部 ロクロナダ 底部 回転糸切り	回転台付刀鋸器 14世紀後半～15世紀？		14	15
11	内面：口縁部 ヨコナダ 体部 フラスク工具によるナダツク 外面部：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキ	羽茎タイプ播磨型 15世紀後半		14	15
12	内面：体部～口縁部 施釉 体部に施釉あり 外面部：口縁部 施釉 断面に堆積着	板有施釉？ 14世紀後半～15世紀		14	15
13	内面：体部 施釉 外面部：体部 施釉 運び文	織形蓮華文（龍泉窯系） 15世紀後半		14	15
14	内面：体部～口縁部 ナダ 外面部：体部～口縁部 ナダ	手捏ね		14	16
15	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ	手捏ね		14	16
16	内面：底部 ナダ 外面部：底部 ナダ 底部 糸切りor板ナダ	回転台使用？		14	16
17	内面：体部～口縁部 回転糸コロナダ 外面部：口縁部 回転糸コロナダ 体部 平行タタキ 一部煤付着	羽茎タイプ播磨型 15世紀前半		14	16
18	内面：調整不明 外面部：調整不明	手捏ね		14	16
19	内面：調整不明 外面部：調整不明	回転台使用？	中央付近	14	17
20	内面：口縁部 ヨコナダ 外面部：口縁部 ヨコナダ	手捏ね	S001・04分歧アゼ	14	17
21	内面：調整不明 外面部：調整不明	成形法不明	中央付近	14	17
22	内面：口縁部 ヨコナダ 体部 工具によるヨコナダ 外面部：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキ 口縁端部と摺より下轍付着	羽茎タイプ播磨型 15世紀後半	中央付近	14	17
23	内面：調整不明 外面部：調整不明	回転台使用？	南北トレンチ間	14	18
24	内面：体部～口縁部 ロクロナダ 外面部：体部～口縁部 ロクロナダ 底部 回転糸切り	回転台使用	南北トレンチ間	14	18
25	内面：調整不明 外面部：調整不明	手捏ね		14	18
26	内面：体部～口縁部 施釉 沈継あり 外面部：体部～口縁部 施釉 蓼葉文	広形蓮華文（龍泉窯系） 15世紀後半		14	18
27	内面：調整不明 外面部：ナダ？	和泉型B-4 14世紀前半		15	19
28	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ	手捏ね		15	19
29	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ 底部 回転糸切り	回転台使用		15	19
30	内面：底部 回転ナダ 二方向の仕上げナダ 外面部：体部 回転ナダ 底部 回転糸切り	回転台使用		15	19
31	内面：底部～口縁部 ロクロナダ 外面部：体部～口縁部 ロクロナダ 天井部 回転ヘラカゼリまたはヘラケズリ	8世紀後半？		15	19
32	内面：底部～口縁部 ロクロナダ 外面部：体部～口縁部 ロクロナダ 底部 回転糸切り	回転台使用		15	20
33	内面：口縁部 ヨコナダ 体部 ハケメ 外面部：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキ	羽茎タイプ播磨型 15世紀前半	調査区中央西端 S005出土不接同一個体あり	15	20
34	内面：口縁部 ヨコナダ 体部 糸ナダ 外面部：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキのちユビオサエ・ユビナダ	羽茎タイプ播磨型 15世紀後半		15	20
35	内面：底部～口縁部 ヨコナダ 外面部：体部～口縁部 ヨコナダ 底部 ヘラカゼリ？	手捏ね 中央前半		15	21

第5表 遺物観察表（土器・陶磁器類2）

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			現存	地成	色調	紹土
				口径	高さ	底径				
36	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	壺	(12.9)	(1.5)	—	口縁部1/8	普通	淡黄褐色～灰白	0.5mm以下の砂粒少含む
37	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	壺 （底部）	—	(0.8)	(5.5)	底部3/4	不良	灰白	石英など2mm以下砂粒多く含む
38	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	壺	(10.9)	(2.0)	—	口縁部1/7	普通	淡黄褐色	1mm以下砂粒含む
39	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	壺	(12.4)	(2.2)	—	口縁部1/12	不良	淡黄褐色	1mm以下砂粒少量含む
40	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	壺	(12.5)	(1.8)	—	口縁部若干	不良	にぶい黄褐色～ 褐色	1mm以下砂粒中量含む
41	包含層 （炭化物・焼土層）	土師器	鍋	(18.8)	(7.05)	底径 (21.6)	口縁部1/12	普通	褐色	石英・雲母など3mm以下砂粒含む
42	包含層 （炭化物・焼土層）	焼締 陶器	擂鉢	(31.8)	(6.6)	—	口縁部1/16	良	にぶい褐色～ にぶい青褐色	2mm以上砂粒含む
43	包含層 （炭化物・焼土層）	焼締 陶器	甌	—	(4.95)	—	口縁部のみ	普通	灰～灰白	6mm以上砂粒含む
44	包含層 （炭化物・焼土層）	青磁	碗	(14.4)	(8.0)	(5.5)	口縁部若干 底溝1/4周	良	オリーブ灰	密
45	包含層 （炭化物・焼土層）	青磁	碗	(14.4)	(1.85)	—	口縁部1/8	良	灰	密
46	包含層 （その他）	土師器	壺	(11.3)	2.3	(6.0)	口縁部1/4 底溝1/4	不良	淡黄褐色～ 褐色	1mm以下砂粒多く含む
47	包含層 （その他）	土師器	壺	(11.7)	(2.1)	—	口縁部1/8	不良	灰白	1mm以下砂粒多く含む
48	包含層 （その他）	土師器	壺 （底部）	—	(1.05)	(7.8)	底部1/3	やや不良	にぶい黄褐色	1mm以下砂粒少含む
49	包含層 （その他）	土師器	壺 （底部）	—	(1.0)	(8.0)	底部1/4	やや不良	にぶい黄褐色	1mm以下砂粒少含む
50	包含層 （その他）	青磁	碗	(14.2)	(2.9)	—	口縁部1/8	良	明緑灰～ 褐色	密
51	包含層 （その他）	青磁	碗	(13.9)	(3.4)	—	口縁部若干	良	オリーブ灰	密
52	包含層 （その他）	青磁	碗	(15.0)	(3.85)	—	口縁部若干	良	オリーブ灰	密
53	包含層 （その他）	弥生 土器	壺	—	(1.8)	—	口縁部若干	やや不良	褐色	砂粒少含む
54	包含層 （その他）	施釉 陶器	壺	(20.8)	(3.2)	—	口縁部若干	普通	黒褐～灰白	密

第6表 遺物観察表（金属製品）

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			備考	出土場所	図版番号	写真 図版
				長さ	幅	厚み				
M1	SB03 P13	鉄製品	釘?	(3.75)	(0.7)	(3.6)	角釘?			16 23
M2	SB03 P15	鉄製品	板状 製品	4.0	3.4	0.4		北側トレンチの北	16	23
M3-1	SK14	鉄製品	鑿	18.4	2.8	3.0	櫛・茎・口金部分 茎部分に有機物付着 中央部厚み1.1cm、先端部厚み0.85cm	南北トレンチ間	16	図6- 23・24
M3-2	SK14	鉄製品	鑿	3.1	3.1	1.3	冠部分	南北トレンチ間	16	図6- 23・24
M4	包含層	鉄製品	刀子	(7.4)	0.65	1.5		調査区西側法面 精査中	16	23
M5	包含層 （炭化物・焼土層）	鉄製品	釘	(7.4)	1.8	1.45	平折釘	SB01南側炭化物・焼土層	16	23
M6	包含層	鉄製品	釘	(6.6)	0.65	0.75	捲巻釘	確認調査トレンチNo.8西端 溝清掃時	16	23
M7	包含層	鉄製品	釘	(2.5)	0.35	0.45	捲巻釘	調査区南端部 面精査中	16	23
M8	包含層	鋼製品	鋼鉄	2.4	2.4	0.1	「洪武通寶」 刻年1368年	確認調査トレンチNo.8-2	16	23
M9	包含層 （炭化物・焼土層）	鋼製品	鋼鉄	2.4	2.4	0.1	「熙寧元宝」 刻年1068年	SB01北側近接	16	23

報告番号	調査	備考		図版番号	写真 図版
		時期・分類等	出土場所		
36	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 コヨナダ、ユビナダ	手捏ね	北側トレンチの南側付近	15	21
37	内面：底部～体部 ロクロナダ 外面：体部 ロクロナダ 底部 板状工具によるナダ ベタ高台	回転台使用	SD01の南隣付近	15	21
38	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：口縁部 ヨコナダ	手捏ね？	北側トレンチより北	15	21
39	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 ヨコナダ	手捏ね？	北側トレンチの南側付近	15	21
40	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 ヨコナダ	手捏ね？	北側トレンチの北側付近	15	21
41	内面：口縁部 ヨコナダ 体部 細ナダ 外面：口縁部 ヨコナダ 体部 平行タタキのちユビオサエ	羽釜タイプ播磨型 15世紀後半	北側トレンチと 南側トレンチの間	15	21
42	内面：体部～口縁部 ヨコナダのちヨコナダ 6条1単位の播目あり 外面：体部～口縁部 ヨコナダのちユビナダ	備前焼 15世紀後半	北側トレンチと 南側トレンチの間	15	21
43	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 ヨコナダ	備前焼 14世紀後半～15世紀前半	北側トレンチより北	15	21
44	内面：底部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 施釉・見込みに押花あり	細形蓮弁文 15世紀後半	北側トレンチの南側付近	15	21
45	内面：口縁部 施釉 外面：口縁部 施釉	15世紀前半	北側トレンチと 南側トレンチの間	15	21
46	内面：底部～口縁部 ロクロナダ 外面：体部～口縁部 ロクロナダ 底部 板状工具によるナダ	回転台使用	確認調査トレンチNo.8-2	15	16
47	内面：体部～口縁部 ヨコナダ 外面：体部～口縁部 ヨコナダ	手捏ね？	南西端落ち込み上層	15	22
48	内面：底部 ロクロナダ 外面：体部 ロクロナダ 底部 板状工具によるナダ	回転台使用	調査区北側西側法面 成形中	15	22
49	内面：底部～口縁部 ロクロナダ 外面：体部 ロクロナダ 底部 板状工具によるナダ	回転台使用	調査区北側西側法面 成形中	15	22
50	内面：体部～口縁部 施釉 外面：体部～口縁部 施釉 口縁直下に雷文帯 体部 雷文帯	雷文帯（龍泉窯系） 15世紀前半	SD04南西端近接 壁？	15	22
51	内面：体部～口縁部 施釉 外面：体部～口縁部 施釉 口縁直下に雷文帯	雷文帯（龍泉窯系） 15世紀前半	南側トレンチ	15	22
52	内面：体部～口縁部 施釉 外面：体部～口縁部 施釉 口縁直下に雷文帯	雷文帯（龍泉窯系） 15世紀前半	南側トレンチ	15	22
53	内面：口縁部 ナダ 外面：口縁部 ナダ、ユビオサエ	後期？	調査区南壁断面精査中	15	22
54	内面：体部～口縁部 白化粧土の刷毛目・施釉 外面：体部～口縁部 白化粧土の刷毛目・施釉 体部下部 罫格	唐津焼 18世紀前半	調査区南壁断面精査中	15	22

第7表 掘戻壁土一覧

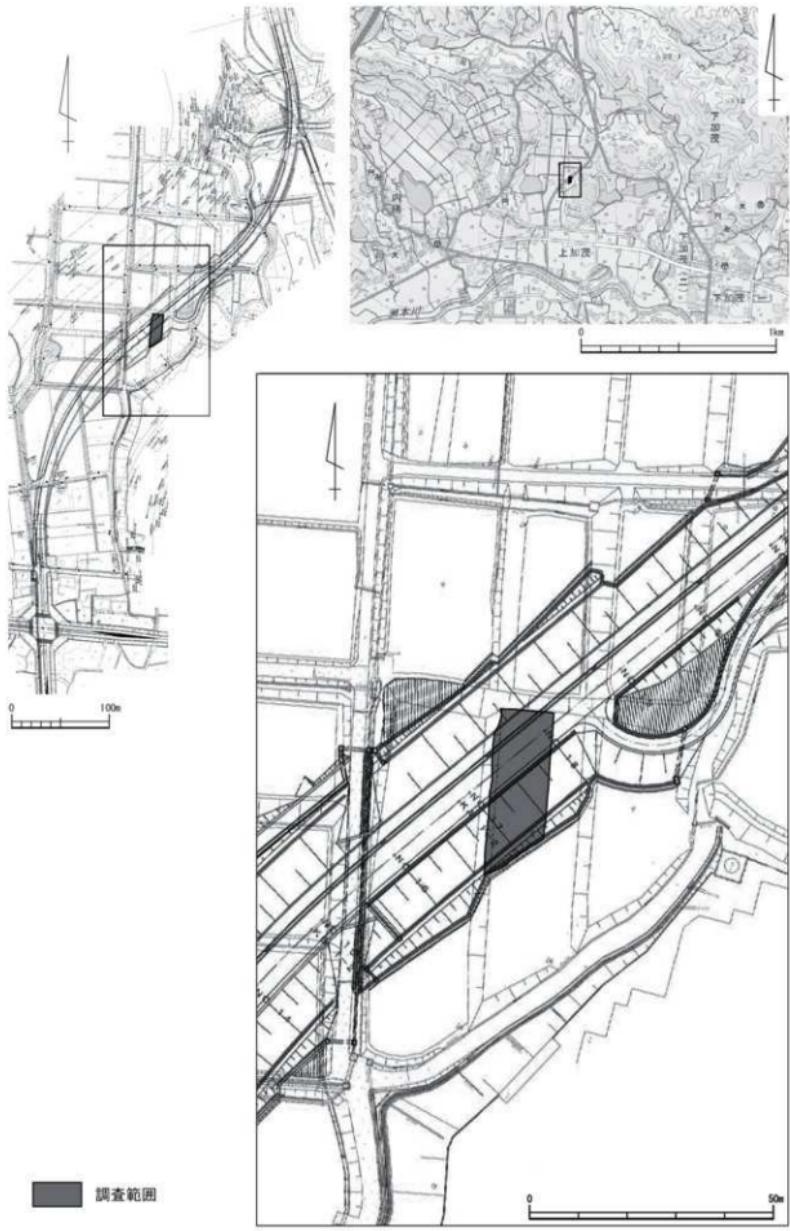
報告番号	出土遺物	分類	重量 (g)	備考 (出土場所)	写真 図版
E1	包含層（炭化物・焼土層）	I a	99.8	北側トレンチ	図6 ・25
E2	包含層（炭化物・焼土層）	I a	51.2	SD01より南側 南北トレンチ間	図6 ・25
E3	SD04	I a	62.3	南北トレンチ間	図6 ・25
E4	包含層（炭化物・焼土層直上）	I b	44.3	北側トレンチ以北	図6 ・25
E5	包含層（炭化物・焼土層）	I b	41	南北トレンチ間の東側	図6 ・25
E6	包含層（炭化物・焼土層直上）	I c	50.7	南北トレンチ間	図6 ・25
E7	機械削削中	II	46.3	南側トレンチ	図6 ・25
E8	人力削削中	III	35.7	南側トレンチ	図6 ・26
E9	包含層（炭化物・焼土層）	IV	29	北側トレンチの南側付近	図6 ・26
E10	SD01B SK12	IV	29	南北トレンチ間	図6 ・26
E11	SD01	I b	144.8	中央付近	図6 ・26
E12	面積変中	I b	58.1	北側トレンチ以北	図6 ・26

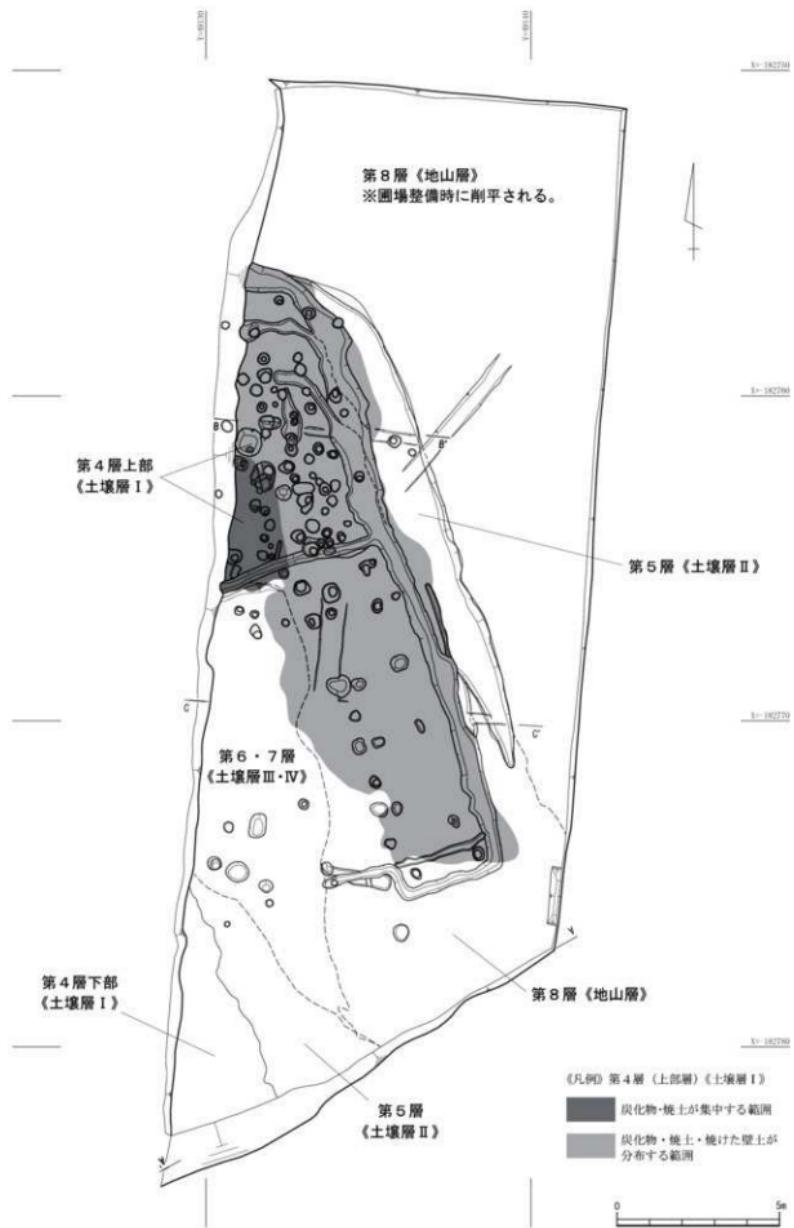
報 告 書 抄 錄

図 版

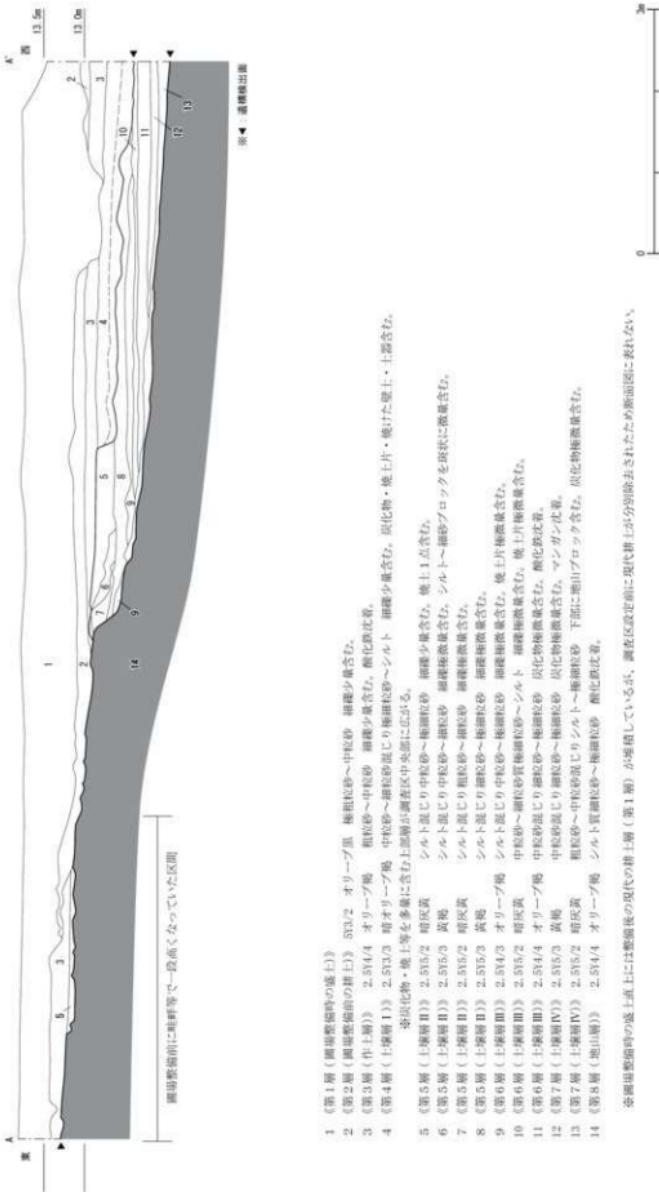
■

写真図版



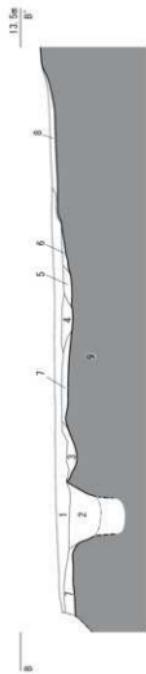


調査区土層堆積範囲図



土壤層 I・IIが剥離より一段高くなっていた可能性がある区域

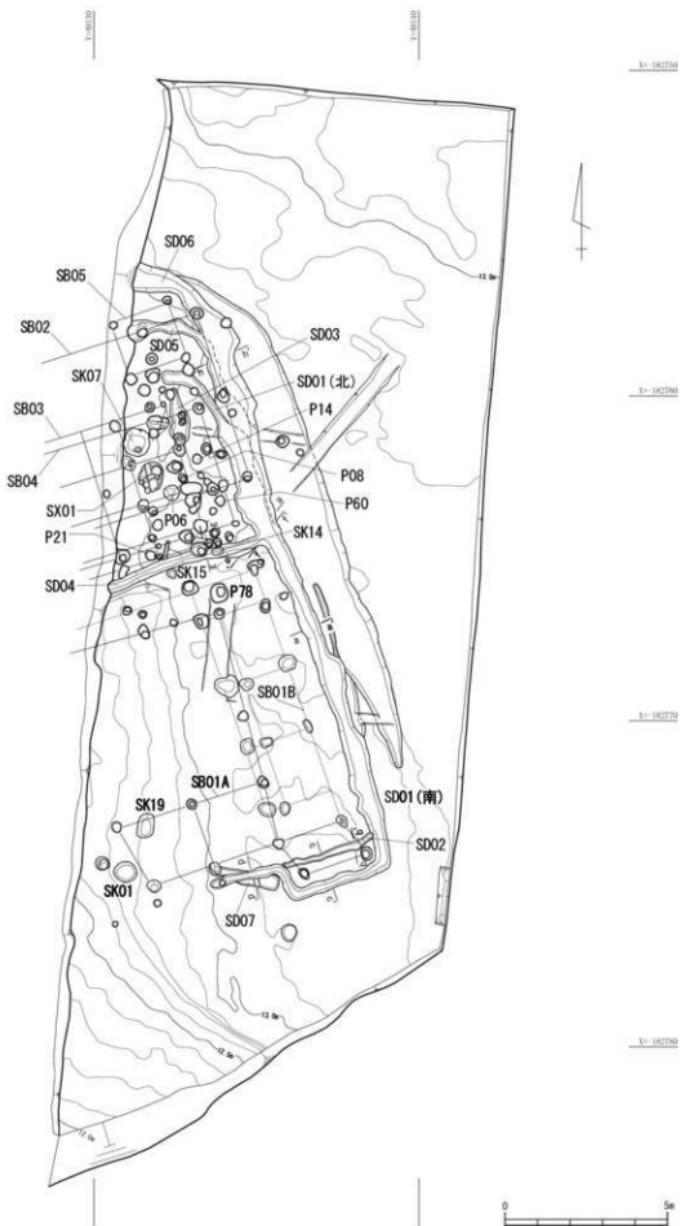
北側トレンチ断面



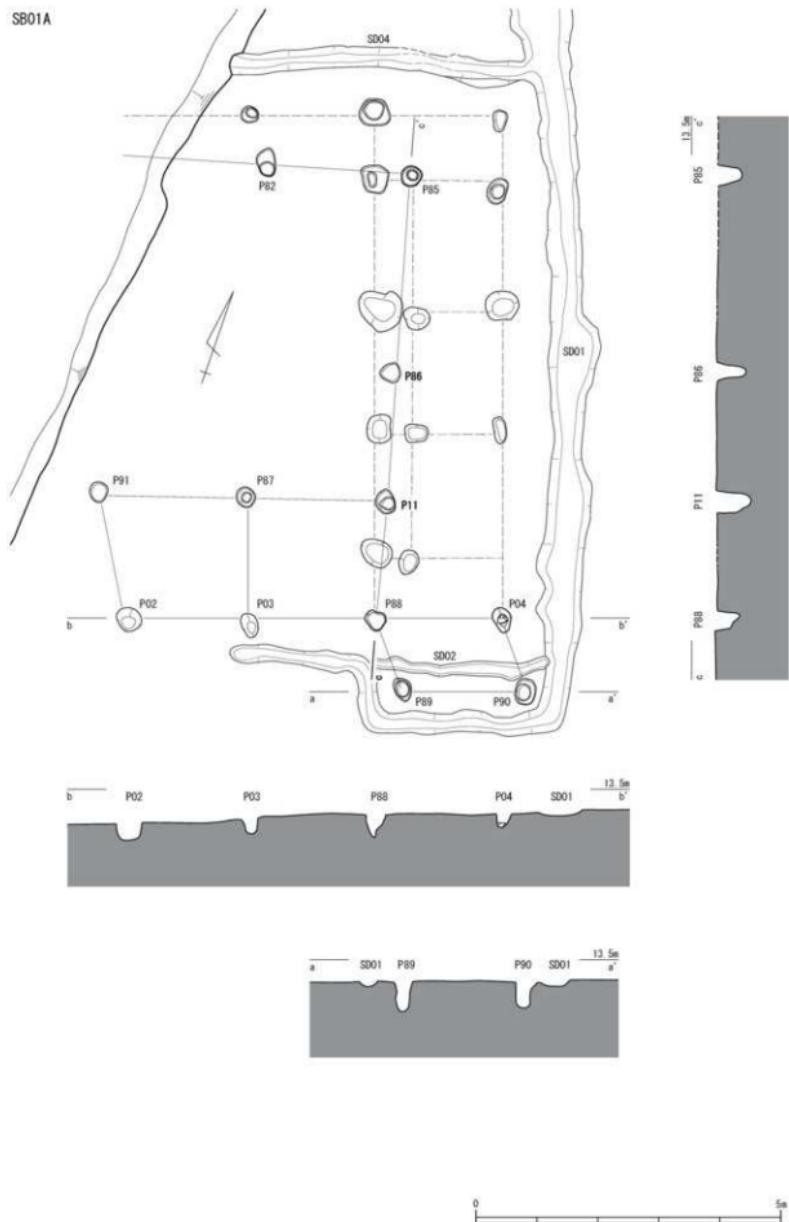
南側トレンチ断面



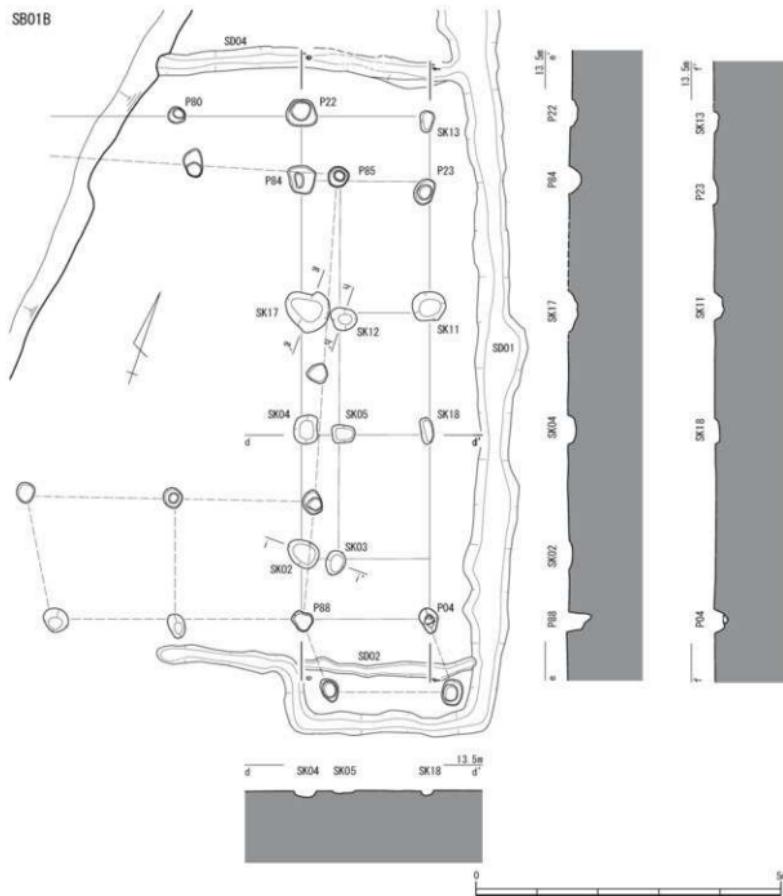
炭化物・焼土堆積土層断面図



調査区平面図



造構平面図・断面図 (SB01A)



SK17

1 5Y4/2 灰オリーブ 中粒砂・細粒砂
種種粒状・細縫（ δ 1 ~ 2mm）地山にブロック状の。燒土・灰化物含む。(理土)
2 5Y5/4 黄褐 シルト混じり細粒砂～極細粒砂
種種粒状・細縫（ δ 1 ~ 2mm）少々鐵質あり。(理土)
3 2 Y5/4.1 オリーブ系 シルト混じり細粒砂～細粒砂
穿孔あり。(理土)

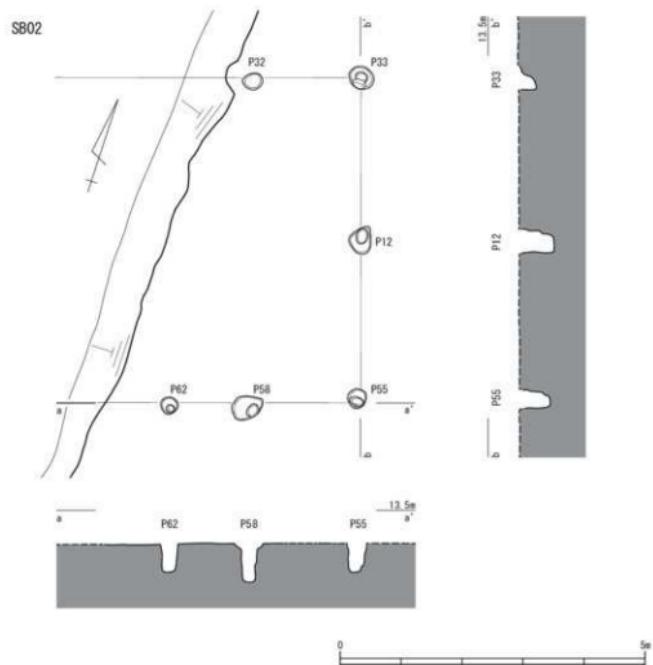
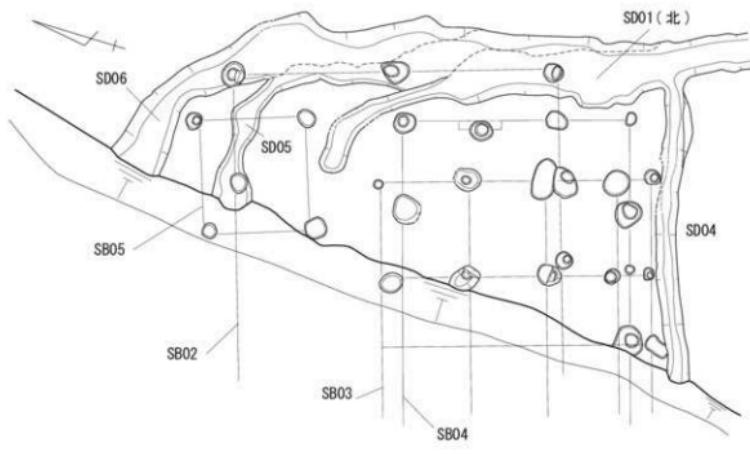
SK02 • 03

1 5H/2 灰オリーブ 中粒砂～細粒砂
極粗粒砂～細礫 ($\phi 1 \sim 2\text{ mm}$) 混じる。
焼土・炭化物・如壁片少量含む。(焼土・炭化物層)
2 5H/3 灰オリーブ 細粒砂～シルト 鉄鉱あり。(地山)

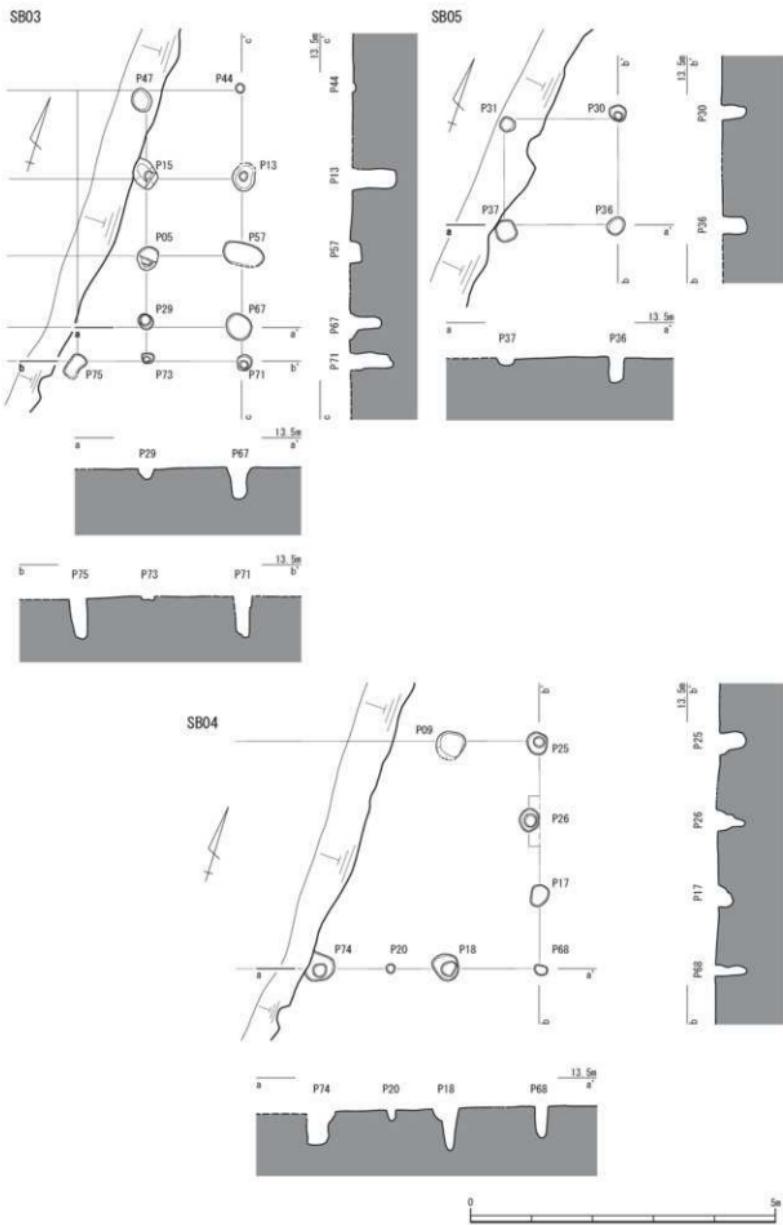
SK12

h	—	13 mm
2	2	
1	7.5mm/4	褐色
2	2.5mm/2	淡黃褐色
3	2.5mm/4	黃褐色
4	2.5mm/3	黃褐色
4	2.5mm/3	黃褐色

遺構平面図・断面図 (SB01B)

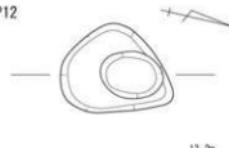


遺構平面図 (SB02 ~ 05)、遺構平面図・断面図 (SB02)

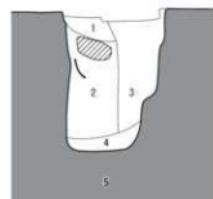


遺構平面図・断面図 (SB03・04・05)

SB02 P12

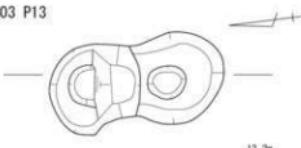


13.2m

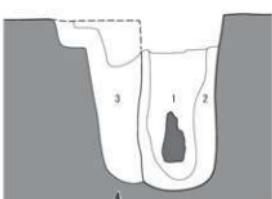


- 1 SY5/2 灰オリーブ 極細粒砂～粗粒砂 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 少量混じり粗粒砂～中粒砂 地山ブロック ($\phi 5$ mm) 含む。 (P12 埋土)
- 2 SY5/2 灰オリーブ シルト質極細粒砂～極細粒砂ブロック ($\phi 2 \sim 4$ cm) と 地山ブロック ($\phi 2 \sim 4$ cm) が混ざる。 硬化物・炭化物・土器・焼土を多量に含む。 ゆるい。 (P12 埋土)
- 3 SY5/3 灰オリーブ 極細粒砂～シルトブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm) と 地山ブロック ($\phi 2 \sim 3$ cm) が混ざる。 硬化物微量含む。 (P12 埋土)
- 4 SY5/3 灰オリーブ 極細粒砂混じりシルト ゆるい。 (P12 埋土)
- 5 SY5/3 灰オリーブ シルト～極細粒砂 (上方粗粒化) 最下方 極粗粒砂混じり粗粒砂～シルト (地山)

SB03 P13

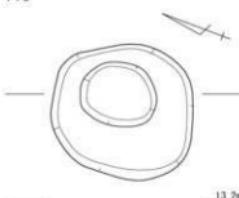


13.2m



- 1 2.SY5/2. 暗灰 黒シルト 上手に地山ブロック含む。 下手に柱材基部が残る。 (P13 柱根部埋土)
- 2 2.SY6/2. 灰黒 極細粒砂～極細粒砂 (P13 極方埋土)
- 3 別のピット埋土
- 4 2.SY7/2. 灰黒 細粒砂～極細粒砂 平行ラミナあり。 部分的にブロック状に変形する。(地山)

P78



13.2m



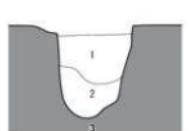
- 1 SY3/1 オリーブ墨 極細粒砂～極細粒砂ブロックと SY7/2 灰白 極細粒砂のブロックが マーブル状に混ざる。 焼土・炭化物を多量に含む。 (P78 埋土、第4層上部 (土壌層1) 及び)

- 2 SY5/3 灰オリーブ シルト混じり極細粒砂～極細粒砂 地山ブロックを含む。 土器含む。 (P78 埋土)
- 3 SY6/2 灰オリーブ 極細粒砂～極細粒砂 (地山)

P14



13.2m

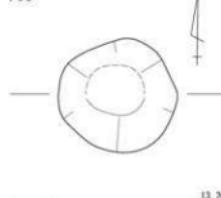


- 1 2.SY5/2. 暗灰 黒シルト 質極細粒砂 地山ブロック含む。 硬化物・焼土少量含む。 (P14 埋土)
- 2 2.SY6/2. 灰黄 極細粒砂 (P14 埋土)
- 3 2.SY6/3. にぶい黄 極細粒砂～極細粒砂 地山ブロック含む。 (P14 埋土)

3 2.SY7/2. 灰黄 極細粒砂 (P06 埋土)

4 2.SY7/2. 灰黄 極細粒砂～極細粒砂 平行ラミナあり。 部分的にブロック状に変形する。(地山)

P06



13.2m



1 2.SY5/1. 黄灰 シルト質極細粒砂～極細粒砂

粗粒砂・10 cm 大礫・地山ブロック含む。

下半部に炭化物多く含む。 (P06 埋土)

2 2.SY5/2. 暗灰 黒シルト質極細粒砂

地山ブロック含む。 (P06 埋土)

3 2.SY6/3. にぶい黄 極細粒砂～極細粒砂

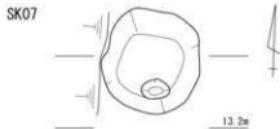
地山ブロック含む。 (P06 埋土)

4 2.SY7/2. 灰黄 極細粒砂～極細粒砂 (P06 埋土)

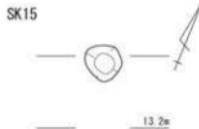
5 2.SY7/2. 灰黄 極細粒砂～極細粒砂 平行ラミナあり。 部分的にブロック状に変形する。(地山)

0 1m

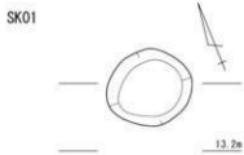
遺構平面図・断面図（柱穴）



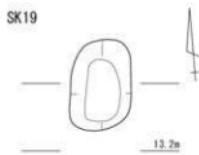
- 1 2.SY5/3 黄褐 中粒砂～細粒砂の地山ブロック（φ1～5cm）を多量に含む。（埋土）
 2 2.SY6/2 灰黄 細粒砂～中粒砂
 3 2.SY5/3 黄褐 地山ブロック（φ3～5cm）少量含む。（埋土）
 3 2.SY6/2 灰黄 細粒砂～細粒砂（地山）



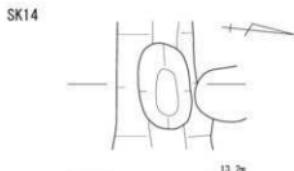
- 1 SY4/2 灰オリーブ 中粒砂～細粒砂ブロック（φ5mm大）と細粒砂ブロック（φ5mm）が混ざる。
 2 SY7/3 淡黄 細粒砂含む。炭化物・鐵土含む。（埋土）
 2 5Y6/4 オリーブ黄 細粒砂～細粒砂（理土）
 3 SY5/2 灰オリーブ 細粒砂～中粒砂 鉄鉱あり。（地山）



- 1 2.SY5/2 暗灰黄 極粗粒砂混じり細粒砂～極粗粒砂（理土）
 2 2.SY5/3 黄褐 極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂（基盤層（土壤層Ⅱ対応））



- 1 2.SY4/4 オリーブ褐 極粗粒砂少量混じり中粒砂～細粒砂
 2 SY4/4 オリーブ褐 炭化物極微量含む。マンガン斑化着。（理土）
 2 2.SY4/4 オリーブ褐 極粗粒砂微微量混じり細粒砂～極細粒砂質シルト鉄鉱あり。（理土）
 3 2.SY4/6 オリーブ褐 極粗粒砂多量混じり細粒砂～シルト上方では極粗粒砂少くなる。（地山）



- 1 2.SY6/2 灰黄 中粒砂～粗粒砂混じりシリル～極粗粒砂 金属製品 (BD-2) 含む。（埋土）
 2 2.SY6/4 にぶい黄 中粒砂～シルト（理土）
 3 7.SY6/2 灰オリーブ 細粒砂～細粒砂 鉄鉱あり。（地山）

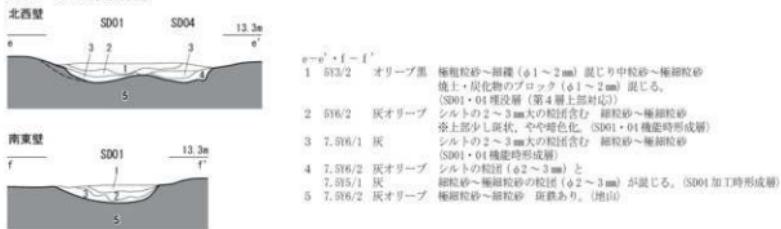


遺構平面図・断面図（土坑）

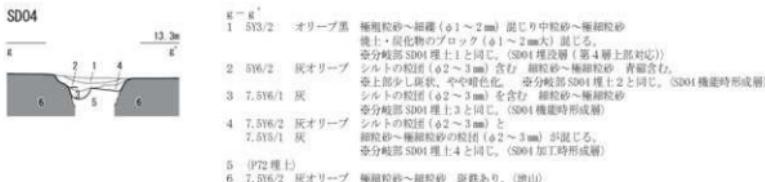
SD05・SD06



SD01・SD04 分岐部分



SD04



SD01 中央部



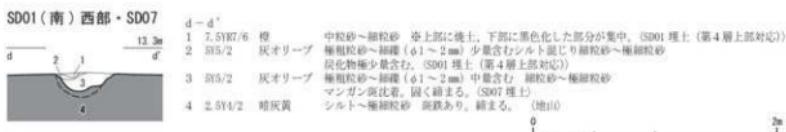
SD02 東部



SD02 西部

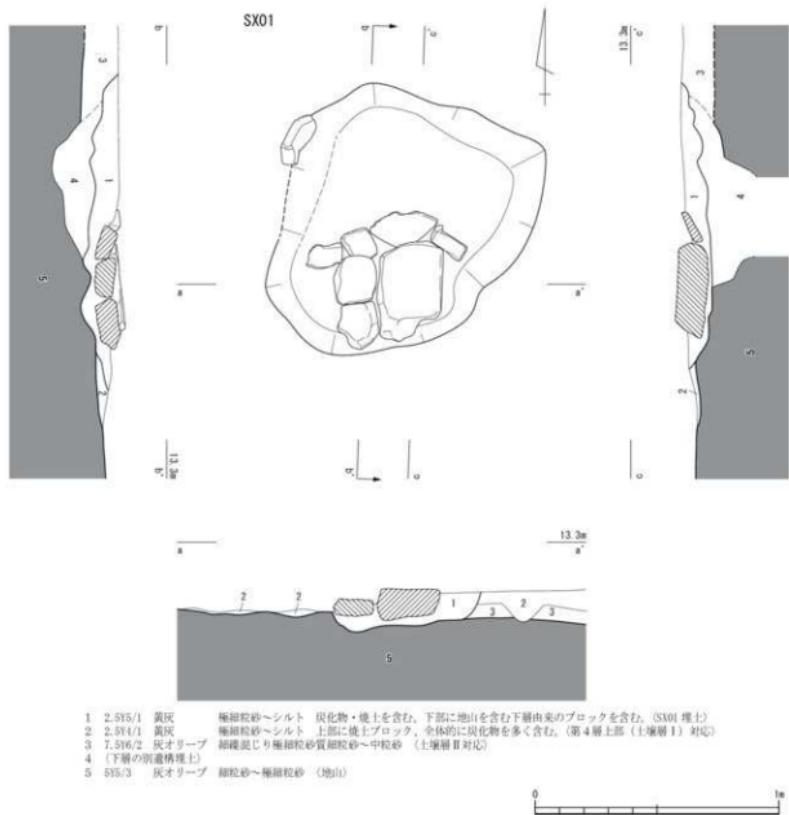


SD01(南) 西部・SD07

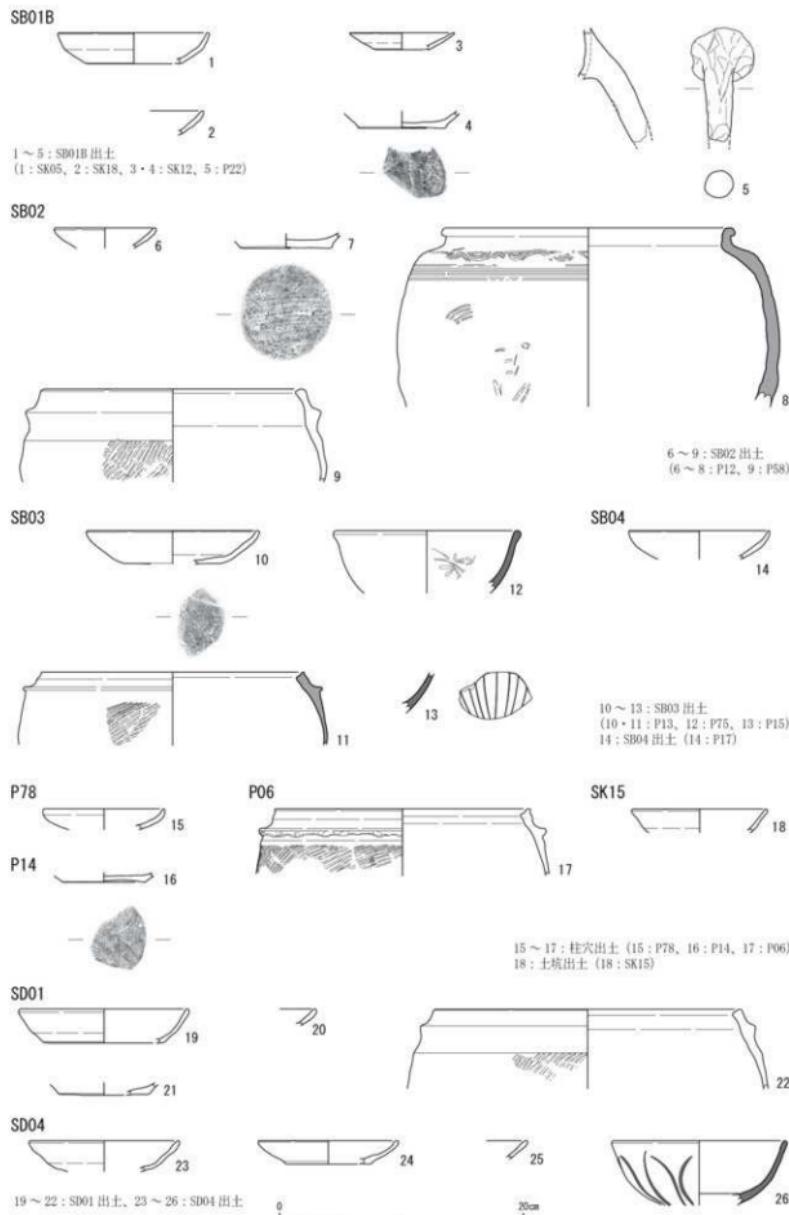


0 2m

遺構断面図（溝）

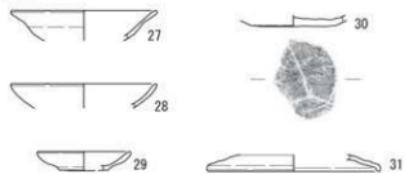


遺構平面図・断面図(石組み遺構)

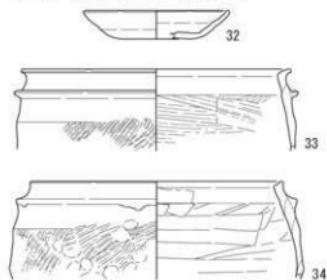


出土遺物 1

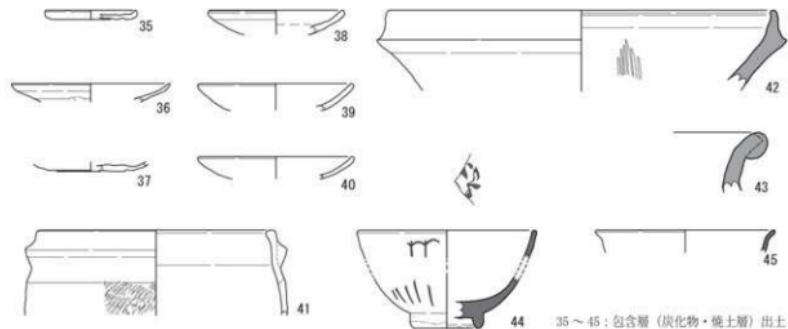
SX01



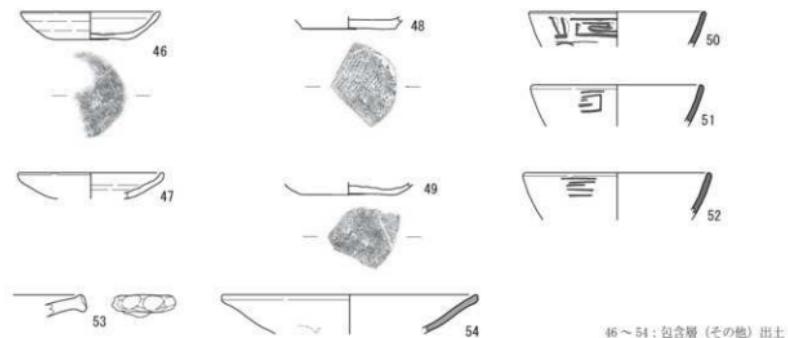
包含層（炭化物・焼土層上）

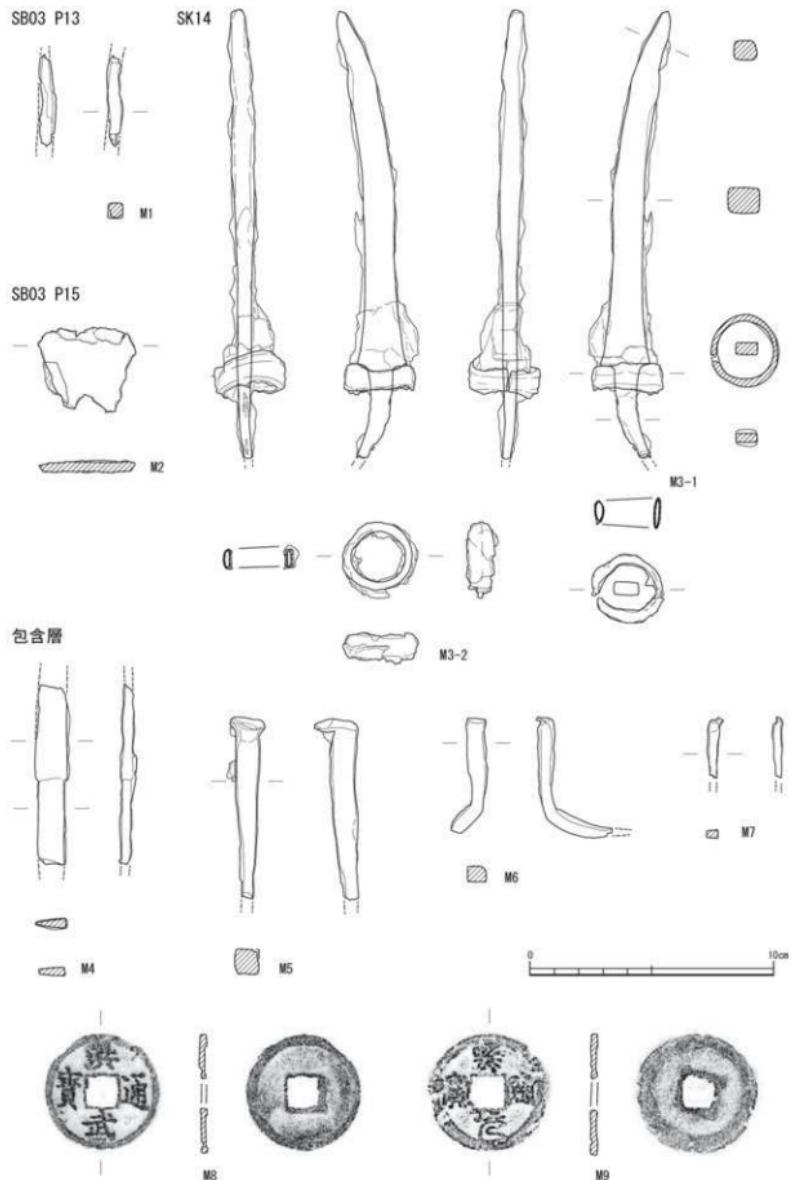


包含層（炭化物・焼土層）



包含層（その他）





M1 : P13 出土。M2 : P15 出土。M3-1・2 : SK14 出土。M4 ~ 9 : 包含層出土。



調査区全景（南西から）



調査区全景（北から）

写真図版 2



遺構集中部（南から）



遺構集中部（北西から）



遺構集中部北半（南西から）



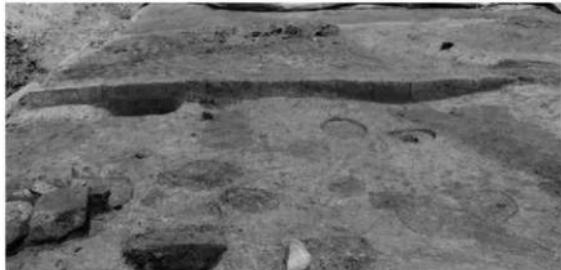
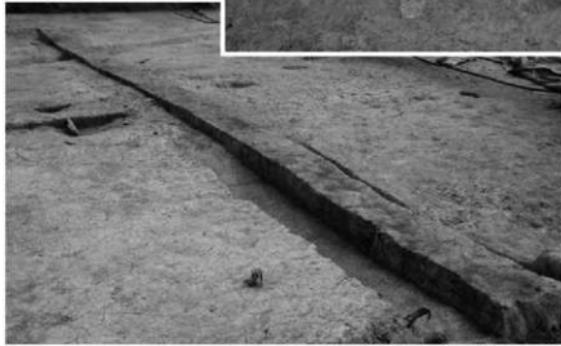
遺構集中部南半（北西から）



調査区南壁土層断面 A-A' (北西から)

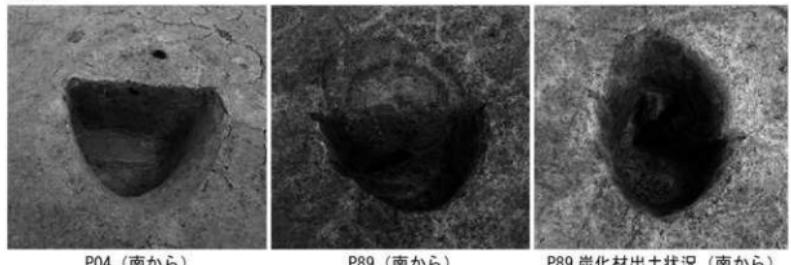


調査区南壁土層断面 A-A' 近景 (北から)

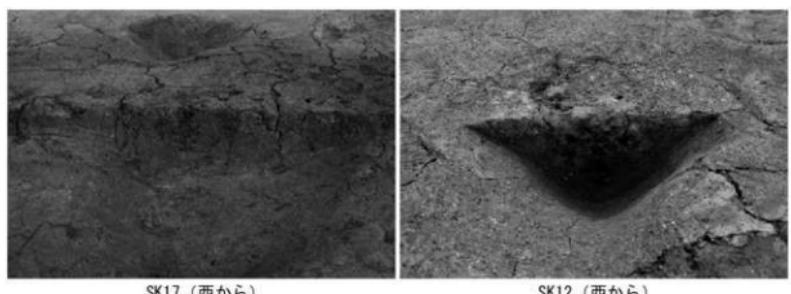
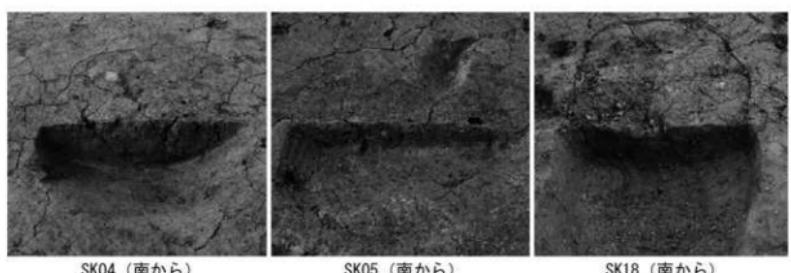
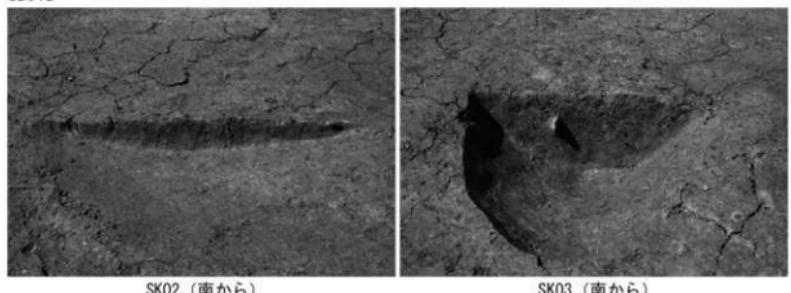


写真図版 6

SB01A



SB01B



SB02



P12 (東から)



P12 炭化材等出土状況（北東から）

SB03



P05 (南から)



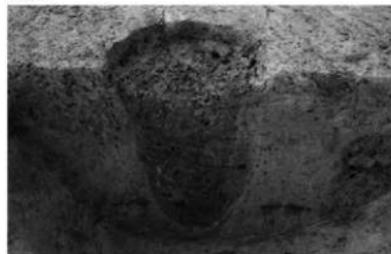
P13 (西から)



P71 (南から)

写真図版 8

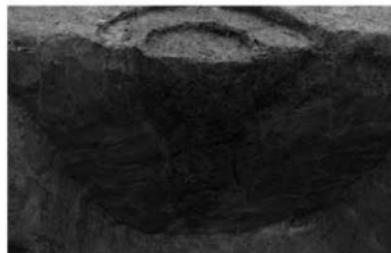
SB04



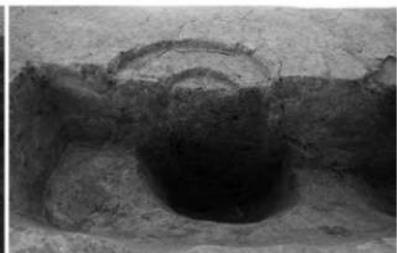
P20 (南から)



P18 (南から)



P26 (東から)



P25 (東から)

SB05



P36 (北から)



P30 (南から)

柱穴



P14 (東から)



P06 (南から)

土坑



SK07（南から）



SK15（南から）



SK01（南から）



SK19（南から）



SK14 鑿冠部分〈M3-2〉出土状況（南から）



SK14 鑿冠部分〈M3-2〉出土状況近接（南から）



SK14 断面（東から）



SK14 断面近接（東から）

溝



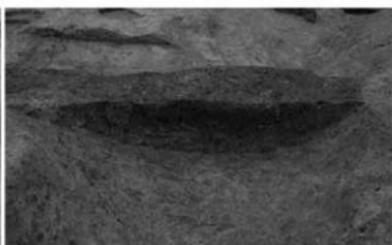
SD05・06 断面 h-h' (南から)



SD04 断面 g-g' (東から)



SD01・04 分岐部分北西壁断面 e-e' (北西から)



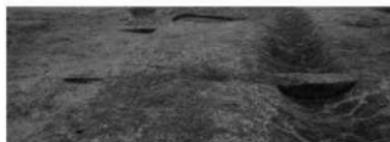
SD01・04 分岐部分南東壁断面 f-f' (南東から)



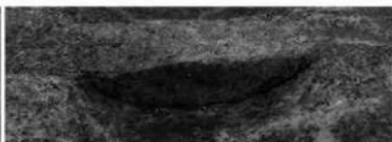
SD02 東部断面 b-b' (東から)



SD01 中央部断面 a-a' (南から)



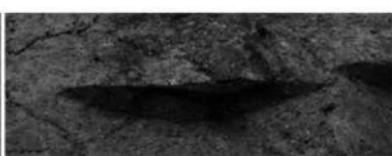
SD02 西部・SD01 南東部断面 c-c' (西から)



SD01 南東部断面 c-c' (西から)



SD02 西部断面 c-c' (西から)



SD01 南西部断面 d-d' (西から)

石組み遺構 SX01



検出状況 1 (東から)



検出状況 2 (東から)



検出状況 3 (北西から)



検出状況 4 (南から)



東西セクション断面 a-a' (南から)



南北セクション断面 b-b' (西から)

石組み造構 SX01



全景 1 (南から)



全景 2 (北東から)



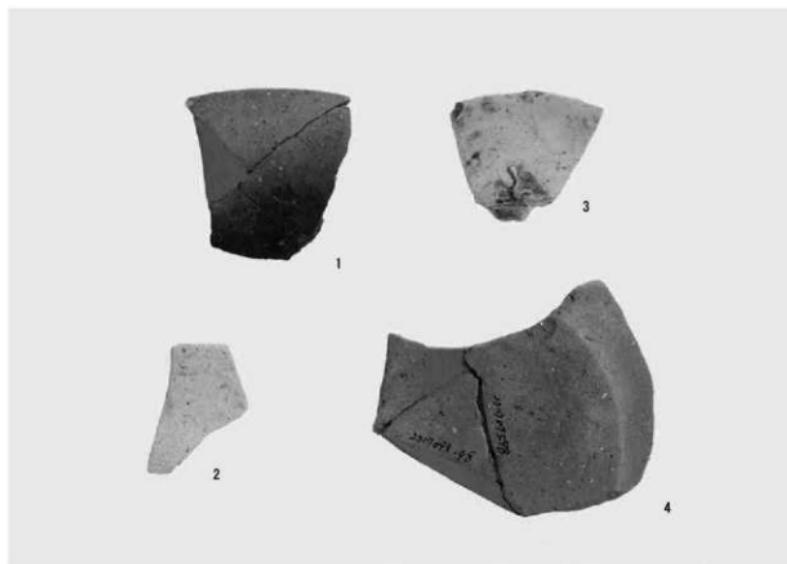
全景 3 (北東から)



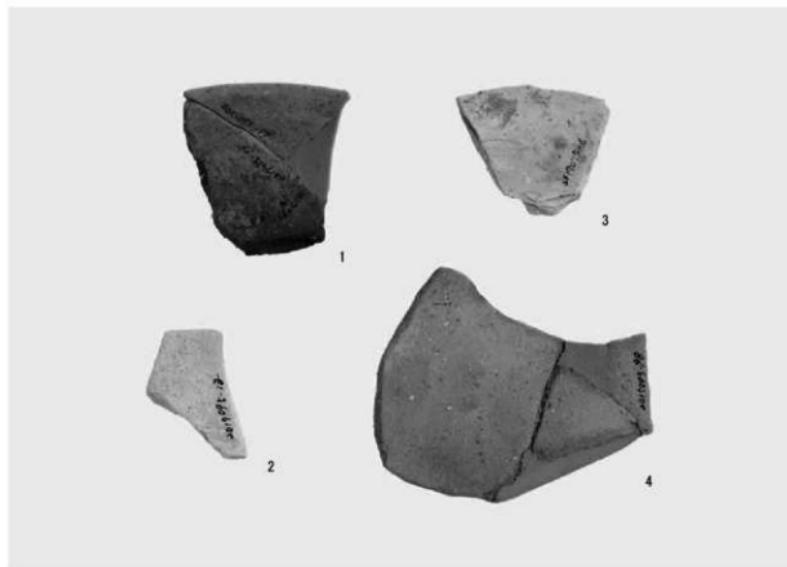
全景 4 (南西から)



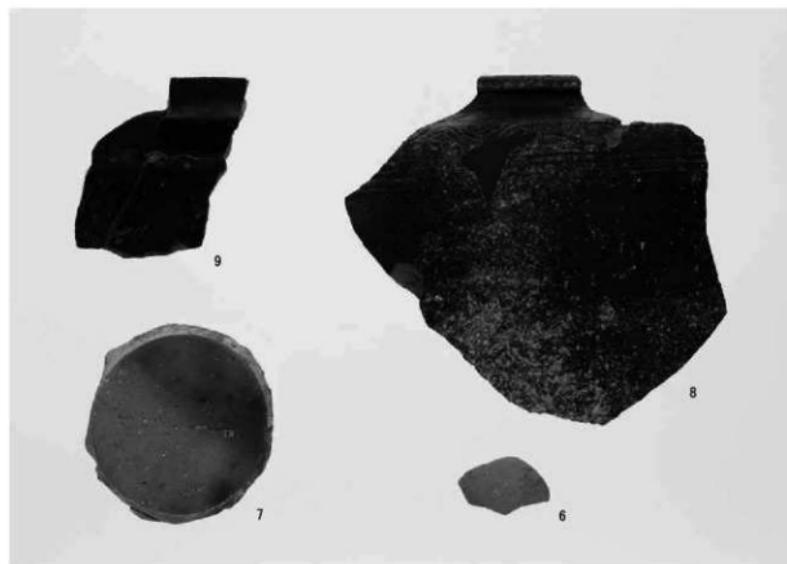
全景 5 (南東から)



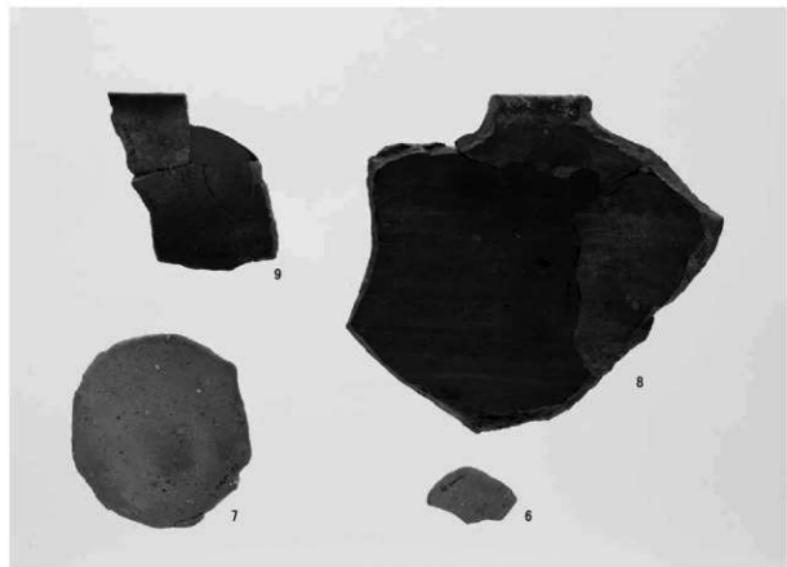
SB01B 出土土器類（外面）



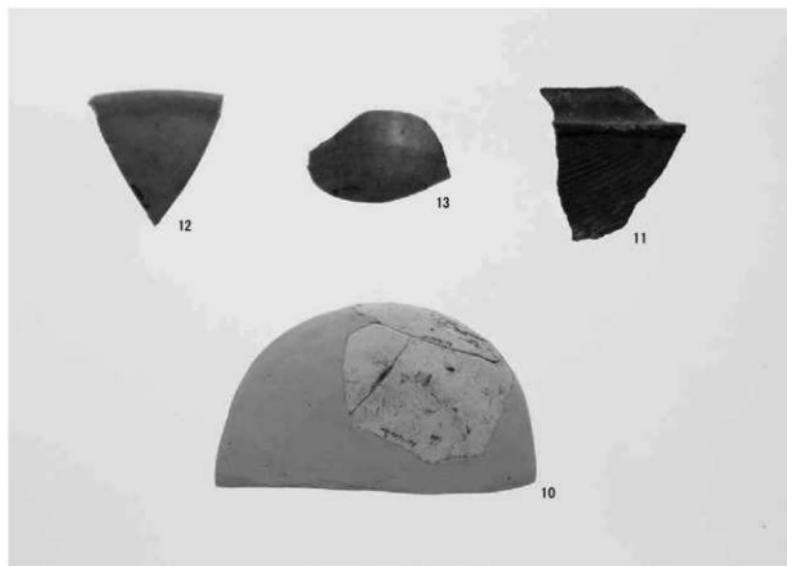
SB01B 出土土器類（内面）



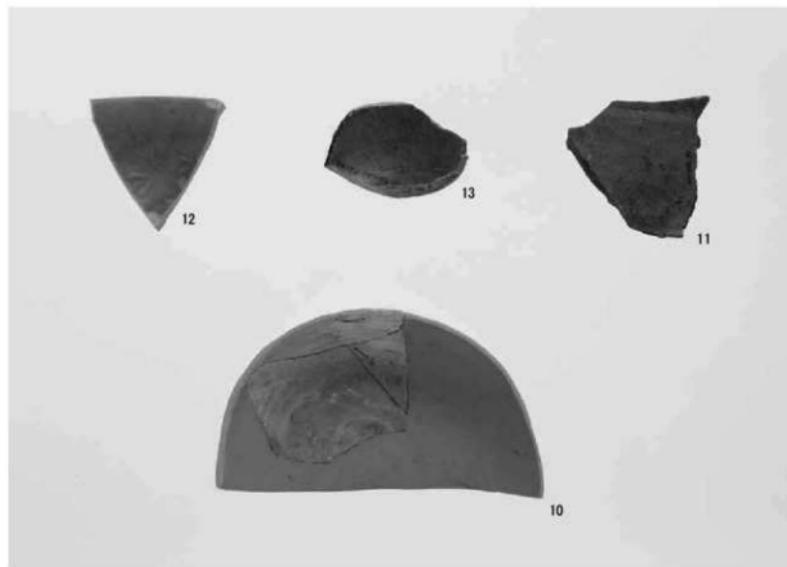
SB02 出土土器類（外面）



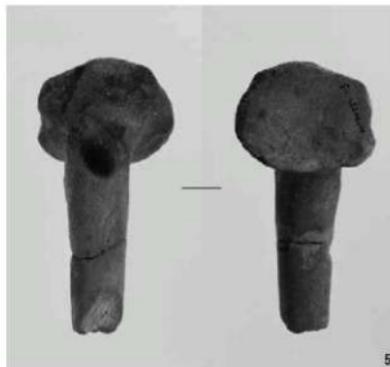
SB02 出土土器類（内面）



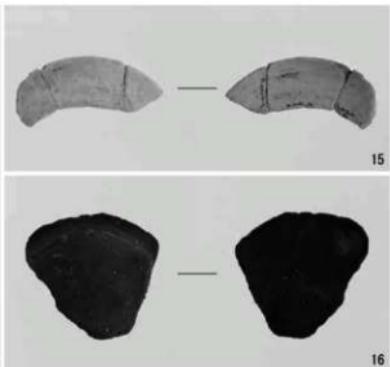
SB03 出土土器類（外面）



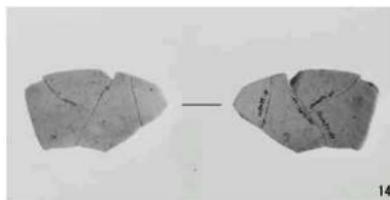
SB03 出土土器類（内面）



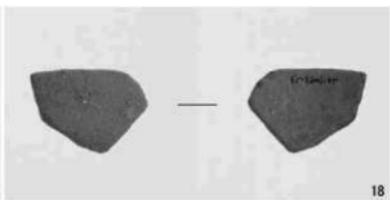
① SB01B 出土土器



③ 柱穴出土土器



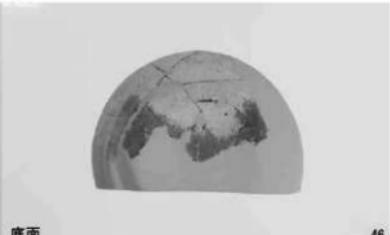
② SB04 出土土器



⑤ SK15 出土土器

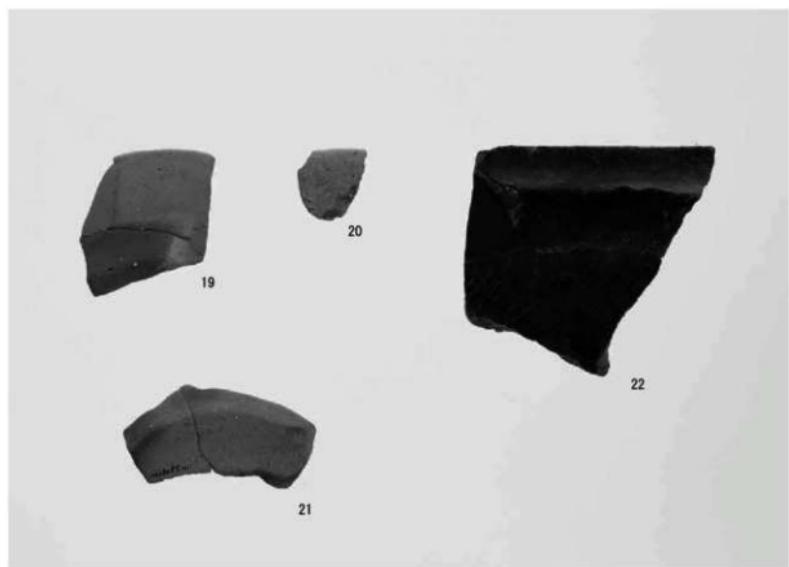


④ P06 出土土器

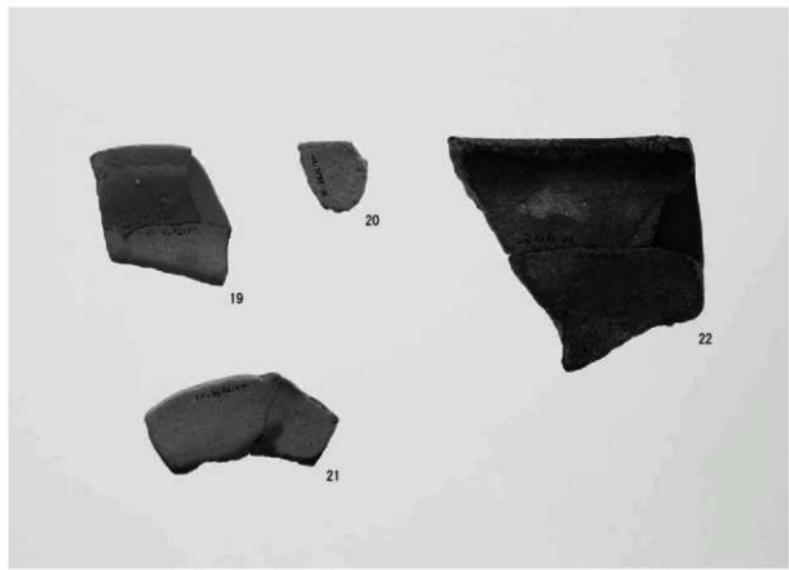


46

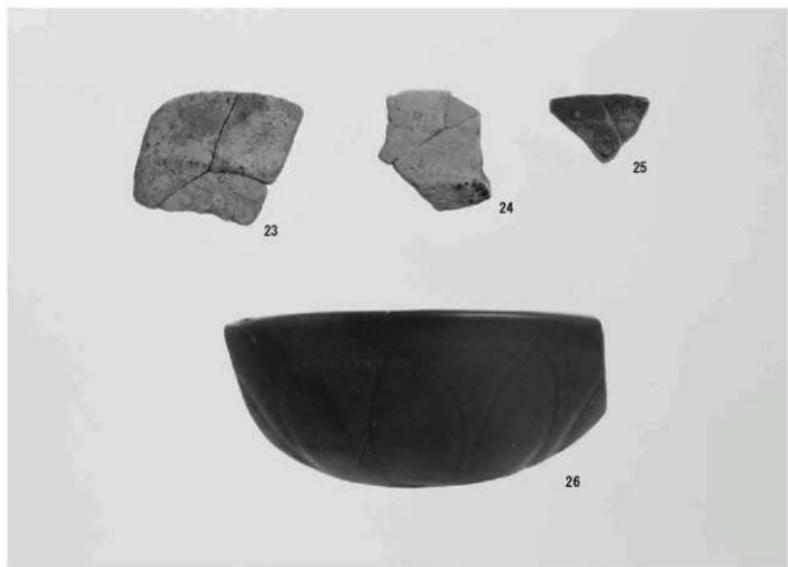
⑥ 確認調査 No. 8-2 出土土器



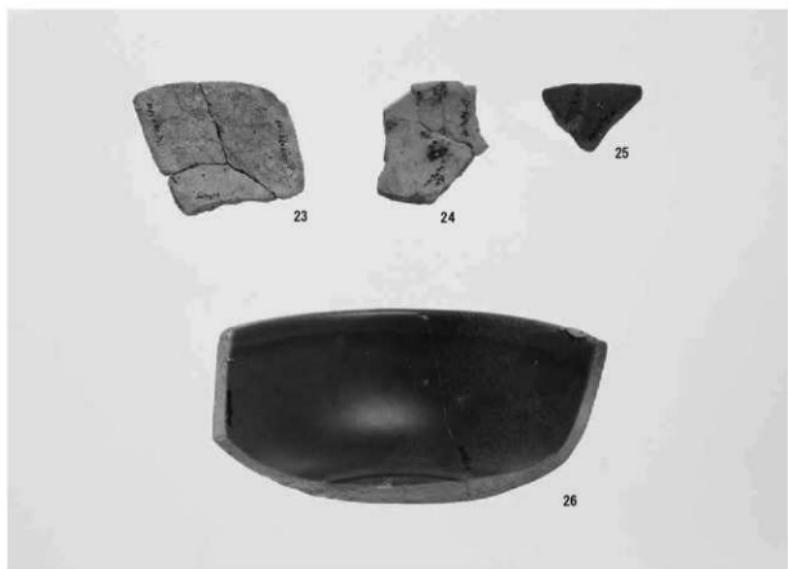
SD01 出土土器類（外面）



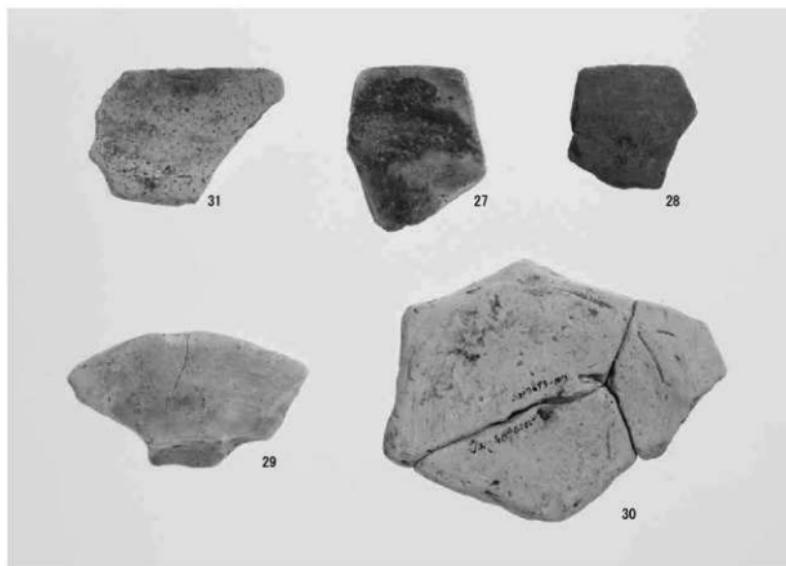
SD01 出土土器類（内面）



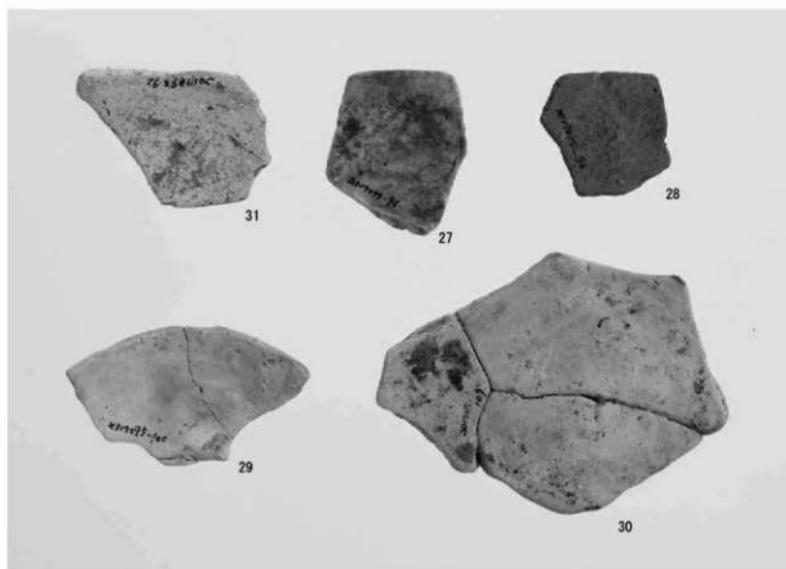
SD04 出土土器類（外面）



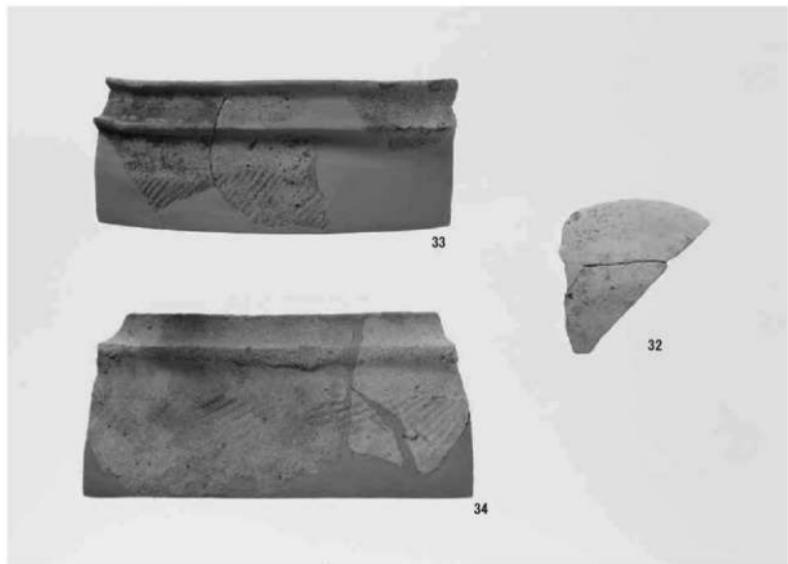
SD04 出土土器類（内面）



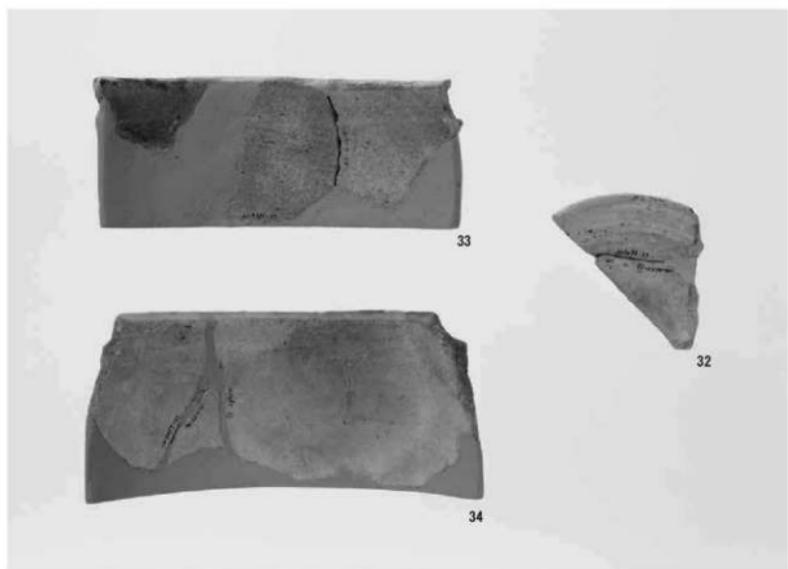
SX01 出土土器類（外面）



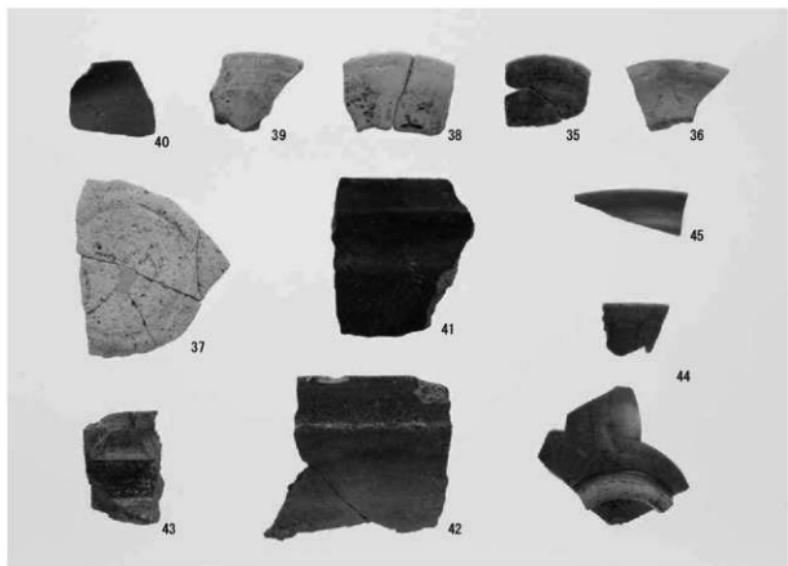
SX01 出土土器類（内面）



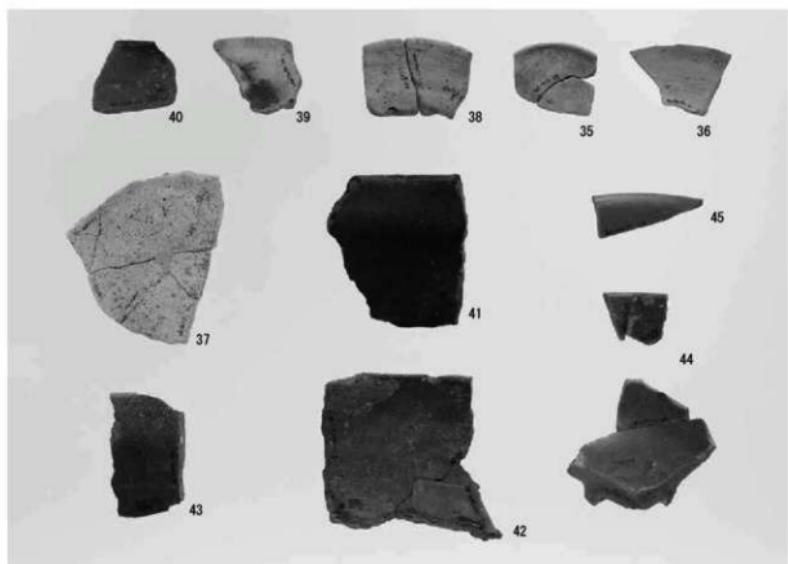
包含層〈炭化物・焼土層直上〉出土土器類（外面）



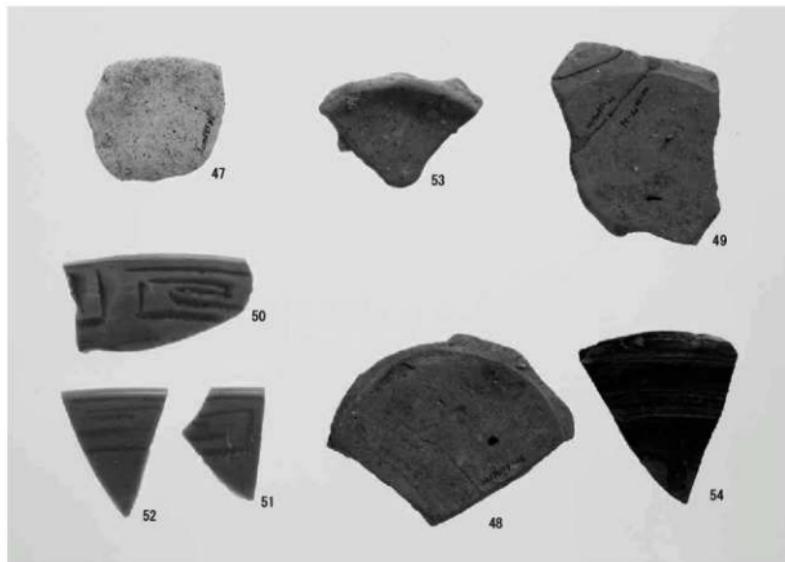
包含層〈炭化物・焼土層直上〉出土土器類（内面）



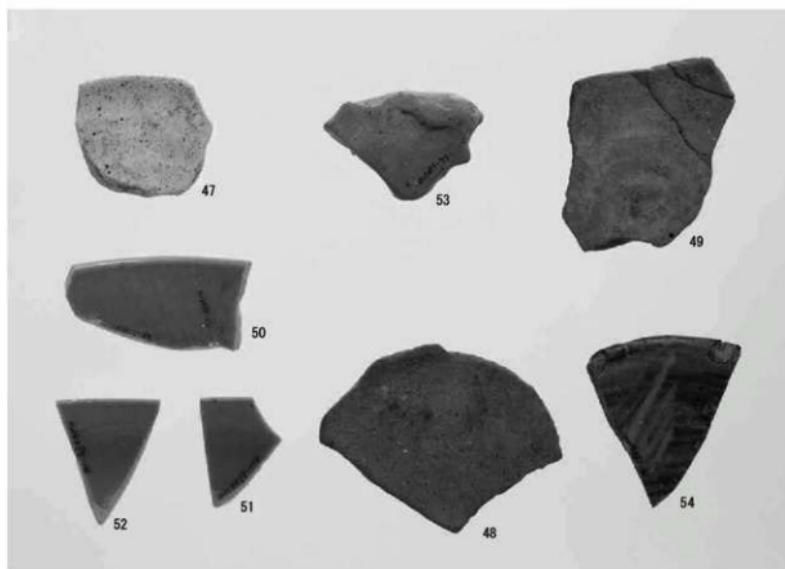
包含層（炭化物・焼土層）出土土器類（外面）



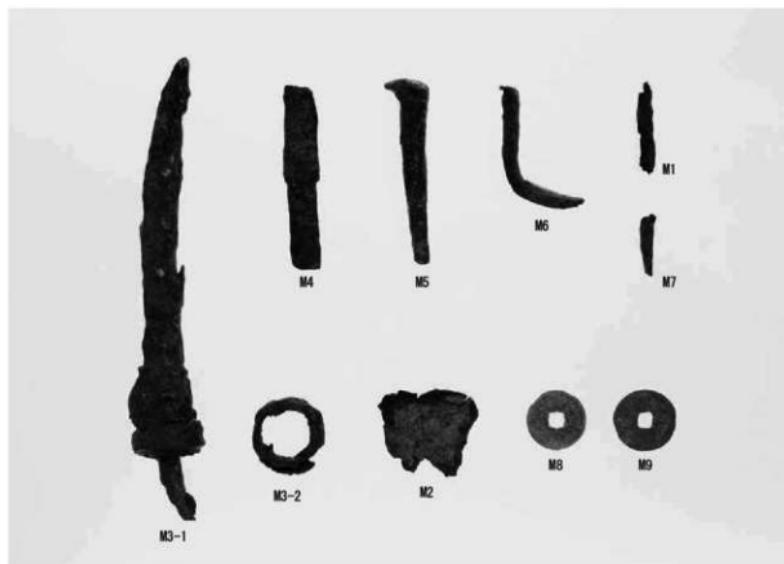
包含層（炭化物・焼土層）出土土器類（内面）



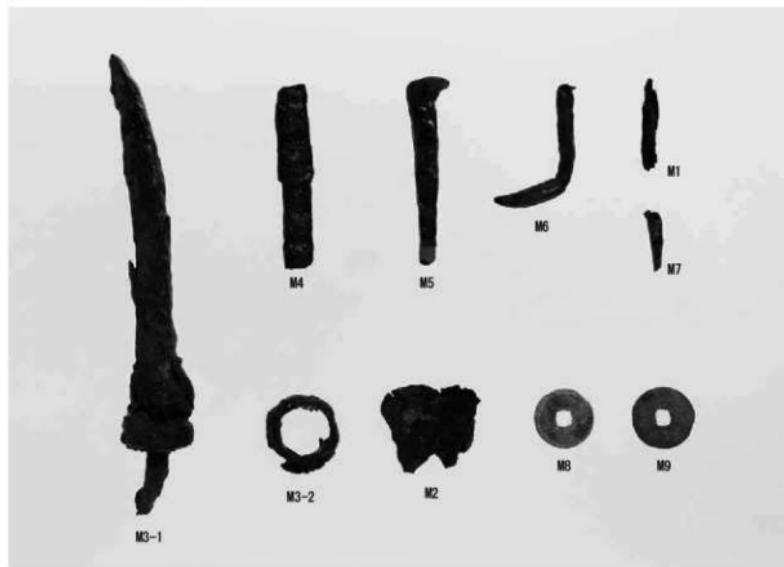
包含層（その他）出土土器類（外面）



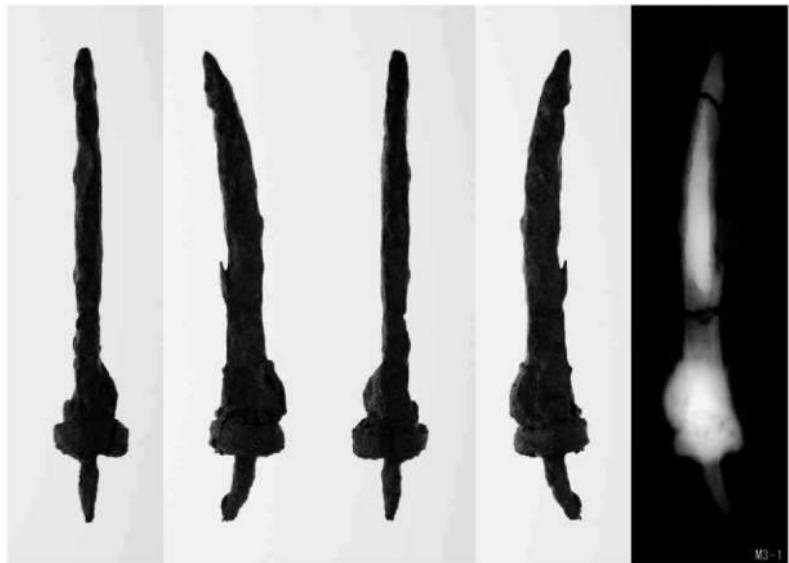
包含層（その他）出土土器類（内面）



出土金属製品（A面）



出土金属製品（B面）



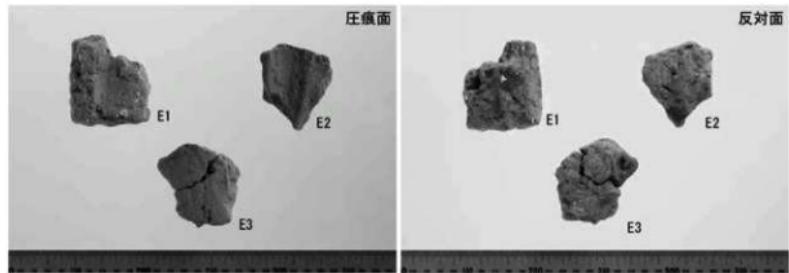
① SK14 出土鑿〈M3-1〉



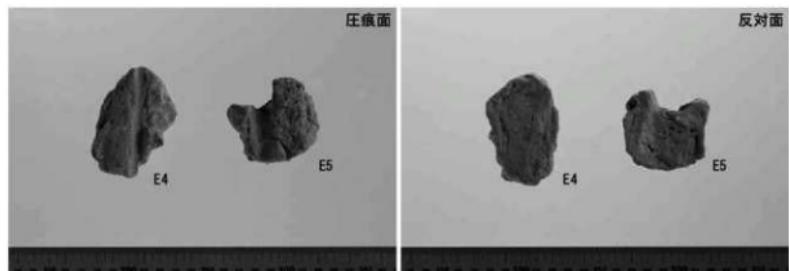
② SK14 出土鑿〈M3-1〉 茎部分



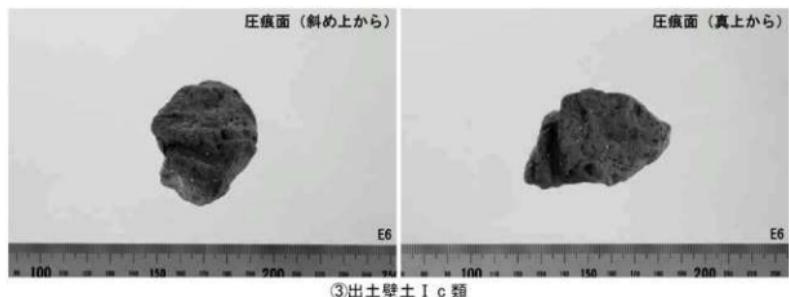
③ SK14 出土鑿冠部分〈M3-2〉



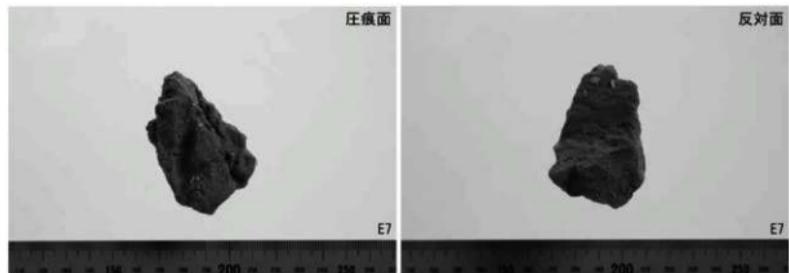
①出土壁土 I a 類



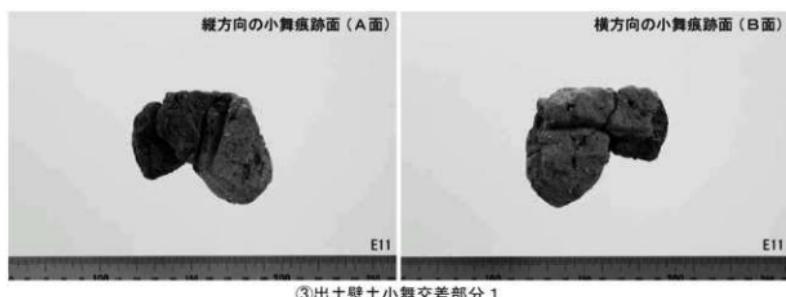
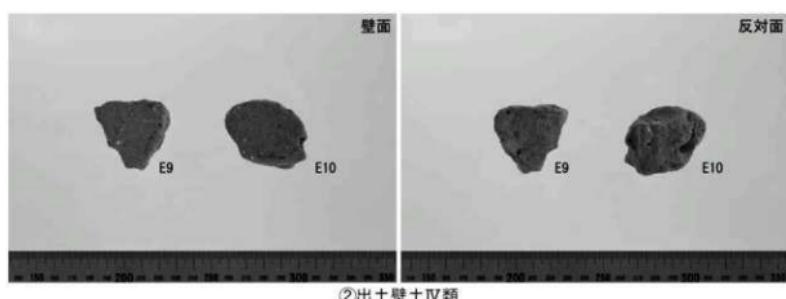
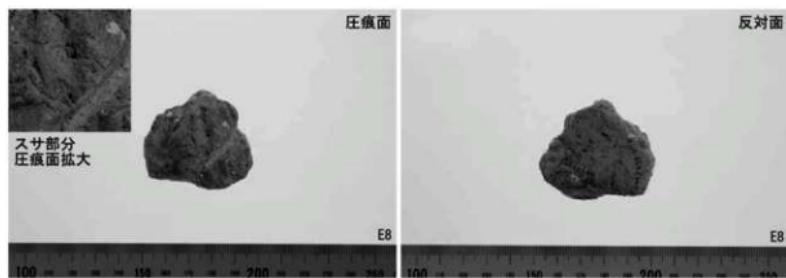
②出土壁土 I b 類



③出土壁土 I c 類



④出土壁土 II 類



兵庫県文化財調査報告 第517冊

洲本市

宮ノ谷遺跡

—（主）洲本五色線上加茂バイパス整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和3（2021）年3月26日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39-1
